UFOと宇宙哲学の研究誌

GAPニューズレター

No.62

GAPニューズレター　第62号目次

〈巻頭言〉直　感…1

スペース・ブラザーズはなぜ来るのか(完)　ジョージ・アダムスキー…2

〈メキシコ紀行〉古代マヤの遺跡の謎を探る

「太陽と神々の国」を訪ねて　久保田八郎…6

会員の声…40

予告　昭和52年度 日本GAP総会開催…46

「フレッド・ステックリング氏夫妻来日・講演」

日本GAP月例研究会案内…48

編集後記…49

★本誌掲載記事の内、海外関係のものは翻訳転載権取得済。
写真共禁無断転載。

GAPとは

GAPは「知られざる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々が「UFOの実相」について、知る機会を与えられるべきであるという原則に基づいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創設されました。彼の原則は「偉大なる」の人々時代の黎明を見出し、来たるべき時代に眼を転じることと、人間はすべて「コスミック・パワー」の子であり、そのパワーの法則が宇宙に満ちていることを理解をもって知ることにありました。この法則は他の世界(惑星)から来る友好的な訪問者からもたらされた「生命の科学」の研究と理解を通じて体得できます。

日本GAPの目的は「UFO・スペース・ブラザーズ問題を問いある人々に伝えることにあり、活動を通じて真実の理解と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心理念は次のとおりです。

この太陽系の他の惑星群から偵察を目的とした人類が地球を訪問しつつある。

他の世界から来る人々はこの世界の[illegible]ようにコンタクト(接触)しており、[illegible]にひんぱんに訪問している。

[illegible]の手を[illegible]の[illegible]を用いて、ペン・フレンドとしてコンタクトしている人々が存在すると思われる。

その実相は明らかにされていない。

ジョージ・アダムスキーが[illegible]の記事と[illegible]の実相の実を知るのに有益である。

本誌は他の団体、個人と対立するものではなく、[illegible]、実践と関係のない非営利刊行物です。本誌が実践に対して多少とも役立てば幸いです。

むかし数学の試験を受けたとき、微積分の問題は即座に解いたが、それより容易な筈のある問題がどうしても解けない。式の立てようがないので解答が出てくるわけがない。時間は刻々と迫ってくる。この問題が解けぬと不合格だ。四苦八苦して呻吟するうち、ますます頭が混乱し、立ち上がって大声でわめきたくなってくる。時計を見ると残り時間は十分間。ここでふと思いついた。もはや式を書いて計算する余裕はない。答だけを出そう。それが的中していれば、いくらかは点をくれるだろう。そこで考えるのをやめて瞑目し、心を静めて決定的な数字が心中に浮かび上がるのを待った。なかなか出てこない。しかし奇妙に焦燥感は消えて自分の内部が空白となった。その瞬間、ある数字が心中で浮かんだ。よしこれだ！　すぐに解答欄へ記入。とたんにサイレンの音。結果は合格。

もちろんこれは数学の正しい知識を応用した上での解答ではなく、いわば一種のまぐれ当たりである。しかし重要なのはまぐれ当たりでも当たらぬよりはよいということだ。これがはずれていたら運命が大きく狂ったかもしれない。

考えてみれば、人間の日常生活のあらゆる行動はすべて直感に頼っているとも言えるだろう。緻密な計算と計画により意図したとおりに結果が展開すれば、これに越したことはないが、その際、応用すべき計算法、計画法を〝思いつく〟のも、元はといえば直感である。つまり如何なる分野の知識を引き出すかを決定するものは、内奥の〝何か〟の指令なのであって、知識そのものではない。知識とは問屋から仕入れて倉庫にたくわえてある品物にすぎない。その中のどの商品を放出すれば即日完売となるかは、商品自体が指示するのではない。決定は商人の直感力にかかっている。直感と知識とは全く別物である。

人間の運命は多分に神秘的要素を帯びているし、カルミックな（カルマ的な）要因もひそんでいるだろう。それは人智で計り知れない複雑微妙な因果関係に支配されているし、ある種の人の運命が謎ですらあることは聖女ベルナデットの例でもわかる（UFOと宇宙」昭9月号・10月号の

直感

「奇跡ノルールドの聖泉」参照）。

しかし日常の言動における〝フトした思いつき〟すなわち直感が一生を大きく左右することもある。ヒットラーがポーランド侵略をフト思いついたとき世界の運命は激変したし、ミッドウェー海戦でわが軍の司令官がフト考えた方法は日本の大艦隊を悲惨なものにした。アフリカの砂漠で展開したロンメル元帥とモンゴメリー将軍の壮絶な一大決戦は、両雄の直感力の戦いであったといわれる。

戦争ばかりではない。個人の人生も同様である。会社または役所を多年実直に勤めあげた人が、ある日フト思いついて勇退し、独立して事業を営んだ結果、大成功もすれば大失敗もする。もとはすべてフトした思いつき――直感である。

これは知識とは直接の関係はない。肉体内部からわき起こる一種の衝動、声なき啓示、ある種の圧力なのである。この「ささやき」から人間はのがれることはできない。何らかの形であらゆる人間はこの直感という現象を起こしながら生きている。これを全く感じなくなったときは死なのだ。人間とは直感発生器なのである。

とすると、あるフィーリングが起こった場合、従うべきか無視するかで自分が生死を決する重大な岐路に立つこともあるだろう。知識の蓄積によって正確な判断をくだせると思っていても、知識情報の内容が常に正しいとは限らない。その正誤を選択する大元はやはりフィーリングである。そしてフィーリングそのものも常に正確とは限らない。誤った印象もあり得るのだ。

どうすれば正しい直感により正しい知識が得られるか。これはアダムスキーが百万だら唱えている如く、心と内奥の宇宙の意識とを一体化させる以外に方法はない。つまり肉体内部に宿る「絶対に正確な実体」「宇宙的な英知ある実体」に頼るのである。その実体が意識的なものであることは分子生物学を少し学べばわかる。もしその実体が意識的なものでなければ、複雑きわまりない人体が意識的な有機体として存在する筈はない。

心自体の知性が如何にいい加減なものであるかは、前述の如く誤ったフィーリングに従って身をほろぼす例でもわかるが、何よりも睡眠中は心も休息し（これは心の一種の死でもある）、その間の肉体の機能に関して心は全く関与しないことでもわかる。睡眠中どころか覚醒中でも心は肉体の働きについてさほど自覚してはいない。いわんや内部の啓示の選択能力も普通の状態で心が身につけるわけがない。そして人間はそのままの状態で生きているのである。

直感――これほど重要なものはないにもかかわらず、これを重視することの意義を現代の学校では全く教えないし、ましてや絶対的な教師ともいうべき内奥の意識の存在とその指導にゆだねることの重要さを教える教室はこの世界にはない。あるとすれば正規の学校ではなく、インドかチベットの秘境に存在する聖者の私塾ぐらいのものだろう。

しかし科学がより以上に進歩して、もっと人体の秘密が解明されれば、内部の意識的実体の存在に対する認識が一般化するだろう。だがそうなる前に科学の異常な誤用によって世界は破滅するかもしれない。倦むことなき核爆発によりすでにその徴候は現れている、ともいわれている。

科学力により人間がフィーリングで生きるようになって宇宙的方向に進むか、大量に死滅するかは、今世紀中にきまるだろう。

とにかく人間の運命を決するものはフィーリングであって、知識は二次的なものにすぎないことは確かである。この理論は科学的であって、思弁的ではない。

スペース・ブラザーズはなぜ来るのか（完）

ジョージ・アダムスキー

●1965年４月10日、米ミシガン州デトロイトで行なったアダムスキー最後の講演の録音テープの完訳（本号でおわり）

〈先号「質疑応答」の続き〉

質問　あなたは、いわゆる道徳的な意識と〝宇宙の意識〟とを同一視しているのですか？

答　違います。道徳的な意識はマインド（心）に属するものです。宇宙の意識は人間の感覚における道徳というものを知りません。

質問　でも、あなたが〝意識〟とおっしゃるとき、それは人間の自己意識のことを話しておられるのではありませんか。

答　そうですね。普通言う意識は自己意識です。自己を感じるエゴは、それ自体の神から分離しています。

質問　あなたのお言葉から推測しますと、生命は神であり、神は生命であるというのが正しいのではありませんか。創造的な力が生命なのですか？

答　私たちが〝神〟または〝エホバ〟または〝無限者〟と呼ぶものは、人間が常に知っている生命そのものです。それは永遠そのものです。物体はその〝生命〟なる因から出た〝結果〟にほかなりません。それは（生命は）あらゆる現象の因です。電気そのものは見ることができませんが、それを否定することはできませんし、しかも電気は多くの物の原因となっています。たとえばここにあるテープレコーダーを作動させますし、私の声を録音しますし、この会場を照明したり、多くの家庭に音楽や喜びや調和をもたらしたり、冷たくなった身体を温めたりします。

しかし電気はそれを用いる人の知能によって、どのようにもなります。電気を応用して人間を殺すこともできますし、一方、発電所から出ている電線に電気を通じさせるならば、人間の住む町に恩恵を施すことになり、その結果はすばらしいことになります。

しかし、うっかりしてソケットの中へ指を突っ込んだりして指をヤケドする人もありますが、同じ電流は別な場所へ流れて、別な人々はそれを利用してレコードを鳴らしたりテレビをつけたりして楽しみます。

つまり、電気を正しく応用しようとすれば、知性を持つ必要があるのです。ここに〝カルマ〟が入り込むことになります。これは誤用すれば代価を支払わねばなりません。電気そのものは人間の気まぐれや意志にみずからをまかせます。だからこそ、人間は電気の利用に対して各自が他人以上に責任を持つ必要があるのです。というわけは、人間は知性をそなえた道具として無限の可能性を持つからです。つまり人間は神に似ているのです。〝父〟がそうであるように、〝子〟もそうなのです。

質問　私たちは〝神〟を見ることができるでしょうか。

答　神を見ることができるか、と？　私があなたを見れば、〝神〟を見ていることになるのですが――。

質問　でも私たちはみな永遠を求めていますし、そこには天国へのつながりがあったり、天の父と直面するともいわれています。そんな時が来るのでしょうか？

答　イエース。あなたが自分のマインド（心）でなく、コンシャスネス（意識）を理解すれば、そのようになります。あなたのマインドにコンシャスネスを理解させなさい。この世であなたが心に留めねばならぬ唯一の事は、コンシャスネスと直面することです。

私はルーサー・バーバンクという人を決して忘れません。彼は多くの植物を改良する仕事をやりました。自然界との彼の仕事は、神自身の創造の仕事そのものです。ある日彼は政府の長官のいる場所で新聞記者から質問を受けました。

「あなたは神を信じますか？」

彼は答えました。

「神を信じるかって？　私は神と共に働いていますよ。毎日、神に直面しています。神が私に仕事の方法を教えてくださるのです」

このことは神に対する冒瀆とされ、みんなは彼を無神論者ときめつけて、新聞に書きたてたために、あらゆる人がこの老人に反目したのです。

ところがサンフランシスコで一長官がある会議の席上で彼に講演させました。まず彼は自己紹介し、絶対的な真理とは何かを説明したのです。しかし一度無神論者の烙印が押されたら、容易に消せません。でも彼は真理について語りました。そしてその後も人々は彼を雛儀な目にあわせたために、心臓マヒで天寿をまっとうせずに死んだと言われています。

神は一枚の草の葉の内部からさえも、微笑して人間に語りかけます。あなたは草の葉を見ても神に直面することができるのです。大自然が働いている場所ならどこでも神を見ることができます。

私があなたのご主人に会ったことがないとすれば、私はご主人を知ることはできませんが、その息子さんには会っています（注訳＝だからその息子さんの顔の中にご主人の面影を知ることができるの意）。

万物は神と呼ばれる創造主の創造物です。その創造の中に私たちは神を見るのですし、だからこそイエスが言ったのです。

「見なくても信ずる者は幸いである」と。

私が話す言葉や、あなたがたが出される質問は、それが口から出るまでは決して知られることはありません。私たちはそれを知るように教育されていないからです。しかしその沈黙の印象が来なければ、それが音響となる前に私たちは言葉を発することは不可能です。

何を言おうかという印象がなければ、言葉が口から出るはずはありません。その沈黙の印象は神の口から出るのです。そうした印象によって私たちは生きているのです。神はどんなに人間に接近していることでしょう。

私たちは神を見ることができるかと？肉眼は結果であり、みずからを結果の世界へ導いています。窓ガラス自体は物を見ることはできません。窓ガラスを透して物を見ているのは、ガラスのうしろに立っている人間です。内部の意識が肉体から離れても、窓（肉眼）はまだ存在します。医師がその眼を取り出して、別な人体に移植すると、その人間はその眼で見ることができます。そこでわかるのは移植された肉眼はまだ使えるのですが、

死者はなぜその肉眼があっても見えないかということです。本当に〝見る人〟が肉体を離れてしまったからです。したがって、あなたが真自我の中に〝見る者〟を見るならば、それは神と直面していることになるのです。

質問　あなたのお話を聞いていますと、生命とは宇宙を旅する美しい冒険だということがわかります。

答　生命というものは実際には定義づけることは不可能です。それを定義づけようとすれば、それは〝具体的な〟もので物理的なものだということになるでしょう。それは万物を支えるもので、創造力を肉眼で見ることはできません。意識で見る必要があります。意識はすべてを見ます。心というものには制限があります。人間は万物を意識でなく心で見ようとします。私は眼前にある物を心でなく意識で見ることができます。意識が物事を設定した後に私の眼が見始めるとしても、心が正しく訓練されていれば、それは進歩してゆきます。私は今このテーブル上に芽を開こうとしている種子を見ることができます。しかも私はトランス状態にあるのではありません。青写真が眼の前で展開し、そのレイアウトにより一個の物体がついには形成されるでしょう。いいですか、この小さな種子からあらゆる精緻な糸が成長し、タコの手足のように拡がります。それはあまりにも精緻なので、肉眼はもちろん意識で見ることもたいへんです。それらの糸がハダカ線であるとして、互いに接触すれば、すでにパワーが通じているために、燃えてしまうでしょう。ところが各線が互いに干渉しないで完ぺきに配置されて絶縁されていれば、いつかは接触するでしょうが、それでも大丈夫ということになります。

神経というものは空気または何かにさらされると痛みますし、交差すれば2本の焼けた針金みたいに燃えます。したがって最後的に人体を形成させるのはこの絶縁物なのです。私はそのすべてを見ることができます。私が意識的になれば、意識的にその状態を見ることができるのですが、あなたがたには見えません。

地球上の人間はその方法を知りませんが、しかしだれでもそれを学ぶことはできます。創造主にそれを示してもらいさえすれば――。どちらを選ぼうと人間の自由です。人間は微小な種子から人体の完成に至るまで、創造を見ています。一枚の葉や花の創造までも見ています。植物にしても同じことで、その創造を見ることはできますし、神の英知が働いているのを見ることができるのです。

質問　一滴の水は、その源泉との一体化の意識を失わないでいれば、転がり行くにつれて泥を吸収することはないのでしょう。それは元の完全さを保つのでしょうね。

答　そうです。それで一つの事がわかります。私たちが泥とかチリとか言っているものは、実際には泥やチリではなく、私たちがただ好き嫌いによってそのような名をつけただけであって、広大な意識という海の中へ入り、吸収されてしまえば、それは突然その海と一体化し、それに加えられていた審きはもうなくなります。泥はそちらへ行け、他の物はこちらへ来いというような差別は人間の好き嫌いによる心の側の誤った考え方です。

質問　そうすると意識の海というのは肉体の集合体を意味するのですか。

答　そうです。言いかえれば、フォームとしての人間のあらゆる面が存在する必要があるのであって、さもないとフォームは完全になりません。フォームが完全な表現体になるためには、あらゆる必要な物を集めます。すると、心が正しく導かれるならば、それは目的に役立つのです。心は両者（フォームと意識）の仲介者であるからです。心は両者の息子です。フォーム（肉体）は母で、母性原理であり、意識は父性原理です。そして三位一体を形成する三番目の部分が二者から生じますが、それを私たちは心と呼ぶのです。さてその息子は成長して両親と共に生活してゆくか、あるいは自分の道を進んで放蕩息子になり、人生の困難さを知り、やがて両親の元へ帰ってきます。一方、混乱して迷ってしまい、全然帰らないのもいるでしょう。しかしミネラルはいつもその元の状態に帰り、別な目的に役立ちます。わかりますか？

質問　ミネラルが――？

答　そうです。これが一般人の理解しにくいところで、しかも愉快な事ではないんです。この事を伝えたのはイエスだけではなく、老子、孔子、モハメッドなども言っています。

イエスは言いました。「肉体を斬る者を恐れないで、魂を斬る者を恐れよ」と。聖なる魂とは両親から生まれた息子で、それを私たちはエゴまたは人間と呼んでいます。それはそれ自体のエゴの中で完全に失われることもあり、記憶の千分の一をも培いません。そして記憶を持たない人間は〝無〟です。これが今日、だれもが過去世のただ一つの体験すら思い出せない理由です。

心は記憶を保ちませんが、意識は保ちます。人間の真自我である意識から分離してそれを借用しない限り、意識が過去世からの記憶を本人に伝えても、それを借用しないでしょう。

ちょっと考えてみましょう。私が今夜、昨夜と同様に寝ると、そのあいだにカミナリが鳴るとします。しかし私はその音を聞きません。私はぐっすりと眠ります。するとみんなが朝になってそのことを話してくれます。道路に水たまりがあるのを見て、昨夜雨が降ったことを知りますが、それだけのことです。そこでみんなが言います。

「あの音を聞かなかったかい？　カミナリが鳴ったんだよ」

私は答えます。

「全然聞かなかったね」

これを言いかえれば、私は実際には死んでいたのです。私が眠っているあいだに人が私を室外へかかえ出してどこかへ置いても自分では気づかぬでしょう。つまり私の心は実際には死んでいたのです。それは覚醒していなかったのです。

そうすると眠っているあいだに私の体の世話をし、朝になって起こしてくれたのはだれでしょう？　それは意識です。人間の眼に見えない意識です。他人は私

の肉体を見るだけです。朝になって私は眼を覚まし、心は外を見て「ああ、雨が降ったな！」と言います。すると家の者が昨夜雷雨があったと話し、私は体験しなかったけれども、その情報を受け入れます。しかし私の心はそんな出来事については何も知りません。それは死んでいたからです。言いかえれば、心はどうしても死なねばならないのです。人間は眠り、すぐに眼覚める。しかし生命は停止することはありません！

質問　つまり生命だけが存在するとー。

答　心という道具は休息する必要がありますが、意識は休息、疲れ、死などを知りません。活動の分野でこの肉体を永続させるものは意識です。肉体は結果であり、それは結果の世界に自分を貸しているだけです。だからみんなが言うのです。「何か具体的なものを示せ」と。

結果としての物は具体的なものとされていますが、実際には具体的ではなく、それは崩壊します。そこで自分の心の状態以外には何も知らず、その心の活動を促進するものを見つけ出そうとしてやまない人は、「具体的にそれを示せ」と言うわけです。なぜなら本人にとって具体的なものとは〝現象〟であるからです。樹木、人間、大地、肉体などは触れることができると考えられていますから、これらを本人は具体的なものと呼びます。

しかし本人は自分の腕に鼻を叩かせる力を見ることはできません。彼は道路を走る自動車を見るのと同様に、動く物しか見えません。走る車を見て、そのピストンの上下運動や急速な爆発や圧縮システムを、直接眼で見ることなしに、見ることのできる人が何人いるでしょう。私の言う意味がわかりますか。私たちは生きることはもちろん、学ぶことさえも始めてはいないのです。私たち人間は実際には夢の国に住んでいます。それで、どうしてこんな状態になったのだろうかと私はときどき考えてみるんですがね。

というわけは、聖書にこう書いてあるのです。最初の創造で神は創造した。神は同時に男と女を創造したと。これは家を建てる前に描く青写真と同じようなもので、続いて神は第二の創造で人間を出現させた。これで分割が生じます。果たしてそのとおりだったのかどうかは私にわかりませんが、とにかくそう書いてあります。まず神はアダムを創造したと。そのとき神は老人を考えたけれども、創造されたばかりだから若かった。これを独りですごさせるのは淋しいというわけでその連れとして女を創造しようと思ったけれども、男を創造したのと同じ方法ではなかった。その結果、多くの女が首を切られた。ニワトリの首を切るように、です。というわけは、女というものは魂を持たないので、それを殺しても罪にはならないという考え方が長くあったからです。しかし男は魂を持っていた。「神が男の中に生命の息を吹き込んだ」とあるからです。だから男には魂があったのです。これが長いあいだ男女間の相違でした。そしてついに神はアダムの肋骨から女を創ります。最初の伴侶が与えられました。しかし男の体から肋骨を取り出すのは痛いですから、男を深い眠りにおちいらせました。そしてそのあいだに骨から人体を彫り出したのですが、これは粘土のように細工が楽ではありません。ナイフか鋭利な刃物で刻まねばならぬとき、それがすべると、そのたびに反りを生じます。だからその創造以来、人体には曲線があるのです（訳注＝ここは冗談で言ったもの）。

しかし神は男を眠りから覚ましたとは聖書中のどこにも書いてありません。だから人間はいまだに眠っているのです。したがって人間は自分や人生を見つめるときに、夢を見ているのではないかとか、人生とは夢にすぎないのだと感じるのです。女でもやはりまだ眠ったままです。だからこの心なるものは生命に対してまだ充分に眼覚めていないのです。そこで、ときとして心はあらゆる物を全く現実的に感じるかと思うと、別なときには、何かがやって来ても「はてな？」と思ったりするわけです。

この人生全体は夢のように見えます。ときとして人生はつまらないもののように見えるし、ときには生き甲斐あるようにも見えます。それで他人や伝導師の言うことを信じてみても、彼らは自分たち以上に知ってはいません。結局、彼らは自分と同様の人間なのです。

結局、確実なものは存在しません。しかしあなたがたが意識的に目覚めるならば、確実なものが出てくるでしょう。人間はいまだに自分の真自我――肉体の創造に責任のあるもの――から分離しています。そして他に対する審判者になっています。

しかし人間はひとたびそのことに気づくならば、理解が始まり、他を審かなくなります。聖書に返りましょう。聖書が真理を語っているとすれば、そこに述べられたパタンを見ることができます。

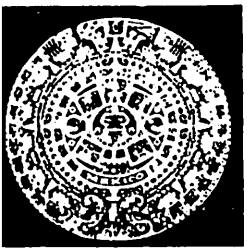
ここには哀れなアダムとイブがいて、神が創造したとおりに完全なハダカで歩きまわっています。衣服はまだ知られていません。しかし自然がアダムとイブに法則を押しつける時が来て、イブは女らしさを身につけるようになりました。二人はそのような事になるとは教えられなかったのです。二人は何も知らなかったために、イブがアダムに、どうしてこんな気持になったのかしら、と尋ねてもアダムにはわかりません。しかし自然はあくまでも自然であり、二人は気持を起こし続けて、その最初の〝体験〟が人間の堕落と呼ばれたのですが、二人は地上に人間をふやすために来たのですから、それは堕落ではありません。しかし二人はそれを堕落と思い、恥部と思う部分をイチジクの葉でかくします。しかもついにはハダカでいることすら恥ずかしく思い、ヤブの中にかくれたものですから、神が二人を呼んで「なぜかくれるのか」と尋ねますと、「私たちはハダカですから」と答えます。そこで神は「だれがおまえたちをハダカだと言ったのか？」と言います。だれもそんなことを言わなかったのに――。

要するに二人は自分で自分を審いていたわけで、その審きのために二人は完全な生命の平等を保っていたエデンの園か

（三十九頁へ続く）

「太陽と神々の国」を訪ねて

〈メキシコ紀行〉古代マヤの遺跡の謎を探る



久保田八郎

既報のとおり、ユニバース出版社は去る八月十二日より二週間、「中米宇宙考古学遺跡の旅」を実施した。総人員二十六名で北米ロサンジェルスを振り出しに、メキシコ市、オアハカ、ビリャエルモーサ、メリダ、カンクン、メキシコ市、サンフランシスコというコースで歩き、その間、パロマー・ガーデンズ、パロマー天文台、米国GAP本部、モンテアルバン遺跡、ミトラ遺跡、パレンケ遺跡の例の古代宇宙飛行士に似た像の浮き彫りを施した王墓の石棺のふた、ウシュマル遺跡、カバー遺跡、チチェンイツァのピラミッドと古代の天文台、生け贄の池、テオティワカンの太陽のピラミッド、その他を見学し、メキシコ市ではアダムスキーの高弟であったマリア・クリスティーナ・デ・ルェダ夫人に会見して貴重な情報を入手、サンフランシスコを経て、二十五日夕刻、無事羽田空港に帰国した。途中、二十日はユカタン半島最北端の美しい海岸町カンクンで一日休養し、限りなく透明なカリブ海で海水浴に興じた。めまぐるしい日々であったがグループの大半の方はGAP会員であり、きわめて協力的で、トラブルや事故は一切発生することなく、楽しい旅を終えることができた。参加者各位に深謝する次第である。以下、日程順に記してみたい。（掲載した写真の大部分は筆者が撮影したもので、それ以外はセルフタイマーを使用したり、ガイドや添乗員その他の方に撮って頂いた）

× × ×

八月十二日午後五時半羽田を出発した一行は、ジャンボSP機で一路ロスを目指して飛び、九時間半の飛行の後、同日午後ロサンジェルス空港に到着した（時差のために米国は一日遅れとなる）。

半日、バスで市内観光後、ハリウッドのホテル・ホリデイ・インへ入る。私は会社の資料として大量の図書を購入する必要があるので、直ちに単身で市内最大の書店「ビックウィック」へ行き、ここでUFOとミステリー関係の図書を片っぱしから物色し、約六十冊を購入して日本へ送るように手配をした。UFO関係の図書は少なくて、むしろ一般ミステリーや超能力関係の本が多いのが目についた。航空便では送料が高くつくと思い、船便を指定したが、後日、帰国後、驚いたことに私よりも図書が一足先に着いていた。やはり航空貨物便で送ったらしい。

●ハリウッド。舗道の星形マークの中心部に有名俳優の名が刻んである

●出発前，羽田空港にて

●ハリウッドの中国風映画館

便利な世の中になったものだ。

一仕事をすませて、夜は数名の人と一緒に繁華街を散策。ハリウッド地区のために何となく華やかな感じがする。

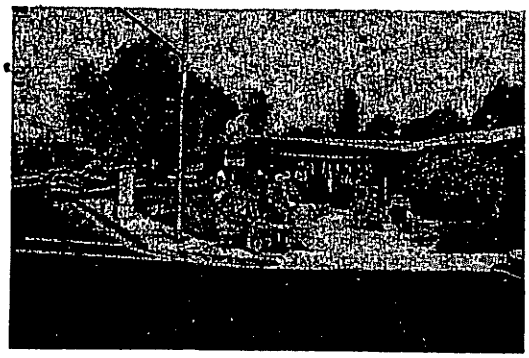
パロマー・ガーデンズ、天文台、米GAP本部を訪問

翌十三日九時にバスでホテルを出発。今日はパロマー天文台を見学したあと、時間的余裕があれば米GAP本部へ寄ることになっており、大体に午後四時ないし五時頃に立ち寄るつもりだと、昨夜、アリス・ウェルズに電話をかけようとしたが、夜更けのこととて、ホテルの交換手が非番のために、つながらない。電話に出た別な係員の指示どおりにダイヤルを廻しても応答なし。あきらめて寝る。

十三日早朝に起床。身仕度をすませてまたアリスに電話をかけようと思ったがもう時間がない。前夜はニューヨークの宮内温夫氏へ電話をかけて、なつかしい声を聞いた。

九時に全員バスでホテルを出発。ハイウェーをオーシャンサイドの方向へ時速百キロでぶっとばす。現地在住の日本人ガイド・小島氏が付き添って、沿道の風景を説明される。この高速道路は一昨年秋に私がビスタへ行ったときに乗ったグレイハウンド・バスの路線とは異なるので、沿線に町らしいものは殆ど見えない。したがって、初めて見る人は、カリフォルニア南部には町が存在しないかのような印象を受けたかもしれないが、実際は市や町が延々と続いているのである。

●ロス郊外の蚤の市（不要品交換会）



バスはやがて見覚えのある旧パロマー・ガーデンズへさしかかる。

「ここだ！　車を中へ入れて下さい」と運転士に頼んで、広い敷地内へ入る。管理人が寄って来て、運転士と言葉を交わしながら、「ここはジョージ・アダムスキーが住んでいた所だ」と言うので、「そのとおり。我々はここを見に来たのだ」と私が答えて、一同下車し、そろそろとレストラン跡へ向かった。

コンクリートのレストラン跡とアダムスキーが建てた物置小屋は一昨年見たとおりに残してあり、全く変わらない。ひととおり私が説明したあと、各自、写真を撮りながら散策する。空もよく晴れて燦々たる陽光と木々のみずみずしい緑も一昨年秋と同様である。訪問二度目の私には初回のときのような感動は起こらないが、大切に保存されている記念物により、歴史の流れというものを深く感じさせられた。大きく言えば、出来事と時間とにより形成される歴史というものの本質である。これはあとでメキシコへ渡って、古代のマヤ、サポテカなどの遺跡により痛切な実感となってきた。そしてまたも「人間とは何なのか」が大きな課題となって迫ってくる。

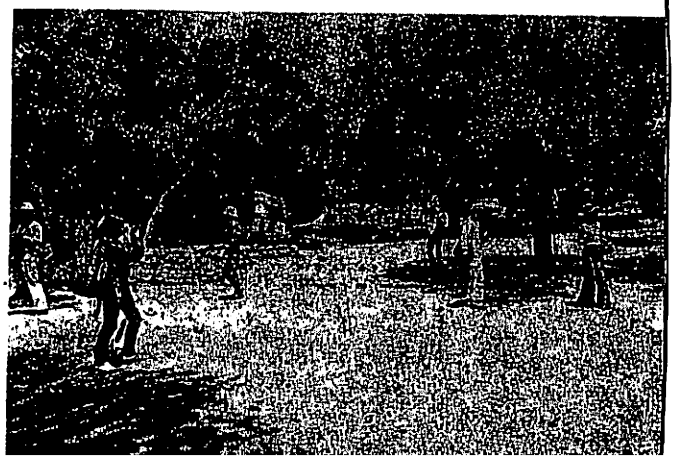
●パロマー・ガーデンズのレストラン跡

三十分の予定が約一時間にもなった。バスで出発する前に、管理事務所のそばの公衆電話からアリスに電話をかけたら今度はなつかしい元気のよい声が響いてきた。

「おお、ミスタ・クボタ！　いまどこにいますか」

「いまパロマー・ガーデンズにいます。これから天文台へ見学に行き、帰りにあなたの所へ寄るつもりです。四時か五時

●パロマー・ガーデンズ

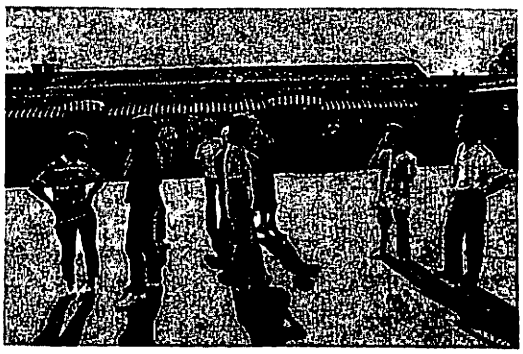


●パロマー・ガーデンズのアダムスキーが建てた小屋の前にて。前列右端，腰をおろしているのが筆者

●パロマー天文台の白亜のドーム（高さ60m）をバックに

頃になるでしょう。連れが沢山います」
「そう、待っているわ。ぜひ寄って下さい」
　私は勇み立ってバスに乗った。車は山頂目指して進行する。午後一時頃、やっと天文台付近の駐車場へ到着し、小道を歩いて天文台へ向かう。紺碧の空に映える純白のドームが美しい。
　天文台内部へ入り、巨大な二百インチ望遠鏡を見学するに、その内、妙な事に気づいてきた。どうやら大半の人は、斜めに伸びている大きな極軸を望遠鏡だと感違いしているらしい。これはいけない、よし説明しよう。私は数名の人々を集めて、反射望遠鏡の原理とメカについてごく簡単に話した。このとき主鏡の焦点距離を知りたかったので、売店の女性に聞いて下さいとガイドの小島氏に頼んだところ、意外にも焦点距離というのを英語で何というのかと聞き返す。「focal distance でしょう」と答えたが、氏は納得しかねるような顔付きを示す。そのあと、氏は売店で尋ねた結果、十五メートルなにがしだと知らせてきた。しかし今度は私が一同にそのことを説明し忘れてしまった。小島氏は見習ガイドとして同行した助手に、焦点距離という英語も知っていなくちゃいけないのだからな、とか何とか話しておられる。たしかにガイドという仕事は語学面でも完べきを期す必要があるのだろう。大変な仕事だなと思った。しかし在米七年のベテラン小島氏がこのあとビスタで活躍されようとはまだ夢想だにしなかった。
　天文台の見学を終えて、一同がバスで出発したときは予定の時刻をかなり過ぎていた。これではビスタへ寄れないかもしれないと私は少々焦りを感じてきた。大体、オーシャンサイドの町で昼食用として食糧を仕入れるためにハンバーガーなどを売る軽食堂へ立ち寄ったときにも予定の時間を超過したのである。
　折角ここまで来てビスタのGAP本部へ寄れなくては皆さんに申し訳ないし、アリス側にも気の毒だ。気をもみながら山を下り、やがてビスタの町へ入って、目指す目的地はすぐそこだという地点でバスのクーラーが故障したので、ここで修理しようということになって、あるレストランの前庭に駐車した。時計を見ると四時半だ。バスの貸切り時間は五時までとなっているので、あと三十分しかない。私の焦燥を知る由もない人々は、このレストランの経営者である日本人の老婦人とその娘さんが出て来たのを見て、大喜びしながら話し合っている。二人のアメリカ人少女が小馬に乗ってやって来たので、馬の鼻づらをなでたりする。気が気でなくなった私は、一人だけでもアリスの家へ飛んで行きたい思いにかられたが、極力感情を抑制して何食わぬ顔で小馬の鼻をなでながら、憮然たる面持ちで立っていた。
　やがて集合の合図がかかり、一同バスに返ると、結局クーラーは修理できないので、窓を開いたままで走ろうということになった。なァーんだ。始めからそうすればよかったのに——。
　やっとバスがGAP本部へ着いたときは五時をまわっていた。ええい、ままよとばかり、人の好さそうな黒人の運転士に向かい、三十分ほど待っていてもらいたいと告げて、「ちょっと行って来ますから」と小島氏には暗にバス内で待っているようにとほのめかしたのだが、どうしたわけか氏も一同について来た。
　先頭に立って玄関のベルを押すと、アリスがにこやかに出て来た。挨拶を交わしながら中へ入る。マーサ、イングリッド、スティーヴなどのなつかしい顔が次々と現れる。エリシアも来ている。少し大きくなったようだ。
　一同を案内して大広間へ入り、アリスを始めとして皆さんに紹介する。ここで一同が拠出した百ドルを献金としてアリスに手渡す。野口さんが皆さんに呼びかけて集めた四十五ドルに私が五十五ドルを加えたものである。アリスは感謝して受け取った。あざやかな緑色のドレスを着た彼女の顔は一昨年秋に会ったときと一向に変わらない。マーサもむしろ血色のよい達者な姿を見せている。ただイングリッドは少しシワがふえて、やつれたような印象を受けた。全世界から数千通の手紙を受け取って、その返事に忙殺されているのだろう。痩くような美貌も少々変化したように思われる。
　なにせ時間がないので、見るべき物だけでも皆さんに見せて、その間、私はフレッドとイングリッドを今秋日本へ招待する件で彼女と重要な打ち合わせをしようと、とっさに計画し、例の黄金のメダルとクリスタル・ペンダントを一同に見せてやって下さらぬかとアリスに頼んだところ、意外にも手元にはないと言う。
「なぜですか」

●日本人経営レストランの前庭で待つ



●小馬に乗る旅行メンバー

●ビスタのＧＡＰ本部にて。前列左端筆者。中央はアリス・ウェルズ，１人おいて右へイングリッド・ステックリング，その右うしろはマーサ。イングリッドの右隣はスティーブ・ホワイティング。最右端はガイドの小島氏

「大切な物なので、銀行へ預けてあります」

しまった。計画が狂った。オーソン肖像画はもう皆さん見学ずみだ。広間の壁にかけてある大きな絵はアダムスキーが描いたものだとアリスが言うので、そのことを一同に伝えたが、これもみな見終わっている。手持ちぶさたにしておくわけにはゆかない。あせりにあせった私はふと思いついた。よし、私がイングリッドと打ち合わせを行うあいだに簡単な質疑応答を行うことにしよう。小島氏にアリスと皆さんとの通訳を頼めばいい。氏はアダムスキー問題に関して全く予備知識を持たぬ人だが、何とかやってくれるだろう。

そこで、家の外に出かけようとした小島氏を呼び入れてもらい、質疑応答の通訳を依頼したところ、こころよく応じられたので、その間私は奥の台所へ入り込んで、ここでイングリッドとスティーヴとの三人で話し合った。したがって大広間でどのような質疑応答が行われたかは全く知らない。私は別個に重要な問題について語り合った。イングリッドもフレッドと一緒に確実に日本へ来ると言う。なぜ全世界から一挙に数千通もの手紙が殺到したのかと尋ねると、カーター大統領のＵＦＯ問題に関する発言が大きな影響を与えたのではないかとイングリッドが言う。やはり大物政治家の言動がモノをいうのだ。無名のアマチュアがわいわい騒いでいるだけではだめなのか。

あれこれ話し合っているうちに時間は容赦なく経過する。ここで質疑応答も打ち切って、全員の記念撮影を行う。ついでにアダムスキーの寝室を見せてやって頂きたいとアリスに頼むと、スティーヴが案内をしようと言う。一同を奥へ連れ込んで順番に寝室を見せる。某嬢などは涙を浮かべて室内を見ている。広間へ通じる食堂の片隅には依然として大きな水晶玉が置いてある。かつてアダムスキーがインディアンの王女から透視用に贈られた物だ。皆さんに説明してやってくれとアリスが言うので、私が数名の人に手を取らせて説明する。

名残り惜しいが、時間はなんと一時間も経過している！　もう引き揚げねばならぬ。一同は次々に別れを告げて出て行き、最後に私が玄関から外へ出てコンクリートのステップに足をかけたとき、イングリッドが出て来て引きとめた。そしてある重要な事をささやいた。私はハッとしたが、あせっていたために、理由を尋ねる余裕はなかった。イングリッドはなおも私に語りかける。一同は彼方の道

●玄関で語り合う筆者とイングリッド

路をバスの方へ歩いて行く。その最後尾の女性数名が玄関前に立つ私とイングリッドとそばにいる可愛いエリシアの三人をカメラにおさめている。

ついに私も別れを告げてステップを降り、振り返りながら手を振った。母娘も手を振って答える。

バスに乗ってから小島氏はしきりにぼやいていた。予備知識のない問題でいきなり通訳をやらせるものだからと言うのだ。しかも時刻は六時を示している。もう今頃はロサンジェルスへ着いている頃なのにとも言う。ガイド氏というものは一定の勤務時間があり、それを超過するのをひどく嫌がることは私もよく承知している。この時間超過が氏にとっては気に食わなかったらしい。恐縮して文字通り身の縮む思いをした私は、ロスへ帰ってから、個人として特別に十ドルほど謝礼を出したが、これも十分な額でなかったことは氏の表情で読みとれた。ビスタへの訪問が実現した喜びの裏に、このような内幕があったことをここで改めて洩らした次第である。全く小島氏と運転士のジョー君には申し訳ない。

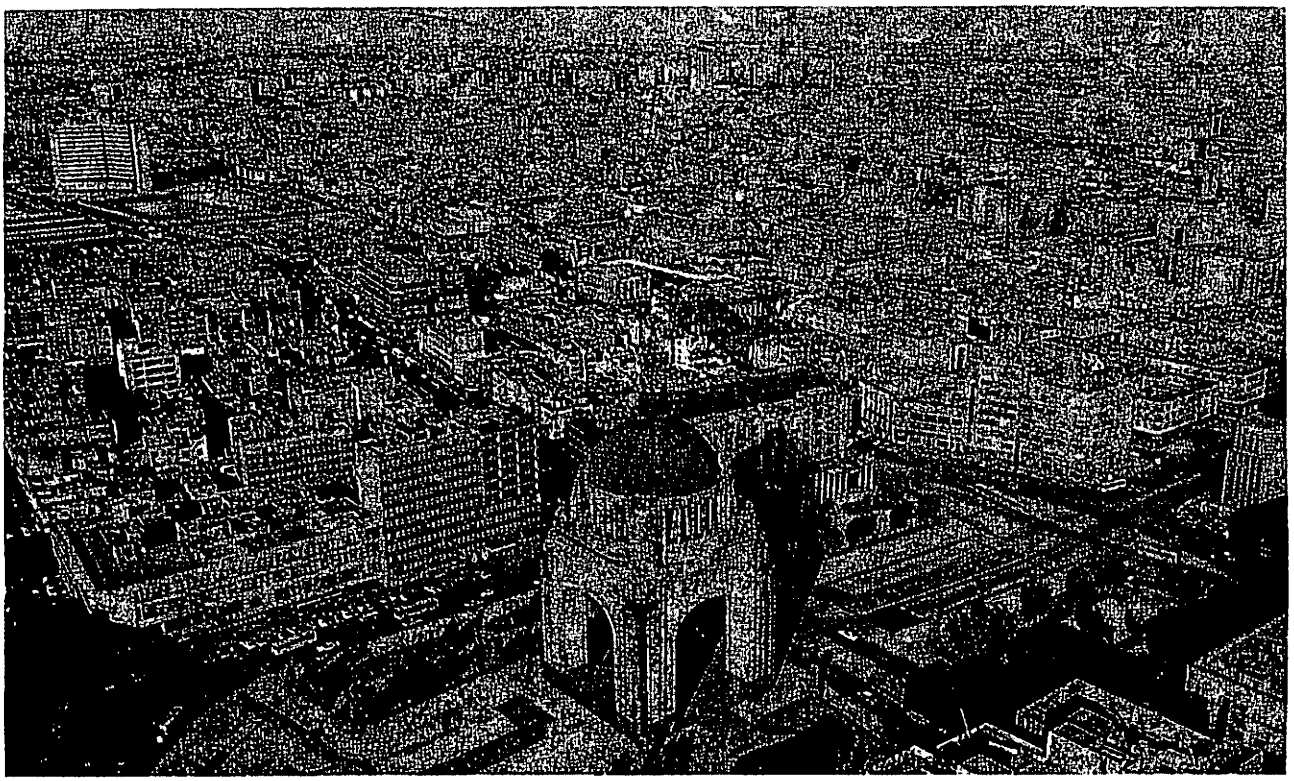
ホテルへ帰ったのは結局夜の八時すぎであった。

親日感の強いメキシコ人

翌日の十四日は、早朝七時半にホテルを出発したが、飛行機の離陸が二時間遅れて、飛び立ったのは十二時である。したがってメキシコ市の空港へ着いたのは三時となり、同日午後テオティワカンの大ピラミッド見学は中止し、後日に変更となった。空港へ到着時にかつてのアダムスキーの高弟で、メキシコ市在住のマリア・クリスティーナ・デ・ルェダ夫人が出迎えに来るという連絡を受けていた私は、空港ビルの出口に待機している大勢の出迎人の中にそれらしき人はいないかと探したが、見つからない。写真が送ってあるので先方は私の顔を認めるはずだが、こちらは相手の顔を知らないのだから、探しようがない。いずれホテルに電話があるだろうと、あきらめてバスに乗る。このとき、メキシコ在住の日本人ガイドで金子さんという若い人を添乗員の田中氏から紹介されたが、これがメキシコ関係考古学専攻の大ベテランであることを後に知った。スペイン語を母国語同様に話し、遺跡はおろかメキシコに関して知らぬ事はないというほどの優秀なガイドで、しかもまだ二十四歳という若さだ。更に驚いたのは、日本からメキシコへ移住してわずか一年八ヵ月にすぎないという事実である。この人ほどに〝実力〟の重要さを痛感させた人物はない。

ホテル・デル・プラドに着いて、自室で荷物を整理し、洗濯などをすませ、夕食のために外出の仕度をととのえて、まさに室外へ出ようとしたとき、ドアをノックする音が聞こえた。あけてみると、五十がらみのメキシコ人の男が立っており、そばに十三～四歳の女の子がいる。男はひどいスペイン語なまりの英語で、実はマリア・クリスティーナ・デ・ルェダ夫人の使いの者だがメッセージを持って来たという意味の言葉を述べて、紙片

●メキシコ市。手前の建物は革命記念塔



を渡すので、見ると、「今日、空港へ行ったが、お会いできませんでした。電話を下さい」と英語で書いてあり、電話番号が記してある。やはり空港へ来ていたのか、どうもすまない。私は心から陳謝して引き取ってもらった。時間がないので電話をかけるのはあとまわしにして、すぐにホテルを出て一同でラテンアメリカ・タワーの展望台へ昇った。ここに見晴らしのよい食堂があるのだ。

なんという素晴らしい夜景だろう！きらめくダイヤモンドのように無数の灯火が密集して、ゴバン目に区画された市街地を浮き彫りにしている。かつて私が空中から見た夜景ではニューヨークのそれが最高だったが、ここもそれに劣らぬほどに燦然たる光の大海原が果てしもなく展開している。

一同が席に着いてから、あらためて団長として私は金子氏を紹介した。日本を出発前に旅行団の結団式というものは行わなかったので、それに相当する夕食会と全員の自己紹介はすでにロサンジェルスのホテルでやっていた。そのホテルでメンバーのSさんという女性のスーツケースが紛失するという事故が発生して、彼女が沈み切っているのを私は黙視し得ず、「必ず出てくるから心配しなさんな。出てきた光景のイメージをはっきり心に描きなさい」と、たびたび慰めた。ロサンジェルス空港からバスに積み込むときは本人も確かに荷物を見たと言い、ホテルのポーターも確実に人数分だけあったと証言しているのだから、ホテル内のどこかにまぎれ込んでいるにちがいない。その場所を透視してみようと私は試みたが、疲労と多忙とさまざまの想念でマインドが落ち着かず、さっぱり透視がきかない。ダメな我が身よ、と髀肉の嘆をかこったものの、必ず出て来るという印象はあった。そしてあとでその通りになったのである。ポーターが間違えて他人の部屋へ入れていたのだ。それにしても強力な透視力の開発の必要を痛感したのであった。

さて、この展望台の食堂で初めて名にし負うメキシコ料理なるものを口にするのだが、トウガラシがききすぎて辛いこと話にならぬ。これで、メキシコ料理が辛いというのは塩によるのではなく、トウガラシのせいであることを知ったのである。いったいに暑い国だから、相当な刺激物をとらないことには体がもたぬのだろう。その後、各地でメキシコ料理を味わうたびにトウガラシの辛さと油の生臭い匂いがどうにも口に合わず、最後にサンフランシスコの日本料理店でマグロの刺身をサカナに日本酒で一杯やったときは全く救われた気分がして、つい飲みすぎてしまった。

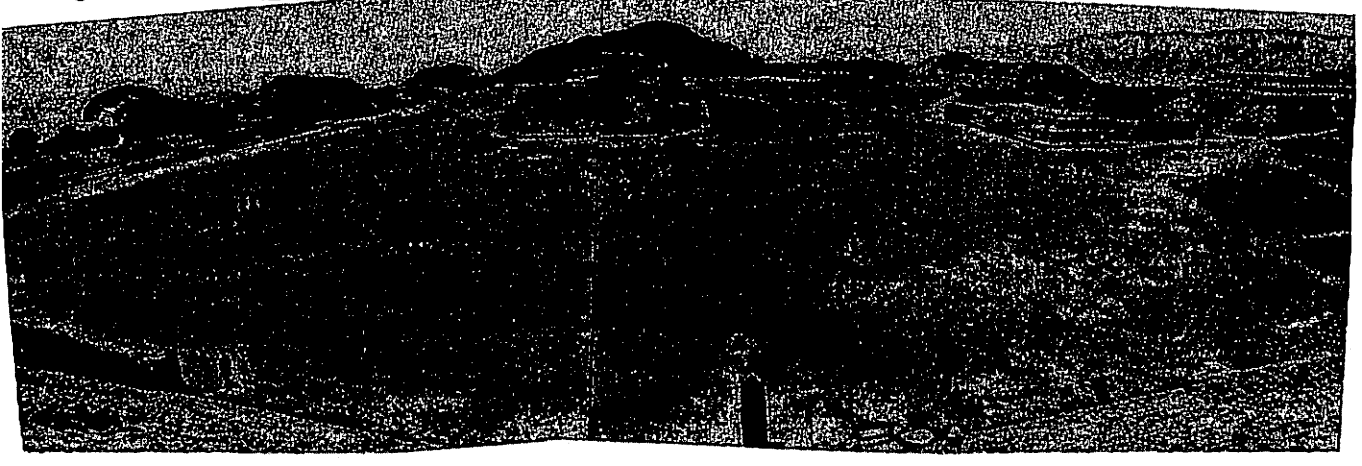
だがメキシコ中を旅するうちに私は一大発見をした。メキシコ人の限りない親日感と友好的な態度である。これは予想以上であった。先年ヨーロッパ各国を旅して白人種の日本人に対する蔑視をイヤというほど体験した私にとって、メキシコこそは全く兄弟の国という事実を肌で感じたのである。謎と神秘に包まれたこの国の遺跡類も素晴らしいが、それ以上に貴重なのはメキシコ人の人間性であろうと私は広漠たる大平原を眺めながら考えた。文化や文明以前の問題として、まず人間のかもし出すヒューマニティーがあらねばならぬ。それをメキシコ人は至る所で身をもって示してくれたのだ。料理にトウガラシと、油の生臭い匂いがありさえしなければ、私はこの愛すべき国へ移住してもよい、とさえ思う。

モンテアルバン遺跡を見学

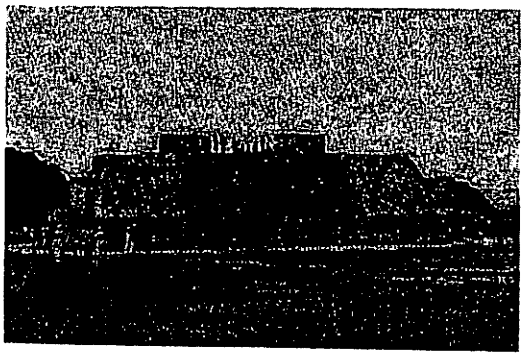
翌十五日、朝早く六時にホテルを出発して八時十五分にメキシコ市空港を離陸したあと、九時にオアハカへ着陸。直ちにマイクロバス二台に分乗してビクトリア・ホテルへ行く。このホテルは丘陵地帯に建てられた素敵なスペイン風の建築で、清澄な空気と緑に包まれている。旅装を解いた後、再びマイクロバスに分乗して小高い山を登って行く。目指すはモンテアルバンの遺跡である。

これはオアハカ市南西約九キロの所に位置する古代サポテカ族の壮大な宗教都市の遺跡群で、紀元前七百年から三百年の間にオルメカ文化の影響を受けて形成されたという。その後の紀元前二百年から西暦三百年間が二期であり、その後の三期Bすなわち後古典期がサポテカ文化の繁栄期である。広大な敷地の右手に石造の堂々たる神殿跡があり、左手には古代の球技場が残っている。フィールドの両側に観客席とおぼしき石のスタンドがあるが、どうみても各石段に腰をおろせるほどの余裕はない。古代ではここで生ゴムのボールを打ち興じたものだと金子

●モンテアルバンの遺跡



●球技場

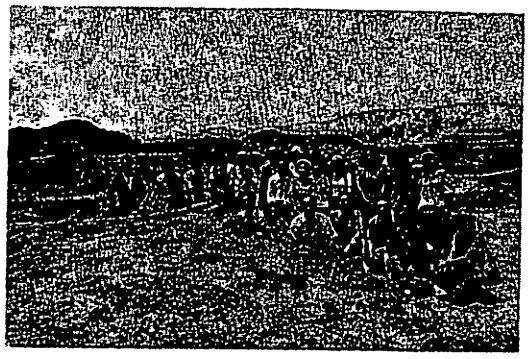


●神殿跡

氏は説明される。敷地の奥の石壁には有名な「踊り手」の石刻がある。これは全裸の男が踊っている姿を浮き彫りにしたもので、他に暦や文字が刻まれているものもあり、これらの遺跡は、メキシコ古代文化中で高度の文化水準に達していたことを示している。どうしてこのような山奥にかくも壮大な神殿群を建設したのか。これについては、なるべく天空に近づこうとした思想のあらわれではないかと金子氏は言う。だがそのサポテカ族も突如この地を去って行く。なぜか？　これは謎である。その後ここへミステカ族が侵入してコルテスが征服するまでの期間、すなわち八百五十年より千五百二十年までがミステカ族の都市となる。ここに残されたミステリーはまだ序の口であって、更にユカタン半島一帯のマヤの遺跡になると、まさに神秘と謎の宝庫だ。

●「踊り手」の浮き彫り

●ピラミッド群をバックに神殿跡の頂上より

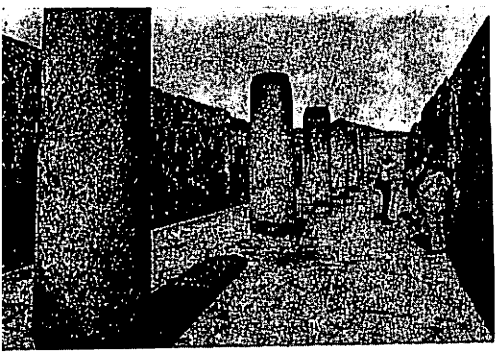


インディオの襲撃！

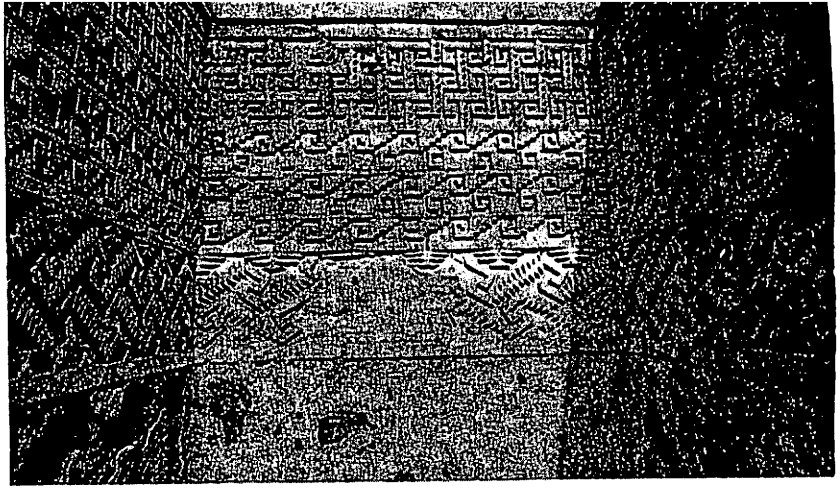
午後はバスでオアハカ東方四十八キロのミトラの遺跡を見学する。これはモンテアルバンの文化時代にやはりサポテカ族が築いた宗教都市だが、今日の遺構は十四世紀以降にほとんどミステカ族が建設したものである。この種族は石器時代のメキシコで初めて金銀細工を用いた種族といわれ、スケールこそ小さいが、壁面の石組みモザイクによる装飾は精緻で華麗である。ここにはまた『石柱の部屋』というのがある。巨大な六本の石柱が立ち並ぶ青天井の室は、かつて木製の屋根で覆われていたらしい。木造文化を発達させた古代日本に比較して、到る所に巨大な石を応用した雄大なメキシコ古代石造文化は根本的に異質なものなのだ。この国の古代の種族が日本人と同一祖先を持つという既成の概念は次第に私の中から消えてゆくのを感じてきた。

バスが駐車している広場には多数のインディオの老婆や女子供が、手芸品をかかえて売りにやって来る。

●ミトラの「北の神殿」にて



●「石柱の部屋」

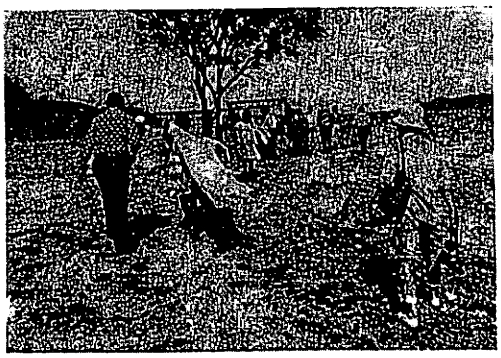


●見事なモザイク模様の壁

「シンクェンタ！」「クァレンタ！」

少女たちが叫ぶ。五十ペソ、四十ペソという意味だ。手には毛糸の編物や肩かけなどを持っている。金子氏が与えてくれた注意によると、彼らは必ず高く吹っかけてくるので、こちらはまずその半値で出発して、次第にまけさせるのがコツであるという。みすぼらしい身なりのハダシの少女がうるさくつきまとう。最低の生活にあえいでいる貧民たちの悲惨な姿を見ると、つい買わずにはいられなくなり、男ものの毛糸のチョッキらしき民族衣装を一つ買ったら、よいカモとばかりに次々とむらがってきた。結局、老婆から女もののチョッキ、他の女から肩かけ、というふうに数点を買わされてしまった。まるでインディオの襲撃だ。

道路わきには屈強な体格のインディオの男たちが十数名すわり込んでいる。労働の合間の一休みなのかと思ったら、そうではなく、我々旅行者が通りかかるといきなり右手に持っている小さな土偶のイミテーションをニュッと突き出す。買えというのだ。みな知らぬ顔をして通過する。こうして売れもしない土偶を突き出しながら一日中すわり込んでいる彼らは、何を考えて暮らしているのだろう。



●民族衣装を売るインディオの娘

夕方の六時にホテルへ帰り、夜は別なホテル「モンテアルバン」の大ホールで開催された現代サポテカ族の民族舞踊を見たが、これは実に感動的であった。白い上衣と細い白ズボンに黒く平たい帽子をかぶった男たちと、長い髪を二つに分けて編み、見事な花模様の刺しゅうを胸につけた白服姿のインディオの少女たちが華やかな音楽に合わせて最初に出現したときから胸が熱くなり、すっかり興奮してしまった。虐げられた種族がせめてもの生の歓喜を踊りに託して素朴に次々と繰り広げるケツァルコアトル舞踊団のこの演技こそ、オアハカに来て得た三大収穫の一つであった。音楽は階上のブラスバンドが奏でる彼らの民謡である。合計、七～八曲演奏されて、その都度演し物がかわるが、入場料はわずか三十ペソ（三百九十円）である。これでは引き合わぬだろうと思って金子氏に尋ねると、彼らはいわゆる観光客相手の儲けでやっているのではなく、昼間は職業を持つ人たちが夜間率仕的に演じているセミプロの踊り手で、その一部は日本へも公演に来たことがあるという。昨秋マドリードでインチキ・フラメンコを見せられて苦い思いをしただけに、この清純な舞踊で

●サポテカ族「ケツァルコアトル舞踊団」の民族舞踊

よけいに胸を打たれたのである。ここでは思いきり写真を撮りまくった。

土民のメルカードに陶酔

翌十七日は午後二時出発のこととて、十一時頃単身でホテルをタクシーで出てオアハカ市のメルカード（市場）へ行った。ここはインディオたちで形成される巨大な市場地域である。道路の両側にはインディオの男女が所せましとばかり野菜その他の食糧品や雑貨を並べ、けたたましく通行人に呼びかける。すわり込んだ女が一握りの野菜を突き出すかたわらで、赤ん坊が眠りこけている。これは文明国の旅行者に売るのではなく、同じインディオの通行人に売るのである。喧騒と不潔のかたまりみたいなこの市場の中心部には大きな倉庫のような建築物があり、この中も市場となっている。足を踏み入れると迷路のような道が縦横に走り、無数のきたない店が並ぶ。ムッとするような臭気と息苦しさを感じながらうろつくと、むこうで音楽を演奏する光景が見える。二人の男がマリンバを叩き、一人の少年がドラムを鳴らして奇妙なメロディーを奏でている。リズムはゆるやかなルンバ調で、全く聴いたことのない音楽だ。そばに立って見ていると、別な男が竹筒のような物を手にして突き出す。金を入れてくれということらしい。一ペソを入れると、ドラムの少年がニッと微笑する。

なんというエキゾチシズムに満ちた場所だろう！　油の生臭い匂いも物売りの女たちの騒然たる喚声も、今は遠い異国の幻想の世界をかもし出す素晴らしい素材なのだ。私はしばし陶酔しながら、メルカードを徘徊した。土民たちはゆっくりと通り過ぎる私をしばらく凝視する。その眼つきがまた素晴らしい。反感や敵意のまなざしではなく、不思議な物を見るような眼つきでもない。ただジッと見つめるだけで、おそろしいほどの客観視である。そして、当初不気味に感じられたこのメルカードが、実際には全く安全な場所であることがわかってきた。古代のマヤ人と同じく、このサポテカ族も敵対心というものを持たぬらしい。このことは前述の如く、メキシコ人全般に浸透した日本人に対する独特な態度であることに次第に気づくようになったのである。世界を股にかけて歩き回った田中氏も、メキシコ人やインディオが日本人をバカにした態度を示さないことに感歎しておられた。

「いい国ですなあ、メキシコは！」

これが二人でしばしば交わした言葉であった。

メルカードを出た私は市の中心部にある長方形の広場の一辺に沿ったアーケードのテラスに入り、そこの椅子に陣取った。一軒の小さなレストランが通路にテーブルや椅子などを並べて、そこで食事させるのである。メキシコは十六世紀にスペインの侵略を受けて以来、スペイン風の都市が発達した。市の中心部にまず広場を作り、そのそばに教会と市役所を設置するというパタンが多い。

腰をおろしてタコスとビールを注文する。タコスというのはメキシコ人が常食とする代表的な食べもので、トウモロコシの粉を油で練って鉄板でセンベイのように平たく焼き、それに肉などをのせて丸めた棒状のロールパンみたいなものである。やはり油の生臭い匂いがプンと鼻をつく。慣れるまでには長年月を要するだろう。これをサカナにしてビールを飲みながら通行人をながめるのは、なかなかオツなものだった。さまざまな服装をしたインディオたちにまじって、ときたま白人観光客が通るが、彼らは日本人旅行者である私を意識的に無視しようとしているらしい。白人が彼方からチラとこ

●オアハカのメルカード①

②

③

ちらを見る。次にテーブル上に置いてあるニコンカメラをチラ。続いて視線は前方へ、というプロセスを申し合わせたように繰り返す。どうやらアメリカ人が多いらしい。

彼方に見覚えのある顔がこちらへ接近して来た。金子氏を先頭に数名の仲間が歩いている。いち早く金子氏が私を認めて微笑しながら声をかけてきた。博物館を見学したあと、これからメルカードへ行くのだという。皆さんと別れて私はしばらく座っていたが、もう一度メルカードを見たくなって、屋内市場へ入り込み、散策したあと、外へ出てタクシーを拾ってからホテルへ帰った。

パレンケで栄光の大陸「ムー」を想う

午後四時にオアハカ空港を飛び立って同四十五分にビリャエルモーサに着く。小空港のビルから外へ出ると、すごく暑い。ここからいよいよユカタン半島のマヤ遺跡地帯へ入るのである。同日はマンスール・ホテルへ宿泊する。この町はその名の示すとおり、たしかに美しい町で、スペイン風の建物とメキシコの郷土色とが融和した異国情緒に満ちた風景が展開する。同夜は全員でホテルの食堂へ入り、メキシコ料理をとって、夜はぐっすり眠った。

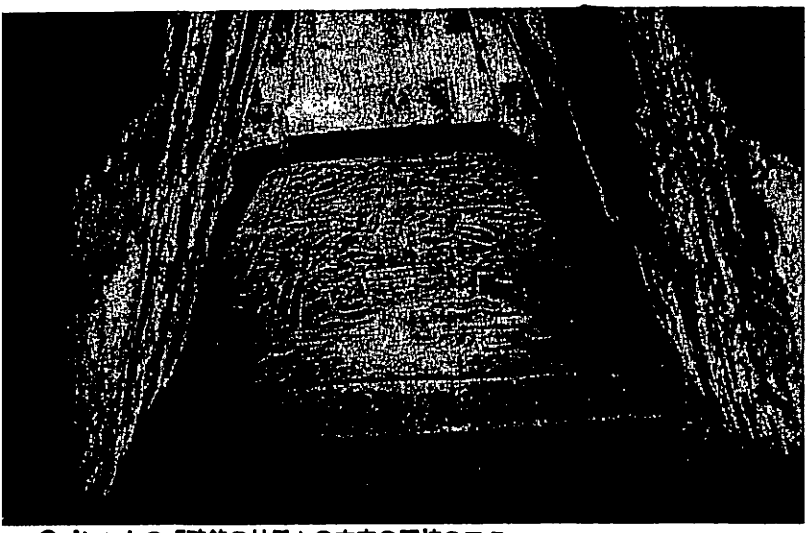
十七日朝九時にホテルをバスで出発。今日はかの有名なるパレンケの遺跡見学である。広漠たる大草原の中を数十キロも数百キロも直線の二車線ハイウェーが敷設され、それを時速百ないし百二十キロぐらいでぶっ飛ばすのは実に爽快だ。ときどきハゲタカがバスのフロントガラスにぶつかって即死する例があるとのことで、これは後に我らのバスでも実証された。果てしない大平原の土地の価格が気になってきたので金子氏に尋ねてみると、一ヘクタールが三万ペソ、つまり三十九万円で、一坪は百円となる。まるでタダみたいなこの土地に眼をつけない外国系企業はないだろうが、それでも未開発のままに残されているところをみると何かの欠陥があるのだろう。

十一時前にパレンケの遺跡に到着。直ちに敷地内へ入る。まもなく右手に壮大な『碑銘の神殿』ピラミッドが眼につく。これまで写真でしか知らなかった私は、せいぜい高さ十メートルぐらいのものかと思っていたのに、高さ二十メートルもの八層の階段状ピラミッドの上に、更に神殿が建てられて、高さは計三十メートルもあろうと思われる堂々たる石造の大建築物であることに一驚した。

いったいに考古学や遺跡関係の文献に掲載される現場写真は、やたらと訪問者のいない建造物だけの写真を載せたがるので、大きさの見当をつけにくい場合が多い。現場写真中に人間がいてこそ比較が容易になるのである。

さて、この『碑銘の神殿』の内部にこそ、デニケンが紹介して一躍有名になった王墓の石棺のフタがある。この表面に彫られた人物像が古代の宇宙飛行士の姿に似ているというのだ（6頁の写真を参照）。マヤ文明の古典期後期における

●パレンケの「碑銘の神殿」ピラミッド前にて



●パレンケの「碑銘の神殿」の玄室の石棺のフタ

熟した華麗な文化遺産であるこの石棺の浮き彫りがロケットを操縦する飛行士だというのもヘンな話だが、とにかくこを訪れる各国の訪問者の殆どは、おそらくデニケンの書物に刺激されて来るのだろう。フランス人旅行団のガイドも大きな声でデニケンがどうのこうのとしゃべっていた。こうした中南米の古代の遺跡類に対して世界の人々の眼を開かせた点では、彼の著書『神々の戦車』は絶大な役割を果たしたと言えるだろう。

だがパレンケの黄金時代は七世紀後半か八世紀頃とされ、石棺に横たわっていた権力者らしき人物の遺骸が一九五二年六月にメキシコの考古学者アルベルト・ルースに発見されたときも、神殿の大石板に刻まれた六百二十個の神聖文字から、年代が西暦六九二年と解読された。ヨーロッパはフランク王国の全盛時代で、中国は唐帝国の初期、日本は持統帝の飛鳥時代で、それより十年後には大宝律令という堂々たる法典が完成している。その頃にパレンケのマヤ人がジャングルの奥地で如何なる文明を持っていたかは知る由もないが、如何に謎に満ちた不思議な種族とはいえ、まさか噴射推進式有人ロケットを所有していたとは、まず考えられないことである。

しかし人間の最も偉大な知的業績の一つといわれるゼロの概念を持っていた古代マヤの驚異的数大系、一年を三六五・二四二〇日と計算した信じられぬほどに正確な暦法、金星の会合周期の計算法など、このミステァリアスな民族の素晴らしい科学技術と、アステカ、トルテカ、インカ等の他の種族と異なる非戦論的平和主義などを考えると、デニケンならずとも何か別な偉大な文明との接触を保っていたのではないかと推測したくなってくる。

それがどうやら遠い昔、太平洋に沈下した偉大なムー大陸の影響を残したものではないかというフィーリングが高まってきたのは、石棺のフタを目撃した時点からだった。（この詳細は『UFOと宇宙』誌十一月号（十月二十日発売）に『灼熱の密林より永遠に』と題して筆者の拙文を掲載するので参照されたい）。

しかしムー沈没一万数千年後の古典期のマヤ人には依然として謎が多すぎるのだ。神殿やピラミッド建設のため、石のない地域に巨大な石材を如何なる方法で運搬したか？　しかも彼らは車輪のついた器具や道路というものを全く利用しなかったのである。

謎はそれだけではない。まだ山のようにある。テオティワカンの大ピラミッド建設に用いられた石やレンガの数に劣らぬほどのミステリーがユカタン半島には充満しているのだ。しかも十世紀末には不可解な〝大変動〟により、中部地域から三百年間も低地マヤ人は姿を消すのである。なぜか。何事が発生したのか？　別な世界から〝何者〟かがやって来たのかと、私はまたもデニケン流のさまざまな思いにかられながら『碑銘の神殿』の石段を登り始めた。おそろしく急傾斜の階段を重いカメラバッグをさげてエッチラオッチラ這うように登る図は見ものだったろう。いったいにパレンケならずとも、マヤのピラミッドの石段はひどい急傾斜で、そのため足をすべらせて転落死する観光客が年間二十人はいるという。ライフのカメラマンも落ちて死んでいる。このような事実を私は旅行団のみなさんに語らなかった。恐怖心を与えると、かえってよくない結果を招くからだ。とにかくこんな危険な場所でみえを張って軽々しく振舞うことは禁物だ、人に笑われても慎重に確実に一歩一歩登って生還するにこしたことはない、と我が身に言い聞かせながらやっとの思いで頂上に着いた。運動不足のためにひどく息切れがする。焼けつくような暑さも加わって全身から汗が滝のように流れるが、どうしようもない。見物客の白人の男でショートパンツに上半身ハダカになっている者をかなりみかけた。賢明なのか足りないのか見当がつかない。

頂上の神殿の柱廊前室と中央の部屋の周囲の壁面に三枚の大石板があり、これに六百二十個の奇妙な神聖文字が彫られている。ルースが発見したという下降穴が床の隅にあり、ここからピラミッド内部の二十五メートルも下方へ石段が続いている。石灰石の各段は濡れてヌルヌルし、滑りやすく危ない。人が二人並べるほどのせまいトンネルを用心しながらゆっくりと降りて行く。多数の見物人がぞろぞろと続く。石棺を見終わった人々が下から上がって来る。

やっと玄室（納骨堂）の入口にたどりついて意外に思った。入口には鉄柵が設けられてあり、内部へ入れないのだ。この柵の所から中をのぞいて見るだけなのである。棺のそばまで行けると思っていたのだが、あてがはずれてしまった。いよいよ私の番である。あった！　巨大な一枚石の表面にあの〝飛行士〟が浮き彫りになっている。直ちにカメラをかまえて撮影にかかった。室内は電灯で強く照明されているが、撮影には十分ではない。しかもレンズはズームニッコール二十八ミリ↓四十五ミリF四・五とくるので、開放でもあまり明るくはない。やむなくレンズフッドを柵に押しつけて開放のまま二分の一秒と一秒とで数枚撮影したが、現像後は果たせるかなブレていた

（右頁の写真）。

あとがつかえているので長居はできない。計三十秒ぐらい目撃したろうか、すぐにまた石段を登り始める。そして再び頂上部の神殿へ出た。

ここから右手の方向に宮殿と塔が眼下に見える。この宮殿は長さ百メートル、幅八十メートルあり、その右端に四層の塔がある。この踊り場の一つに金星をあらわす絵文字が描かれているため、この塔が天体観測所として使用されたというが、これは推測であって、実態は不明である。中庭には囚人とおぼしき浮き彫りが二つある。この庭は捕虜の審問所ではなかったかという。この他にも、あらゆるマヤ建造物のなかで最も完璧な建築物といわれる『太陽の神殿』や『十字架の神殿』『葉の十字架の神殿』等が付近にある。主建造物たる『碑銘の神殿』は近世において考古学者が発掘し、整然と修復したものであるが――メキシコの主要遺跡のほとんどはそうだと金子氏は言う――、なかには未修復のくずれかけた状態のものもあり、私にはむしろその方が好感がもてるのである。この宮殿の中庭にはオリジナルの状態の部分がかなりあるようだ。発掘前の遺跡は土や草木に覆われて小高い丘のようになっており、そうした未発掘遺跡がメキシコ中にまだ無数にあるらしい。

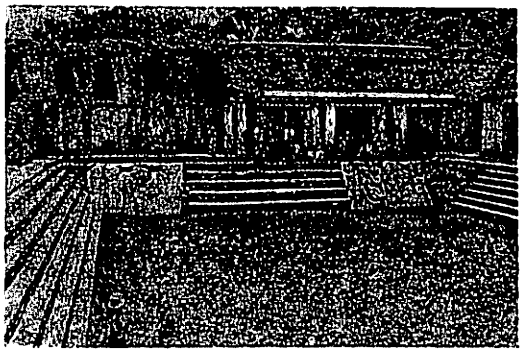
それにしても、こうまで暑いジャングルの中でマヤ人たちはどんな生活をしていたのだろう。焦熱地獄のこの大地を彼らはどのような服装をし、如何なる知識を持ち、何を考えながら行き来していたのだろうかと、私はピラミッド前の広場を低徊した。

地面に穴があく?!

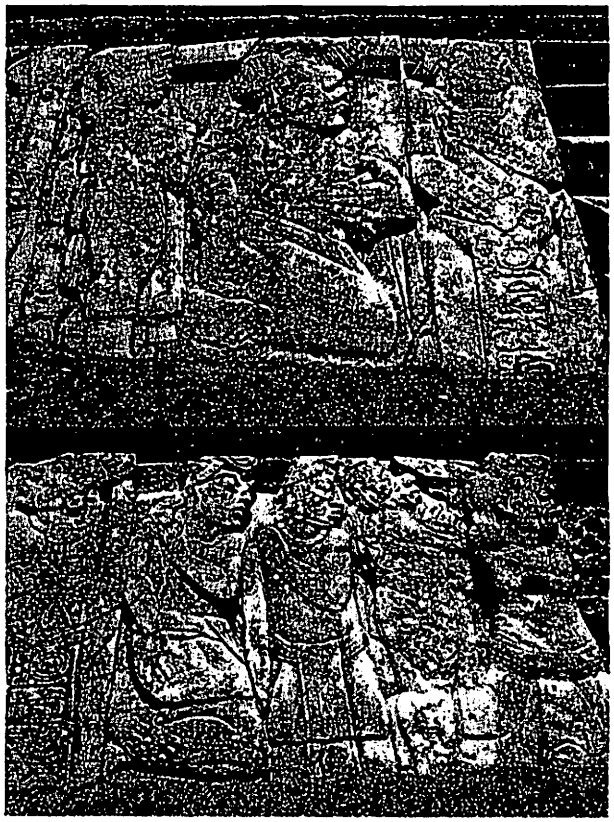
全員の記念写真を撮ろうと思い、やおらバッグから三脚を取り出して地面にセットしていると、カーキ色の制服を着た若い係員が近づいて来て、三脚を使用してはいけないと言う。けげんな顔をしていると、三脚のために地面に穴があくからだという。吹き出したくなるのをこらえながら、やむなくまたしまい込んだ。要するに、それほどメキシコ政府は遺跡の保存に力をいれているということなの

●「宮殿」。「碑銘の神殿」ピラミッド頂上より撮影

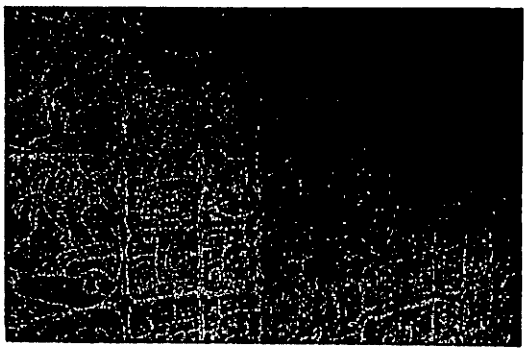
●「宮殿」の中庭



●中庭の石板の彫刻。上が左側，下が右側



●「碑銘の神殿」の壁に刻まれた神聖文字



ろう。仕方なくガイドの金子氏にシャッターを切ってもらった。あとでわかったのだが、メキシコのあらゆる遺跡撮影には特別の許可がない限り三脚使用は禁止されているのである。カメラも一般人の場合は一台だけに限定されている。日本を出発前、ニコンカメラとブローニー判のマミヤプレスの二台を携行しようと張り切っていたのだが、前記の制限を知って、どちらにしようかと出発前日まで迷いに迷ったあげく結局ニコンを選んだ。そして重いブローニー判を持って来なかったことを大いに喜んだ。遺跡の到る所がピラミッドだらけで、この急勾配の石段を登り下りするだけでエライ目にあったからだ。

ジャングル中のレストラン

昼をかなりまわったので私たちはバスに乗って付近のジャングルの中にあるレストランへ入った。ここはバス道路からはずれた密林の中に建てられた観光客向けの食堂で、屋根は植物の葉で覆い、外観は粗末な小屋だが、内部には多数のテーブルが設置されて、意外にきちんと整えてある。客は我々を除いて全部白人ばかりで、テーブル上には紙ナプキンとナイフ、フォークが並べられる。私はバスの運転士と一緒に一隅の席を陣取った。注文をとりに来た三十歳位の背の高いウエーターは典型的な現代マヤ人の風貌を示し、ヒゲをたくわえた面長の浅黒い顔に、にこやかな微笑を浮かべている。純白のメキシカンスタイルのシャツとズボンがジャングルの濃い緑にマッチして、すばらしい。

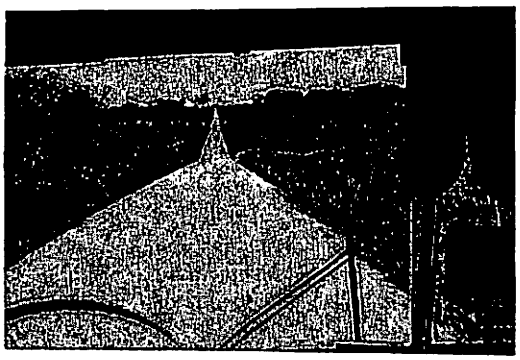
「イカすなあ！」と私はその男を見て感歎した。後日私もこのメキシコ風の白シャツと白ズボンを購入して着用に及び、帰国したが、大いにうけた。胸の両脇と背中に、縦に花模様の刺繍をほどこした優雅なデザインで、女ものと間違えそうなこの半袖のシャツがメキシコ人、特にユカタン一帯の男の正装なのである。これを着てツバの広いソンブレロをかぶり、鼻ヒゲを生やせば、我々日本人でもマヤ系メキシコ人と間違えられるだろう。それほど日本人とマヤ人はよく似ているのである。

私はスープ、ビフテキ、メロンをとって、更にビールの小ビン二本を飲んだ。メキシコには竜舌蘭という植物の根を蒸留して作るテキーラと呼ばれる地酒がある。これはウォッカなみの強烈な酒で、私には到底ストレートでは飲めないが、かなりうまい。これにオレンジのジュースを混ぜて塩をふったカクテルをマルガリータといい、実に美味で、これならだれでも飲める。彼らはビールもよく飲むらしい。その他コーラやウィンクという清涼飲料なども愛飲されているが、これはどうも水の質が悪くて、安心して水も飲めないという状況によるようだ。

食事の代金は計二十ペソ（約二百六十円）で驚くほど安い。この幻想的なレストランで素敵なひとときをすごしたあと、隣の現地人の工房に入る。ここではインディオの青年彫刻師が石灰石板にマヤの古代の模様をミニチュアにして彫っており、それを即売している。技術は未熟だが珍しいので、一行は我も我もと買いあさる。私も小さな彫刻石板を一個買ったが、売る方はおよそ商売気はなく、包装紙やヒモ類をほとんど準備していない。パレンケの王墓の石棺に刻まれた例の〝飛行士〟の模様を彫り込んだ大きいのもあるが、これは数万円するし、だいいち重たくて、日本まで持って帰るのに一苦労するだろう。だからだれも買わない。しかし私はこの工房でポスターのような大判の〝飛行士〟のカラー写真を百二十ペソで入手した。これは日本では得がたい貴重な資料であり、鬼の首でも取ったような気がした。

三時三十分、ふたたびバスに乗った一行はラベンタ野外博物館に向かう。バスは大平原のまっただ中を真直線に疾走する。そして夕方近い五時から園内に入った。ここにはマヤよりも古いオルメカ族の巨石人頭像が数点陳列してある。数トンもあろうと思われるこの巨大な彫刻を古代にグァテマラから運んだというが、なかにはヘルメットに似た帽子をかぶった像もある。その他オルメカ文化の逸品を見学すること約一時間、またバスでビリャエルモーサ空港に着いて、七時四十分より飛行機で飛び立ち、八時三十分にメリダに着く。

●大平原中の直線道路。数十キロも直線で続く



●ラベンタにあるオルメカの巨石人頭像

インディオの家に招かれる

明くれば十八日、ホテル・エル・カステリャーノで朝食後、全員バスで出発。目指すはウシュマル遺跡である。これはクウプ様式と呼ばれるマヤ古典期後期の

遺跡で、西暦六百年から九百年頃の文化の跡である。またバスは果てしない大平原を突っ走る。空は碧く澄み、酷暑の直線道路を冷房のきいたバスでぶっ飛ばす醍醐味はたとえようもないが、途中、肝心のクーラーが故障したために停車し、修理するあいだに小休止ということになった。下車して前方を見るとインディオの部落があり、あちこちの家から土民の女子供が手に民族衣装をかかえて走り寄って来るのが見える。遠来の珍客に売りつけようという作戦らしい。男の子たちが「ペソ、ペソ」と言いながら手を出すので、五十センターボ貨を与える。

むらがり寄るインディオたちに囲まれた一同が俄市場の売買で安く手に入れようと値切ったりしているとき、見るからに人の好さそうな背の低い老婆がきれいなスペイン語で話しかけた。自分の家を見に来ないかと言う。好奇心にかられて添乗員の田中氏と共にあとをついて行くと、一軒の掘立小屋の中へ案内してくれた。ここは母屋で、土間には赤色の固い敷物が敷いてあり、奥を見ると、隅に古めかしいミシンや洋ダンスも置いてある。ハンモックが二つ吊ってあるが、これは彼らのベッドであるらしい。虫をよけるために、地べたに寝ないのだろう。婆さんは屋内のこうした文明の利器を見せて、〝高度な生活ぶり〟を自慢しようとしているようだ。更に奥へ入って台所をのぞいてみたが、これは全くいただけない。まさに原始そのもので、不潔な流し台の上の棚にきたない土器が数個ころがっている。母屋の裏手には納屋があるが、時間がないので、そこまでは見なかった。急いで家を出るときに、いくばくかの謝礼を渡そうかと思ったが、あいにく小銭がないので、やむなく「グラシアス！」と謝辞だけ述べて立ち去った。けだし彼女の意図は見学料を取ることにあったのだろう。わるいことをしたなあ、と後々まで後悔したが、どうにも仕方がない。

私がメキシコ人の家に招待されたのはこのインディオの文字通りの掘立小屋と後にメキシコ市でマリア・クリスティーナ・デ・ルェダ夫人の城のごとき超豪華なスペイン風の大邸宅の二軒だけで、貧富の両極端を見たわけである。オリンピックをやったぐらいだから、かなりの国力を持つのだろうと思っていたが、やはりまだメキシコは貧富の差が激しい。

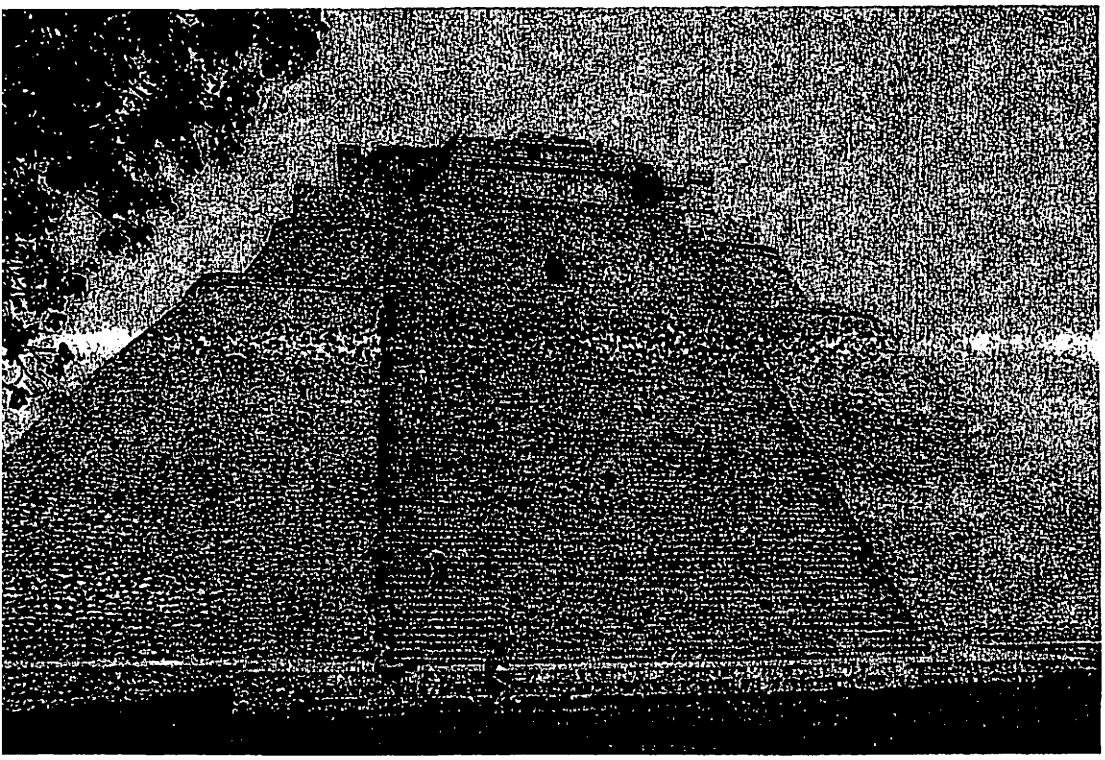
●民族衣装を売るインディオたち

壮麗なウシュマル遺跡

さて、クーラーが直らないので窓をあけたままバスで部落を出発し、やがてウシュマルの遺跡に着いた。

バスを降りて正面入口を入ってまもなく堂々たる『魔法使いのピラミッド』の

●ウシュマル遺跡の「魔法使いのピラミッド」



●ウシュマル遺跡。右前方は「尼僧院」その左端（中心部）は金星の神殿

偉容に眼をうばわれる。高さは三十メートルもあろうか。正面の石段はおそろしく急勾配で、まさに断崖絶壁という感じだ。これを登ったが最後、容易に降りられなくなるから気をつけろと金子氏が注意する。しかし若い同行者諸氏は元気なもので、左側に設けてある鉄のクサリをつかみながらそろそろと登り始める。体力に自信のない私はさすがに躊躇した。そして左手の広大な敷地へまわった。マヤ族古典期の精華ともいうべき神殿群が散在する。ここは紀元七〇〇年頃に始まって八〇〇年から一〇〇〇年にかけて繁栄した宗教都市で、あとで視察するチチェンイッァがトルテカの影響を受けた融合文化であるのに、このウシュマル遺跡は純粋な古典期のマヤ文化の名残りを示している。

左手には『総督の宮殿』と称する壮麗な石造建築物がある。その横の大ピラミッドの修復された石段はさほど急ではないが、ここで、ひどい暑さにへたばってしまった。灼熱の太陽が真近に迫っているのではないかと思うほど照りつけてくる。これはもう太陽の国どころではなく炎熱地獄の国だ。おまけに私の頭皮には防御物が殆どないから、よけいに熱せられることになる。ふだんから人一倍暑がりやなので、まさに眼がくらむほどの異常感がわき起こってきた。これはいけない！　へたをすると日射病になるぞ。早く木陰に避難しなくちゃ――、と思っていたら同行の若い女性Kさんが帽子を貸してくれたので助かった。

そのあと墓のグループと『尼僧院』などを見学する。また古代の球技場跡もある。『尼僧院』というのはスペイン人が発見した当時、そのように見えたというので名付けられたのであって、実際には何に使用されたのか不明である。だが確かに多くの居室があり、壁面の上半分にはプウク様式の美しい石組装飾が見られる。

焦熱地獄からやっとの思いで脱出して遺跡入口前の売店でウィンクを飲んだときのうまかったこと。

午後はウシュマル南方二十キロにあるマヤ古典期後期の遺跡を残すカバーへ行く。ただしここは保存状態が良くなくてあまりパッとしないが、コズ・ポブ神殿の長さ四十五メートルの壁面に、雨の神チャクの仮面が無数に並んで壮観だ。雨の少ない酷熱のこの地方で、雨の神の偶像を礼拝したのは当然である。

入口のパス道路をへだてた西側のジャングル中に、凱旋門に似た大アーチが建てられている。昔はこれを起点としてウシュマルの南端部にある同型アーチまで石を敷いた聖道が続いていたという。こんな暑いジャングル中で古代マヤ人はどんな生活をしていたのだろう。焼けつく石の舗道をハダシで歩いたのだろうか。

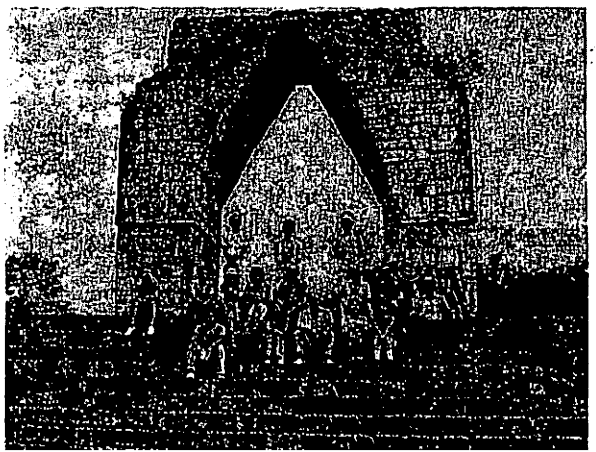
夕方メリダのホテルへ着いて一息ついた。

すばらしい民族音楽

このメリダの町は一五四二年に創建されたスペイン風の美しい町で、白壁の家や住民が純白の服装をしているところから「シウダド・ブランカ（白い都市）」の別名を持つ。だが創建者のスペイン人フランシスコ・デ・モンテホの家に残る紋章が、マヤ人の頭を踏みつけにしているスペイン騎士の図になっているところをみると、征服者の傲慢さが如実にあらわれている。結局、太古からのメキシコ現住民はスペインの文化の恩恵に浴したのか、浴さなかったのか、本当のところはわからない。

夜、ホテルの食堂で食事をしていると三人の楽士が入口の所で演奏を始めた。三人ともギターを弾きながらメキシコ民謡を合唱する。オアハカのホテルでの下手な演奏にうんざりしたので、これもその類かと思ったが、聴いていると、プロ

●カバーの凱旋門型アーチ



級であることがわかってきた。なかなかの名演で、これまで聴いた限りのラテンアメリカ音楽では優の部類に入るだろう。私は誠意をこめて一曲ごとに拍手を送った。ところが、これほどの名演なのに食堂にいる多数の白人たちは見向きもしない。楽団のすぐ前のテーブルに陣取ったフランス人のグループのごときは大声でわめきながら議論をやっている。メキシコの民族音楽が理解できないのか、それとも無関心なのか——。

しかし楽団は奥の方にいる男の凝視と拍手に気づいて、こちらを意識するようになり、ときどき微笑を示しながら私のために演奏してくれているような態度を示すようになってきた。数曲の見事な演奏が終わってから、入口の方へ歩いて行き、もう一度拍手を送ると、三人はひどく恐縮して頭を下げながら英語で一斉に「Thank you」を繰り返した。すがすがしい気分で私は自室へ引き返した。

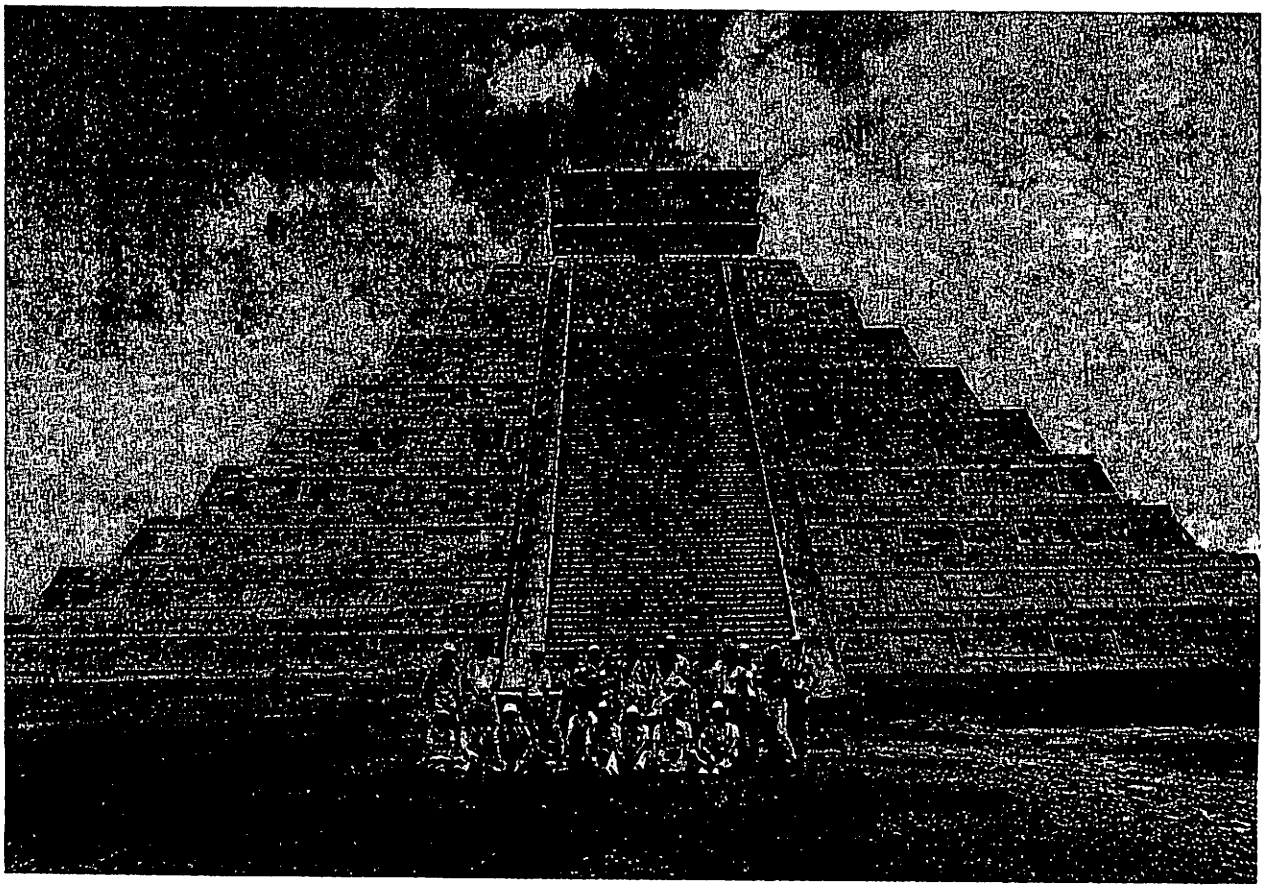
気味わるいチチェンイツァ

十九日朝は九時にバスでホテルを出発した。次の宿泊地はカンクンだが、その途中、チチェンイツァの遺跡を見学する予定である。例によって大草原中の一直線道路を時速百二十キロでぶっ飛ばす。この日も快晴で暑熱は強烈だが、車内はクーラーがよくきいて快適だ。道路ばたにあるインディオの貧しい家がときたまあとへ流れてゆく。ここはすでにユカタンの北部沿岸地帯で、マヤ人たちの本拠地みたいな所だ。インディオの男たちが道ばたや畑に立っているのが見えるが、その服装はみすぼらしい。私はいささか失望した。というのは、終戦後まもない昭和二十四年に公開されたアメリカとメキシコの合作になる素晴らしい映画「真珠」（ジョン・スタインベック原作）に出てくるユカタンのインディオたちの服装にどうも出くわさないからだ。白と黒の階調で描き出された映像美の極致ともいうべきあのなつかしい名画のインディオたちは、長袖の白シャツにパッチのような白ズボンをはき、つばの広いソンブレロをかぶって、メキシコ独特の風俗を示していた。それで今でもインディオはそういうスタイルで暮らしていると思っていたのである。このことを金子氏に話すと、それはカンクンのインディオの服装だから、いずれ見られるはずだという。だがあとでカンクンに着いたときも、そういう姿の男を見かけなかった。どうやら金子氏は、前述した刺繍入りの半そで白シャツと白ズボンのことを言っておられるらしい。インディオのエキゾチックな服装も時代とともに変わったのだろうか。短時日のかけ足旅行ではどうも実態がよくわからない。

平原を突っ走ること約二時間、車はチチェンイツァに着いた。遺跡入口前の道路は外人観光客でごった返しているが、ここでもショートパンツ一枚、上半身ハダカという白人たちが目立つ。

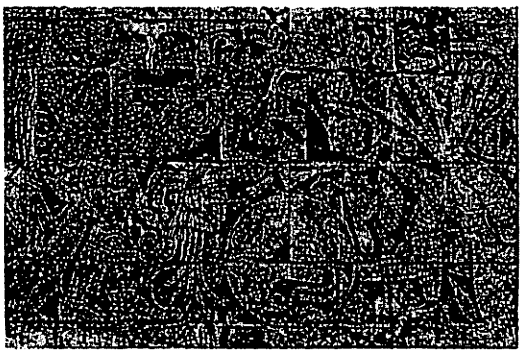
敷地内へ入ると右手に『カスティーリョ（城塞）』と名付けられた雄大な神殿ピラミッドがそびえている。高さは二十三メートル、底面の一辺五十五メートル

●チチェンイツァの「カスティーリョ（城塞）」ピラミッド



●チチェンイツァの古代の「球技場」

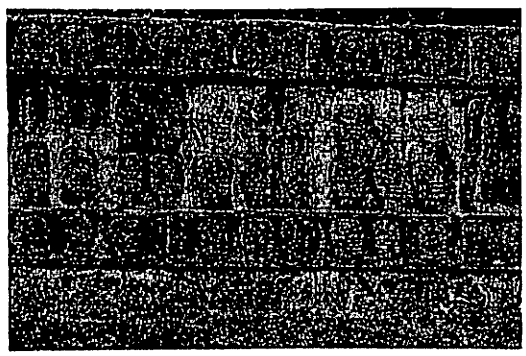
●右端の男の首が斬られて，血が七条のヘビとなる図



の四角錐で、四面に九十一段ずつの石段があり、これに頂上の一段を加えると合計三百六十五となって太陽暦の一年の日数に同じになる。ただし石段がきちんと修復されているのは二面だけで、他の二面はくずれかかった状態で放置してある。近代になって考古学者がセメントを用いて石を練り積みにした修復跡よりも古代のままのくずれかけた石段に興味をもち、その方へ近づいた。基礎辺にはオリジナルと思われる部分がかなり残っているが、相当に狂っている。昔――といってもトルテカ族が侵入してマヤとの融合文化を確立した十一～十三世紀の頃だが――着飾ったマヤ人の男女が登り下りしたのであろう古い石のステップを見つめていると、彼らの足音が響いてくるような幻想におそわれる。古い物を見ると私はこうした想像力が猛烈に高まってくるのである。

左奥には古代の球技場跡があり、ここでゴムのボールによるゲームが行われて勝ったチームのキャプテンは栄光をになって斬首されたという。そういえば壁面に切り落とされた首から血が七条のヘビとなって飛び散る気味悪い光景が浮き彫りになっている。またツォンパントリという長方形の台座には生け贄にされた人間のドクロが壁面一杯に多数彫られているし、その南側にあるジャガーとワシの台座には人間の心臓をもてあそぶジャガー（アメリカヒョウ）の図がある。あとで訪れる『生け贄の池』という恐ろしい遺跡もあったりして、どうもこのチチェンイツァには不気味な物が多いが、これは好戦的なトルテカ族の影響によるもので、マヤ人はもともとこのような思想を持たなかった。

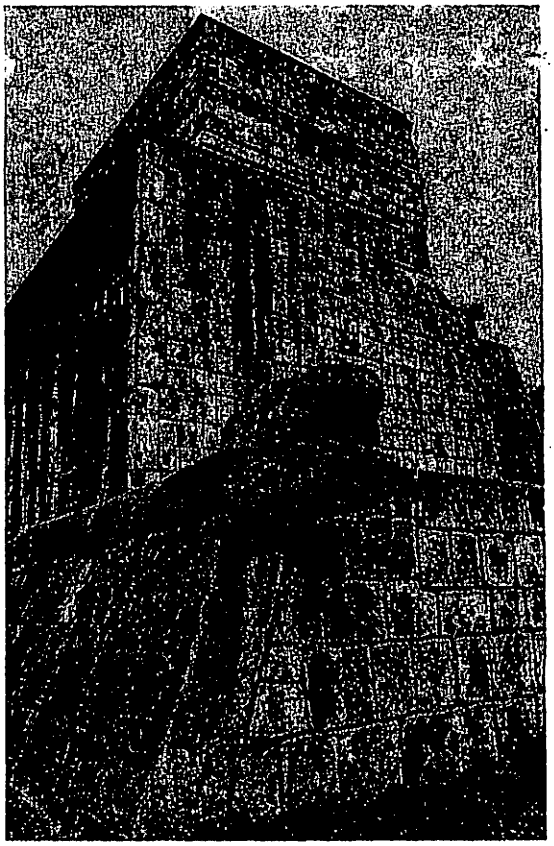
●ドクロの彫刻



カスティーリョ・ピラミッドの祭神はケツァルコアトル（羽毛あるヘビ）で、マヤ語ではククルカンという。これもデニケンが『神々の戦車』で大きく取り上げているが、これはムー大陸のシンボルである。この像もここの遺跡でふんだんに見られるが、デニケンはこれについて次のように述べている。

「ヘビはマヤの建築物すべてのシンボルとなっている。これは驚くべきことだ。というのはマヤが繁茂した草花にかこまれた民族なら石の浮き彫りに花のモチーフを残しそうなものであるからだ。だがどこへ行ってもイヤらしいヘビの模様が待ち受けている。遠い昔からヘビは地面のホコリの中をはいまわっている。しかしなぜそのヘビにマヤ人は空を飛ぶ能力を与えるようになったのだろう？　もともと悪の象徴であるヘビは地面をはうように運命づけられている。どうしてこのイヤらしい生きものを神として礼拝できよう？　しかもそれが空を飛べるとは！　しかしマヤ人にとってはヘビが空を飛ぶことはできたのである（エーリッヒ・フォン・デニケン著「神々の戦車」より）〈『コズモ』（後の『UFOと宇宙』）第四号掲載。筆者訳〉

だれしも推理は自由だが、どうもデニケンは説明不十分で、何を言わんとしているのか理解できない部分が多いが、この最後の「しかしマヤ人にとってはヘビが空を飛ぶことはできたのである」というくだりも、真意がつかめない。なぜ空



●ケツァルコアトル（羽毛あるヘビ）

を飛ぶことはできたと断言するのか。この記述のあとで彼は急にケツァルコアトルの伝説に言及し、白衣を着てあごひげを生やした神について述べるが、ヘビとの関連性は全く見い出せない文章で終始している。

パレンケの石棺のふたの浮き彫りにしても同様である。彼の眼に古代のロケット操縦士の姿に見えたとは！　ある種の先入観をもって見ればそれらしく見えるのだろうが、実物をかいま見た私にはむしろ祭祀的な意味が強いような気がするのだ。

ムー大陸とマヤ人の祖先との関係

マヤ人の起源については謎である。しかし日本人、その他あらゆる民族の起源が謎であることを考えれば、特別神秘的でもない。考古学上では紀元前三世紀から紀元三世紀までの間がマヤ文化の創成期とされ、それ以後九〇〇年までが旧帝国期（古典期）で、これは当初グァテマラの南部地方に発生して、次第に北方のユカタンや東のホンジュラス地域に拡張された。しかし九〇〇年頃から突如この民族はジャングルから姿を消して、以後三百年間行方不明となる。これはマヤに関する最大のミステリーで、今もってこの謎は解けない。

それよりも私の関心を引くのは、この古代マヤ人がオルメカ、トルテカ、アステカ、インカ等の他の種族と異なって、徹底した平和主義者であったという事実である。彼らの遺跡に戦争の図はない。加うるに驚異的な数大系と暦法の知識を有していた。いったいどこから来た民族なのか。

ここで私なりの仮説が出てくる。ずばり言うと、彼らは大昔に海底に没した郷かしいムー大陸人の生き残りの後裔ではないだろうか。ムー大陸ではヘビがシンボルマークであったらしい。悪の象徴どころか知恵と水の象徴にされたのである。詳細は省略するが、このムー大陸の子孫は中米のどこかで宇宙の法則のもとに生き続けていた。そしてマヤ古典期以前の大昔には別な惑星から来るスペース・ブラザーズとコンタクトしていた。上空には巨大な母船が出現し、ジャングル中の彼らの部落の広場には円盤が公然と着陸していた。

しかし周囲に好戦的・非宇宙的な民族が勃興するにつれて、彼らの宇宙的な思想も次第に汚染され始めた。文化も衰退し、生活も低下した。グァテマラは蛮人の侵攻により居住に適さなくなり、新天地を求めてユカタンへ移住した。しかし種族の伝承だけは守っていた。昔、自分たちの祖先を指導した偉大な神（ブラザーズ）がまたやって来るのだと考えた。ときたまジャングルの上空を大きなヘビ（母船）が飛ぶのを目撃し、それに神が乗っていると考えた。そこで父祖伝来のシンボルのヘビに羽を生やさせて、神へのマークとした。これを見れば神々がこの地へ再来するだろう。このケツァルコアトルこそ遠い過去の栄光ある民族の子孫のシルシなのだ――。

約二十年前、アダムスキーは大探険隊を編成してユカタンの遺跡を探索する計画を立てたことがある。当時私はこれに参加することを切望したが、探険は中止された。おそらく資金不足のためだろう。なぜ彼は探険を思いついたのか。理由は明白である。あの大ジャングルの奥地に古代のマヤ人がブラザーズと交流した跡が埋もれていることを現代のブラザーズから聞かされたからだ。これを発掘すれば彼自身の体験の有力な傍証となるだろう。惜しいことをしたものだと当時は切歯扼腕したが、二十年後の今、私がその地域の灼熱の大地に立っていようとは――。

ケツァルコアトルの謎

それにしても、こう暑くてはかなわない。ケツァルコアトルはケツ割るコアトルになりそうで、もう一刻も早く木陰に入りたい、と思いながら『戦士の神殿』の石柱群の間に立っていると、二人の白人が8ミリ撮影機で交替に撮っている。見ると日本の某製品である。彼らはこちらを日本人とみるや微笑しながら接近して、そのカメラが日本製であることを片言英語でえらく自慢し始めた。世界の最高級品だと思っているらしい。尋ねてみるとスペイン人だという。そして私のニコンを見て、しきりに賛美した。また会いましょうというようなことを言って彼らは笑いながら去って行った。

続いて一行は『生け贄の池』へ行く。小さなものかと思っていたら、直径約四十メートルもある大きな円形の深い穴で、ふちから水面まで十メートルはある。内壁は石灰岩の垂直な崖となっており、落ちたら最後、絶対に助からない。水面は濃緑色のどんよりとした、池というよりも沼に近い。昔、干ばつが続くと

神の怒りを静めるために、ここへ生きた処女を投げ込んだという伝説があった。そこで今世紀初頭にアメリカ人研究家のハーバート・トンプソンが水底調査をしたところ、泉の底から幼児二十一体、男子十三体、女子八体の人骨や、貴金属類が発見されて、伝説の正しかったことが証明された。こうした残忍な生け贄の風習もトルテカのものである。

このトルテカというのは中央メキシコの文明が急速に崩壊した時期をついて頭角をあらわしたナワ語を話す種族で、北方から侵入した。十世紀の初頭にはトゥーラを根拠地としていたが、その王であるトピルツィンもやはりケツァルコアトル（羽毛あるヘビ）と自称していた。そしてマヤの記録にもククルカン（羽毛あるヘビ）と自称する一人の偉大な人物が西方からやって来て政治や文化的な指導者になったということが残されている。このことは十六世紀にユカタンを視察したフランシスコ派のスペイン人、ランダ司教も、マヤ人の伝承を聞いた結果を手記に残している。

●「いけにえの池」

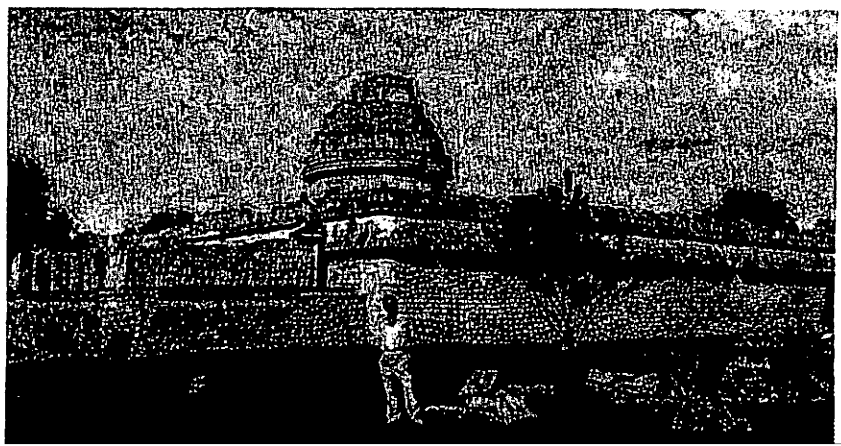
これからみると、「羽毛あるヘビ」というのはある神の名であり、有史以前の遠い昔からグァテマラ、ユカタン、メキシコ中部一帯に伝えられたものと思われる。これをデニケンは宇宙人だと想定しているのだが、私はやはりムー大陸からの伝承シンボルだという気がしてならない。金子氏に聞くと、このユカタン一帯のジャングルには巨大な大蛇は生息しておらず、いても小さなチョロヘビぐらいのものだという。しかるにマヤの遺跡には太い胴の大蛇の彫刻がふんだんに出てくるのだ。伝承が次第に誇大化されたものではないだろうか。とにかくメキシコの考古学ではヘビがあるカギを握る重要な役割をになっていることを金子氏もしばしば力説された。

というわけで、私はメキシコ市の露店で買った小さなゴム製のヘビのモデルをマスコットにして持ち歩き、あるとき同行の一女性の手にそっと握らせたら、キャッと悲鳴をあげて、「センセ、ますますボロが出るじゃないの！」と怒られてしまった。どうも私のプラクティカル・ジョークはサマにならぬらしい。

さて、私たちはチチェンイツァ最大の見ものの一つであるカラコルへ行った。これは古代の天文台と思われる遺跡で、内部にラセン状の階段があるところからカラコル（カタツムリ）と呼ばれているのである。これも、よしきたとばかりデニケンが取り上げるところとなり、彼ははっきりと天文台だと断言している。頂上の観測室は立ち入り禁止となっているために登れないが、壁面には丸い穴があいている。どう見ても天体観測所としか思えないが、エール大学教授で中米古代文化研究の権威者、マイケル・D・コウ博士は「円形の神殿は一般にククルカン＝ケツァルコアトル神を崇めるものとされているため、これがこの神を祭ったものであったという可能性も否定できない」とその著「マヤ」の中で述べている。要するにこの建造物の真の使用目的は不明なのである。しかし推測は自由だから、天文台とみてもよいし、祭祀所と考えてもよいだろう。こうした使途不明の遺跡類を見てつくづく思うのは、遠い過去を透視できるすばらしい超能力者を連れてくるといいのだがなあ、ということであった。非科学的だとそしられても何かの手がかりにはなるだろう。げんに一部の考古学界では発掘に際して超能力を応用しようという機運が生じていると聞いている。

午後一時すぎ、バスに乗った一行は、付近のホテルに付属する近代的なレストランへ入って、やっと炎熱地獄から解放された。ここで私は魚料理を注文したが、どうも油の匂いが生臭くて、義理にも美味とは言えない。ライスも出たが、これはボロボロして固く、胃のよくない私にはまるきりあわない。しかし冷房のきいた広い食堂は快適で、すわり込んだら動くのがイヤになってくる。約二時間ここで休憩したあと、またバスに乗り込

●古代の天文台（？）をバックに立つ筆者。



●ホテル・アリスタス

んだ。食堂を出るときにアメリカ人と思われる白人の中年婦人の椅子のうしろが狭くて通れぬので、Excuse me. と言ったら、彼女は恐縮しながら急いで立ち上がって、広くしてくれた。それで相手が座るにつれて私がボーイみたいに椅子の背を手でつかんでテーブルの方へ押したら、意外にも仲間の数名の婦人がいっせいに微笑して Thank you. と言う。どこやらの国の厚かましい中年婦人たちとはケタ違いに礼儀正しく上品だ。その国の食堂でこんなことをしたら、このイヤらしい男！ とばかり、にらまれるだろう。

限りないブルーそのもののカリブ海

さて、三時にバスに乗り込んだ一行はまた大平原を疾走してカンクンに向かった。いよいよユカタンの最突端に位置する新興保養地で一日休養をとろうというわけである。広漠たる大地を突っ走ること約二時間、カリブ海岸の美しい町カンクンに着いた。ホテルは砂浜に面した町はずれにあるので、それまでに車中から町の様子をよく観察することができた。なんときれいな市街地だろう。ヤシの木の並んだ道路ぎわの家屋の純白の壁が青空に映えて、みるからに清潔そうだ。

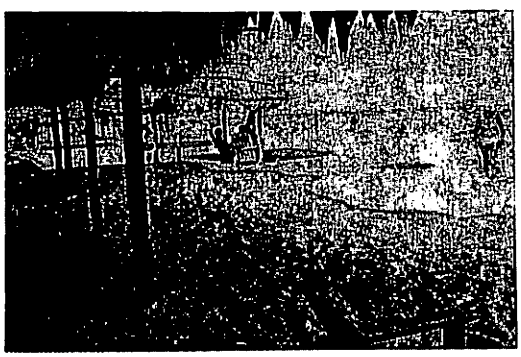
ホテル・アリスタスに着く。この建物は三階建てで、こじんまりとしているが、おそらく自室でハダカになってすぐ裏の浜へ出る便利を図ったものだろう。高層ビルのエレベーターで昇降するよりも別荘的な雰囲気に溢れている。

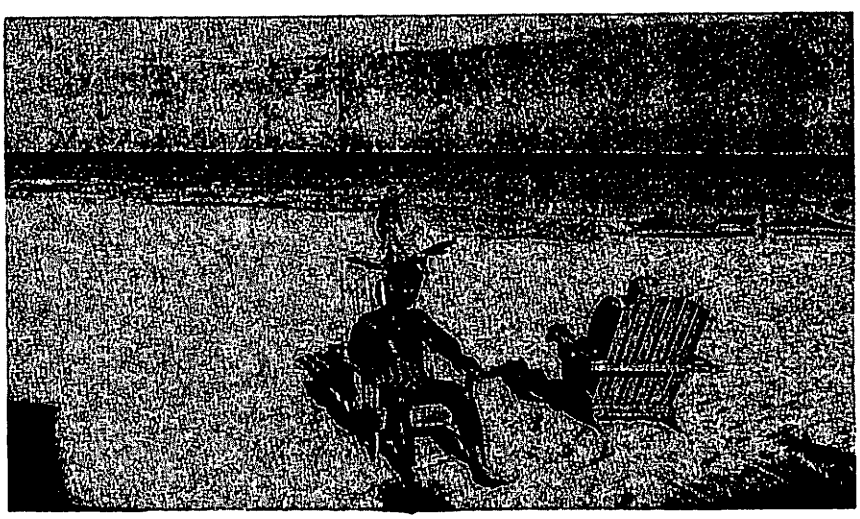
自室でただちに衣類の大洗濯をやった。むかし軍隊で洗濯はうんときたえられたから、少しも苦にならない。何事も体験が重要だ。

夕食事には食堂でGAP会員のみの集合にして食事をとりながら宇宙哲学問題を語り合おうということになり、手筈がととのえられて、適当な位置に十数名で座を占めたが、食堂内は騒がしくて、まるで話し合いにはならない。そのうちに専属の楽団が現れて民族音楽の演奏を始めたので、私の耳はその方に注意を集中してしまった。楽団といってもギター二挺とインディアンハープ一台から成る三人組の男で、これを演奏しながら合唱するという典型的なメキシカンスタイルである。騒然たる人声の合間に流れてくる楽音はすばらしくて、なかなかやるなあと感歎しているうちに、曲は聞き覚えのあるメロディーに変わった。なんとそれはなつかしい「ラ・クカラチャ」ではないか！ メキシコの代表的な民謡であるこの曲は、私が終戦後にジャズバンドを組織して演奏させていたもので、当時はルンバに編曲していた。だがここでは急テンポのワルツで合唱している。後にメキシコ市でマリアッチにリクエストしたときも同じテンポのワルツで演奏したところをみると、この方が本場での歌い方らしい。高鳴る胸をおさえながら耳を澄ましたが、騒がしくてよく聴こえない。よし、明晩ここでまたリクエストしようと、あきらめて食事をすませた。

食事後、食堂の外のプールサイドのテラスに出て、ここでテーブルを囲みながら数名の人と哲学問題等を話す。近くのテーブルに一人で座っている中年の白人の女性を見つけて、この人は連れのない独り旅なのだろう、英語を母国語とする人なのだろうと直感し、こちらへいらっしゃいませんか、と英語で声をかけたらやって来た。尋ねてみると直感は的中した。アメリカのマサチューセッツから独

●カンクンの浜

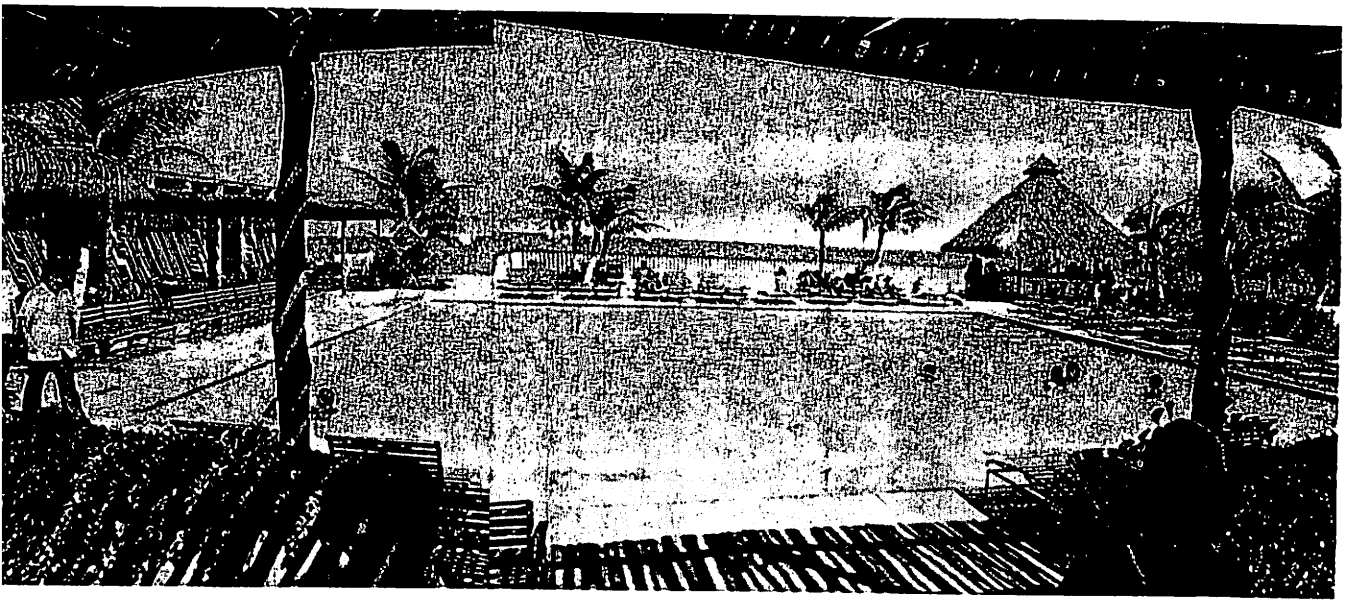




りで保養に来たという。そこで、マサチューセッツのノースボロにUFO研究家の知人がいると言うと、意外にもその付近の町に住んでいると答える。よほどアリス・ボマロイのことを話して、伝言を頼もうかと思ったが、やめた。UFOに関心があるかと尋ねたら、もとはなかったが次第に興味をもつようになったという。その他、ハワイの真珠湾攻撃の話になったが、彼女はそのことに言及したがらない。そうこうするうちに、彼女は手を差しのべて握手を求め、このテーブル

●プールサイドにて。左より奥津氏夫妻，筆者，田中氏

●ホテル・アリスタスのプール



に呼んでくれて有難うと鄭重に礼を述べたあと、バーの音楽が終わったからこれで眠れると言って去って行った。アメリカには小金を貯めて一人旅をする婦人が多いと聞いていたが、ここにもその典型がいたわけだ。

明くれば八月二十日、今日は終日自由行動なので、大いに泳ごうと、前日カンクン市内のスポーツ店で買い求めた海水パンツ姿で十時半頃に自室を出て、裏の砂浜に出る。なんと素晴らしい海岸だろう。白い波が燦然と押し寄せるカリブ海は薄緑色を呈し、水は透明そのもので、焼けつくような砂は白く、しかも驚くほどキメがこまかい。まるでメリケン粉をまいたような砂浜だ。水に入るのは数年ぶりとあって私は子供のように嬉々として波とたわむれた。同行の女性数名がやって来る。そのビキニ姿を見るのもわるくはないが、私はこの海との一体化の想念を高めることに神経を集中した。波が荒いので泳ぐには適さない。砂浜に上がって、小屋がけの小さな椅子で休み、また海に入る。

しばらくして今度はホテルのプールへ引き返し、ここで存分に泳いだ。むかし選手をやったことがあるので、多少の自信はあるものの、クロールの型がくずれはしないかと懸念したが、結構うまくゆく。なにせ子供の頃から海と川で育ったようなものだから、水はタタミ同様だという感覚は今もって失わない。ただしさすがに体力は衰えて、わずか十数メートルのプールを全力で泳ぐと、あとが続かない。回転ターンなどは昔の夢になって

しまった。このプールは人気が少ないので都合がよい。水とのたわむれを満喫して三時頃、サイドへ上がり、同行の年輩者奥津先生にビールをご馳走になったあと、身仕度をととのえて五時にホテルをタクシーで出た。ダウンタウンへショッピングに行こうというわけで、女性二人と青年一名が同行する。タクシーに乗って驚いた。なんと片側の窓ガラスは全部取り除かれて、風通しのよいことこの上ない。

市内中心部の商店街——といっても繁華な通りではないが——に着き、店を次々とのぞいて見る。観光客用の土産物店が多いが、客はまばらだ。メキシコは銀が豊富だから、銀製品が多い。

そのうちにメルカード（市場）があることに気づいて、中へ入り込んだ。迷路のような狭い道の両側に小さな店が沢山並んでいる。ただしオアハカのそれのような不潔なものではないし、ここの店員たちも穏和で危険感は全く起こらない。しかし英語はほとんど通用せず、すべてスペイン語である。たまに片言英語を話す人がいても、ひどくブロークンで、最初に入った店の女主人の息子らしい男の子はマヤをマジャと発音していた。これはスペイン語の習慣によるものらしい。

途中、レストランで食事をして、タクシーで八時半にホテルへ帰った。

すぐに食堂へ行くと例のトリオが入口の所で演奏している。接近して「ラ・クカラチャ」をリクエストすると、こころよく合唱を始めた。これは素晴らしい！まさにラテンアメリカ音楽の真髄に触れた感じがする。合唱中に一人がルラー・アッハーと声高く合いの手を入れるときなどは体がしびれてくる。インディアンハーブの男の技巧は相当なものだ。私はすっかり陶酔してしまい、これを聴いただけでもメキシコへ来た甲斐があったと歓喜で全身が爆発しそうになった。テープレコーダーを携行していたのに手元になかったのが残念だが、耳で一度だけ生演奏を聴いたところに価値があるのかもしれない。例によって大半の客は演奏に全く無関心だが、それはどうでもよい。私のために演奏してくれたのだ。心から大きな拍手を送った。

翌二十一日はユカタンから引き揚げて再びメキシコ市へ引き返す日である。名残り惜しいカンクンのホテルを出発したのは十時だ。外へ出ると南国の太陽はものすごく暑い。

空港へ十時半に着いたのだが、メキシコ市行きの飛行機が十一時四十分に出発する予定であったところ、二時間も遅れて、結局午後の一時半に離陸した。そしてメキシコ市に着いたのが三時半となったために、この日の午後、予定されていた国立人類学博物館行きの時間が少なくなってきた。それでバスはそのまま同館へ直行したのである。

メキシコ市でマリアッチを聴く

広大な建物の内部にはすばらしい出土品やパノラマなどが陳列されて壮観である。ただし陳列物の説明文がスペイン語だけというのはいただけない。英文で並記してあればよいのにと思う。

最大の圧巻はアステカ族の太陽の暦板である。これは二十五トンもある巨大な一枚石に直径三・五メートルの円型の模様を彫り込んだもので、中央には太陽神タナティウの顔が刻まれている。口から突き出た舌は人間の血と心臓を欲しがっているのだという。この大石板は一四七九年に完成して太陽神に捧げられたもので、一七六〇年にメキシコ市で発見された。種々の神々が彫られたこの奇妙な模様はアステカの暦だといわれているが、真相はわからないという。

博物館を出てからホテル・デル・プラドへ着く。今夜は待ちに待ったマリアッチの見学だ。このことを話すと、数名の男女が一緒に行きたいと言う。七時にフロントの係員に道順を聞いて、裏口から出た。しばらく道路をぶらぶら行くのに次第にさびれた地域へ行くような気がする。これはおかしい、というわけで、通りすがりの美しいセニョリータにスペイン語で尋ねると逆方向へ向かっていたことがわかり、また元の方角へ引き返す。ホテルのクラークが右の方へ行けばよいと言ったので、そのとおりにしたのだが、裏口から出たために逆方向へ行ったのだ。

今度は繁華街へ出て、アラメダ公園の前を横切り、ラテンアメリカ・タワーの前から左へ曲がって、まっすぐ行くと、目指す『ガリバルディ広場』へ来た。ここはメキシコの民族音楽の本拠ともいうべき場所で、マリアッチという楽団が野外演奏を行う場所として名高いところから、通称マリアッチ広場と名付けられているのである。マリアッチとは七～八名の男が民族衣装をまとい、トランペット、バイオリン、ギターなどで編成してメキシコ音楽を奏でるものをいう。

広場に近づくと、いる、いる。十数組のマリアッチがあちこちにたむろして、はなやかに演奏しており、それを群集が取り巻いて、実ににぎやかだ。割り込んで聴いてみると、どうも演奏がうまくない。遠くから流れて来る各マリアッチの音楽も大同小異で、私はいささか失望した。そうだろう。シルベストレ・バルガスのごとき一流のマリアッチがこんな場所でやっているわけがない。ここにいる

●マリアッチとともに

各グループは一種の「流し」なのであって、客のリクエストに応じて演奏してはチップをもらい、生計を立てているのである。一流楽団はステージに出たりテレビに出演したりしているのであろう。だが日本人の演奏するラテンアメリカ音楽とは根本的に何かが違うことに気づいてきた。民族の感覚の相違なのだろう。

7名の若い人で成るマリアッチに接近してリクエストしてみた。最初の曲は有名な民謡「ランチョ・グランデ」だ。彼らはただちに演奏を始めた。人々が群らがり寄って来る。技巧は二流だが、きわめてエキゾチックで、これはこれなりに一聴に価する。続いて「ラ・クカラチャ」を頼むと、これも急テンポのワルツで演奏する。しかしどうみても前夜カンクンで聴いたトリオの方がはるかに良い。マリアッチはトランペットが主体となるので、このけたたましい音をよほどうまく出さないと興ざめになる。更に彼らはマラゲーニャともう一曲の計四曲を演奏した。日本で買ったメキシコ旅行案内によると一曲につき二十五ペソと書いてあるので、百ペソ紙幣を謝礼に出したところ、代表格の男が不満そうな顔をして受け取った。何も言わない。あとで仲間の女性に聞くと、一曲四十ペソが相場らしいという。どうも旅行案内書というのはあてにならない。多くの海外旅行者が携行する六カ国語辞典というのも、まず役に立たないと思えばよい。使用頻度の最も高い会話文はなくて、つまらぬことばかりが書いてある。

広場の人混みの中をうろついていると インディオの男が近寄って民族衣装を買わないかと言う。毛糸の婦人用肩かけや毛布地の男ものポンチョを持っている。一同、ひとしきりの交渉を続けた。相手の言い値の半分の数字を出すと必ず値下げしてくる。それを更に下げさせる、という具合に談判が続いて、結局、女性たちは肩かけ、私たちはポンチョを買った。買わされたという方が適切だろう。しかし、デパートなどでだれでも買える確実な品を正札で買うよりも、夜のマリアッチ広場でインディオと渡り合って買った品の方が旅行者にとってはるかに良き思い出になる、と私は同行者たちに説いた。

私たちは各自の品を直接に身につけて大通りを歩きながら帰って行った。私のポンチョ姿など日本ではコッケイだろうが、ここメキシコではありふれた衣装だから、だれも笑わないし、見向きもしない。だいいちメキシコ市は標高二千五百メートルの高地で、ユカタンに比べれば日中はかなり涼しく、夜ともなれば冷えてくる。半袖シャツ一枚ではさすがに寒いので厚いポンチョを着ていると風邪をひかなくてすむ。一同は民族衣装を着けたままぞろぞろとホテルのロビーへ入った。

二十二日は八時に起床。洗濯をすませたあと十一時頃にショッピングに出た。今日は一時からテオティワカンの遺跡へ行く予定で、それまでは自由行動となっている。独りでホテルを出て、アラメダ公園前の広い大通りをへだてた向かい側の商店街をカメラ片手にぶらぶらとひやかしながら歩くのに、どうもこれはという店に出くわさない。しばらく行くと、道の角にショーウィンドーがあり、土産物類が手ぎわよく並べてある。のぞき込んでいると、店員らしい十五～六歳の娘さんが近寄って品物をあれこれとスペイン語で説明する。英語で質問すると、先方もあざやかな英語で答える。美人ではないが、日本人に似た顔の、みるからに利口そうな愛想のよいキビキビしたセニョリータだ。よし、ここで買おう！ 私はホゾをきめて腰をすえた。まだ社員宛の土産物を十分にそろえていないのだ。ただちに交渉を開始する。同一種類の品を数多く買うと値を下げるが、一定線以下はピシャリと断ってくる。それがまた奇妙に好感を与える。そのうち気がついた。この店は建物の一角のショーウィンドーを借りているだけで、営業はこの娘さんと、かたわらにいる十二、三歳位の弟の二人だけでやっているらしい。品物が不足すると、弟に命じてどこからか持って来させる。

相当数の品物の購入が終わって、品別に粗末な紙袋に入れてくれたが、これでは持ち歩きできないので、日本流に大きな買物袋を要求すると、そんな物はないと言う。みると経木編みに似た大きな手提袋があるので、それをサービスにくれと言うと、タダで上げるわけにはゆかない、安くするから買えと言う。仕方なしにその袋を求めて品物を詰め込み、別れぎわに、いつか日本へいらっしゃいと言うと、嬉しそうに微笑して、必ず行きますと答えて手を振った。

テオティワカンの雄大な「太陽のピラミッド」

一時にホテルの玄関前に集合してバスに乗る。目的地は市の南方五十キロのテオティワカンである。いよいよメキシコ滞在最後の遺跡見学だ。

約五十分後に現地に着いて、少し手前のハイウェーのそばに一時停車し、柵越しに『死者の大通り』の右手彼方にそびえる雄大な『太陽のピラミッド』と前方の『月のピラミッド』を望見する。しばらく写真を撮影したあと、現地の駐車場で降りて、太陽のピラミッドの正面側へまわる。高さこそ六十五メートルと、エジプトの大ピラミッドより劣るが、底面の一辺は二百二十五メートルあり、容積は百万立方メートルに達して世界有数である。壮大無比のこの建造物は石造ではない。一億万個の日干しレンガを積み上げたもので、表面には火山岩の破片を並べて粘土と石灰で固めたのである。したがってエジプトの石造のピラミッドのように表面がゴツゴツしていない。

付近の『ジャガーの寺』の遺跡のあたりで記念撮影したあと、正面の石段を登り始めた。これは今までに登ったピラミッド類の石段のように急勾配ではないので、比較的楽だが、なにせ石段の数が多いので息切れがして、途中でたびたび一休みする。やっとの思いで頂上に着くと頂上部は十メートル四方の平坦な石の床になっている。下界を眺め渡すと、広大な古代の宗教都市跡が展開する。眼下に

●『太陽のピラミッド』を背景に

は幅四十五メートル、長さ四キロの直線の『死者の大通り』が左右に伸びて、その北端に少し小型の『月のピラミッド』が望見され、左手の南端には城壁の内部に『ケツァルコアトルのピラミッド』が見える。

壮大きわまりないこの計画都市は、いつ頃、だれの手によって建設されたものだろう。考古学では大体に紀元前二百年頃に創建され、紀元前後頃に完成したということになっている。当時の面積二十二平方キロ、人口約十万と推定されるこのテオティワカンの最盛期は、紀元一〇〇年代から六〇〇年代までで、中央高原に住む〝謎〟の民族がオルメカ文化の影響を受けて発展させたと考えられている。しかし最大のミステリーは、この大宗教センターを建設した〝謎〟の民族が、七世紀に突如消滅するという事実である。マヤの大蒸発と双璧をなすこの謎は今もって不可解であるが、だいいち、これらのピラミッドや神殿と称される建造物が何に使用されたか皆目不明のままである。『太陽のピラミッド』、『月のピラミッド』、『死者の大通り』とかは、十四世紀初頭、流浪の果てにこの地へたどり着いたアステカ族が、偉大な廃墟の壮厳さに打たれて名付けたもので――これらの名称もなかなかロマンチックではある――、そのゆえに彼らはこの大廃墟をテオティワカン（神々の都）と呼んだのである。

建造者不明の途方もなく雄大な『太陽のピラミッド』の正面は、毎年夏至の日に太陽が沈む方角と一致している事実が実証されているが、それからみると、何かの意図と高度な知識が秘められているのだろう。

ただし現在のこのピラミッドは一九一〇年のメキシコ独立百年祭にそなえて、考古学者レオポルド・バトレスが復元時に熱中のあまり原型をとどめぬほどに形を変えてしまったもので、元は四つの大きな層となっており、外部には全面に石が張られていたのだとマイケル・D・コウ博士はその著「メキシコ」の中で述べている。

金子氏の説明によると、メキシコ各地の修復された遺跡は、近代の考古学者が「このような形だったのだろう」と推定して作り直したもので、石積みの間にはコンクリートがつめてある。これらを昔のままのオリジナルと勘違いする見学者が「ええのう、ええのう」といって驚嘆の眼を見張るというわけだ。

それはともかくとして、この『太陽のピラミッド』に関して、建設者やその意図については考古学界でも謎とされているのだが、正統考古学は主として出土品や古文書等を土台にした推定の域を出ないために結局〝不明〟で終わる場合が多い。

しかし、前述したように、大透視能力者に透視させたらどうだろう。非科学のそしりをまぬがれ得ないだろうか。ところがどっこい、一九三〇年、フランスの透視能力者ポール・ベルジェール――彼は主として地下の水脈の透視を専門にしていたが――は、テオティワカンの太陽のピラミッドの写真を凝視して、第一層

の基底部から約三メートルの深部に別な通路へ通じる秘密の入口を発見したと述べたのである。しかもその奥にトンネルがあって、これはピラミッドの中心部に位置する一個の室につながっており、その右側には別な小さな通路、左側には別な部屋があり、その中に黄金製の六個の品物があることを透視した。この声明は俄然一部の考古学マニアたちの関心の的となり、これが契機となって各種のトンネル発見の探索が行われるようになり、この遺跡の保護主任エルネスト・タボアダや発掘監督のホルヘ・アコスタらによる一連のトンネル発見騒ぎが展開するのである。詳細は省略するが、探険隊はトンネルの百メートル下部で四つ葉のクローバ型の洞窟を発見し、ここで多数のツボ、神人同形の人物像を彫った円盤状プレート、鏡などを発見した。そして彼らは遠い昔からメソアメリカでは洞窟というものが創造と生命の重要なシンボルであったことを知ったのである。

また古代のメソアメリカでは二種類の基本的な宗教儀式があった。一つは太陽崇拝信仰で、これは男がピラミッドの石段か頂上で行い、他の一つは母なる大地と暗黒の力に捧げて夜間に洞窟内で女が行うと、考古学者のセリア・ヌッタルが述べている。

雄大な『太陽のピラミッド』の頂上で、如何なる儀式が行われ、どのような光景が展開したか？

今、頂上のその場所にいる各国の見学者には想像もつかないだろうし、そんなことを考えもしないだろう。考古学者は無言で答えるだけだろう。

そこで別な透視能力者ジョーフリー・ホドソンに登場を願うことにしよう。彼の透視によれば次のとおりである。

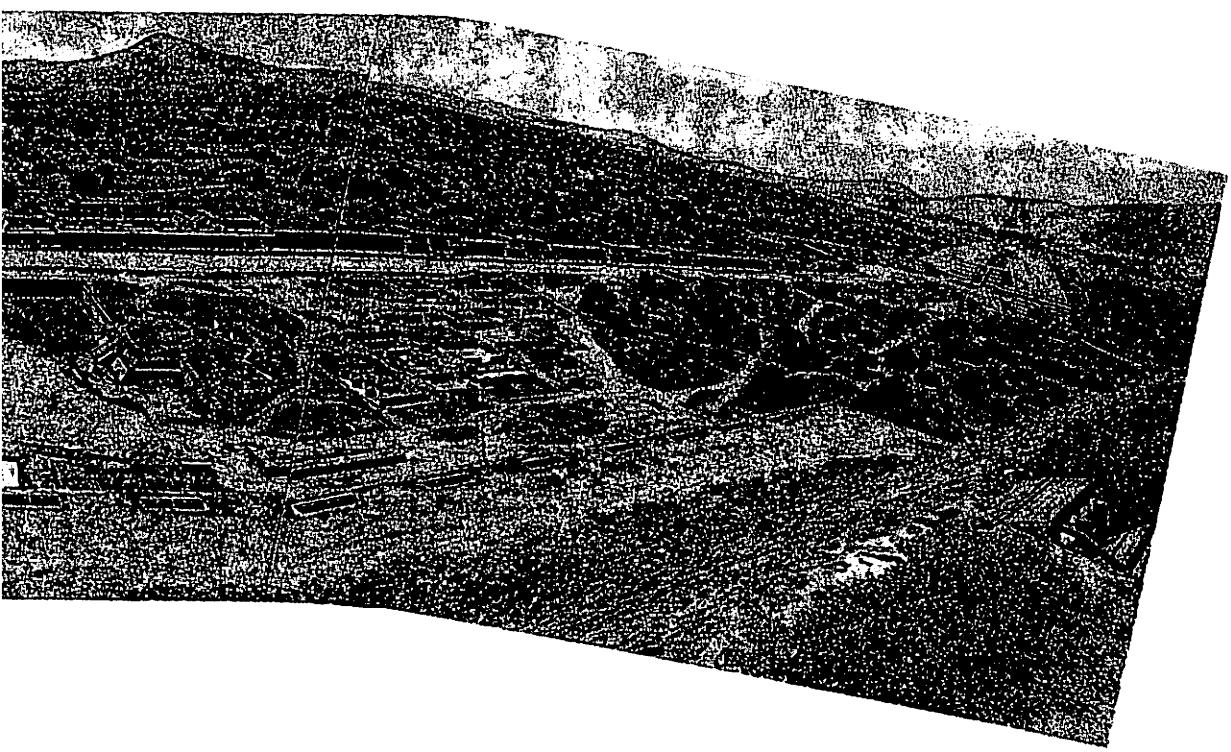
「この頂上には古代に小さな木造の神殿が建てられていた。一人の主祭がおごそかに儀式を始める。皮膚は赤銅色、背は高く、ワシのような鼻のある顔は輪郭がよくととのい、眼は力に満ちて、顔面には力が溢れている。頭部には大きな羽飾りをつけ、美しい衣をまとっているが、その色は主として赤、黄、緑で、首と腕と足は宝石で飾られている。この男はアトランティスの奥儀を授けられた人である。この聖なる儀式は日の出、正午、日没時に行われたが、特に正午が重視され、それは神殿の上に立てられた垂直の棒で測定された。

そして上空高く、少なくとも長さ一・五キロはある巨大な黄金の神（UFO）が滞空し、一個の神の聖杯を形づくるようにつらなった。その聖杯には高次元から引き出された一種のエネルギーたる太陽のワインが満たされている——」

要するに『太陽のピラミッド』の儀式は、宇宙に遍満するエネルギーを人体に吸収しようとするもので、謎の古代人はそのエネルギーの中心的源泉は太陽であると考えており、そのエネルギーが司祭の顔や背椎を急速に通過するのもホドソンには透視できたという。

いささか心霊めいてくるが、まあいいだろう。透視現象は確実に存在するが、物的証拠はないし科学的な測定も不可能である。ひとつのインフォメーションと

●「太陽のピラミッド」正面頂上より見た風景。前方の大通りが「死者の大通り」。右端の建造物は「月のピラミッド」



して心の片隅にたくわえておけばいいのだ。ムキになって反発する必要もないし、あたまから盲信することもあるまい。

さまざまの想いにかられながら、私は頂上の隅に立って、インディオの少年から買ったアイスケーキをしゃぶりながら広漠たる周囲を眺め渡した。ここで何事が行われたにせよ、どうせ遠い過去の出来事だ。現在の自分には何の関係もない。それよりも未来の事を考えよう——。

私は降り始めた。下から大勢の人が登って来る。石段の途中の平坦部にはインディオの男たちが奇妙なメロディーを奏でながら原始的な笛を売っている。面白そうなので近寄ると、今まで彼が吹いていた笛を突き出して買えと言う。胸がわるくなって、また石段を降りて行く。

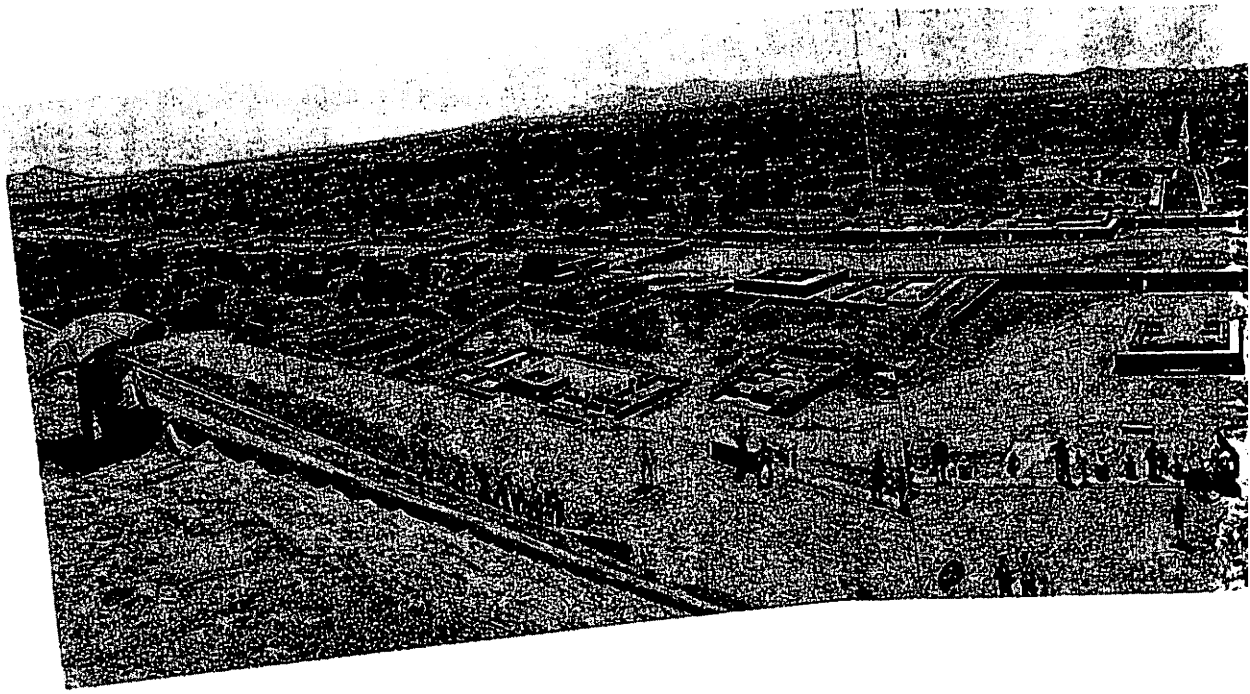
地面に着いて、駐車場を目指して歩いていると、またインディオの若い男が右手を突き出す。見ると黒曜石の彫刻を持っている。古代の彫刻のイミテーションだ。クアント（いくら？）と尋ねるとトレス・ディエス（三百ペソ）と言う。ドス・ディエス（二百だ）と言うと、とんでもないという顔つきを示すが、しばらくやりとりしたあげく、結局二百ペソに負けさせて買い取った。こんな物はメキシコ市内の土産物店でいくらでも売っているが、例によって大ピラミッドのそばでインディオから直接買ったという体験を追憶の中にとどめようというわけである。

一同はバスでふたたび草原を疾駆してメキシコ市へ向かった。市内に入ってから、金子氏の案内で土産物の大センターへ寄った。あるわあるわ、メキシコの民芸品、特産品が山のように並べてある。このセンターは半官半民の経営だからデパートと同じで、正札で売っている。銀製品がやたら眼につくが、みな相当な値段だ。価格をまけないから、みんなはあまり買わないようだ。ここには日本人がワンサと押しかけている。

マリアの家を訪問する

六時半にやっとホテルへ着いた。七時にはマリア・クリスティーナ・デ・ルエダ夫人が迎えに来ることになっている。あと三十分しかない。大急ぎでシャワーを浴びて身仕度をととえ、カメラ、テープレコーダー、土産物等を準備して、一息ついていたら、自室の電話が鳴った。受話器をとると、ホテルのクラークが、マリア夫人の使者が来たが、英語がよくしゃべれぬようなので、至急降りて来いと言う。

エレベーターを出て、すぐ左側のフロントの方へ近づくのに、どうもそれらしい婦人が見当たらぬ。あちこちを見回していると、五十がらみの薄汚い男が近づいて、セニョール・クボタ？と聞く。そうだと答えると、かたわらの老人を指さして、この人はマリア・クリスティーナの主人だという意味のことをひどいなまりの英語で話す。みると、八十歳位の老人が杖をついて立っているので、互いに会釈をする。マリアの代わりに御主人が迎えに来たのだということに気づいて、



私は二人のあとに従った。

三人はホテルの駐車場の方へ行き、そこで車が出て来るまで立っていた。どうも様子がおかしい。この老人は高齢で、服装は立派だが、ヨボヨボだ。そうするとマリアもかなりの年齢なのだろうか。私は五十歳ぐらいだと思っていたのに——。そしてもう一人の男は息子さんなのか。私は思いきって尋ねてみた。

「あなたはマリアの息子さんですか」

男は私の英語が理解できないらしい。そこでスペイン語にきりかえて、マリアはあなたの母親なのか、と尋ねると、男はびっくりしたような顔をして、いや違う、自分はお抱え運転手だと言う。

やがて車が出て来て、三人が乗り込んだ。黒塗りの立派な車で、内装も上等である。次第に状況がのみこめてきた。それまでマリアという婦人をメキシコの平均的な一般市民の主婦だとばかり思っていたのだが、実際にはかなり富裕な階級なのだ。どんな家に住んでいるのかな、と好奇心が高まるのを感じながら窓外を見ていた。十四、五分走ったあと、車はある閑静な地域に入って行く。あたりは大きな家が並んでいる。

すると車はある大邸宅の門前で停車した。降りて見上げると、まるで城のような建築である。こりゃエライ所に来たなと思っていると、開いた門の横にカーキー色の制服を着たボーイがうやうやしく立って迎えている。

玄関前の長い小道を老人のあとについて歩いて行き、室内の大ホールへ入ってからアッと驚いた。なんという豪華な屋内だろう！ 高い天井からシャンゼリアがさがり、壁や太い柱には彫刻が施されてその様式は完全にスペイン風である。左手にはラセン階段があって、その黒い手すりにも見事な彫刻がついて二階へ続き、二階にもドアーが沢山見える。まるで西洋の古典ドラマの映画の一場面を見るようだ。

マリアはすでにホールの入口で待っていた。全くの白人タイプで、背が高く、顔もかなりの年齢らしくてシワが多い。私のイメージは完全に違っていた。色の浅黒い東洋的な顔をしたメスティーソ（混血）のメキシコ人だとばかり思っていたのだ。

彼女は微笑してあたたかく迎えてくれた。大ホールの左側には更に十帖ほどの応接室が二つ隣接し、その左端にも部屋がある。右端の応接室へ案内されて、私は奥のソファに腰をおろした。老人はいったん奥へ引っ込んだが、まもなくジャケツ姿で出てきて右側のソファに座る。マリアは左手の長いソファに座って話しかけてくる。

「遺跡を見たのですか？」

「ええ、多くの遺跡を見学しました。モンテアルバン、ミトラ、ウシュマル、パレンケ、チチェンイツァなど。そして今日はテオティワカンへ行きました」

「この国をどう思いますか」

「すばらしい国ですね。大好きです」

彼女はひどいスペイン語なまりの英語で話す。文法もかなり間違っているが、本人は平気らしい。大きな声でしゃべりまくる婆さんという感じだ。

しばらく雑談を続けたあと、私はアダムスキーのことについて尋ねてみた。彼女はかつてアダムスキーの高弟として親しく接した人で、毎年クリスマスにはこの家へ休養に招待していたのである。相当な情報を持っているかもしれない。

奇跡をおこなったアダムスキー

「アダムスキーについてうんと話して下さいませんか」

「ジョージ・アダムスキーについて聞きたいのですか？」

「そうです。彼はどんな人だったのですか」

「私の生涯の中で最も素晴らしい人でした。まじめで謙虚で、知的で、分析的で賢明で、大変な人です。また奇跡を行いました。しかし彼は奇跡ではなく科学だと言っていました。でも彼のやる事は奇跡です。たとえばこういう事があったのです。

私の母が重病で寝ていました。胆石ができて数年間寝たきりなのです。しかもひどく痛むんです。

するとアダムスキーがあるクリスマスの夜に来て、夕食を共にしました。

突然、ワインのはいったカップが現れて、私に次のように言うのです。

『このワインをお母さまに飲ませてあげなさい。ブラザーズ（宇宙人）はあなたに至福を与えようとしています。あなたがブラザーズ問題をまじめに考えて、その方に愛をそそいでいるからです。このワインを飲むようにお母さまに話しなさい』

私は母の所へワインを持って行きました。すると八日後に室内電話で母が言うんです。

『胆石が出てきたよ。全然痛みもない。大きな石だよ！ 痛みも出血もないよ』

これは約十六、七年むかしのことですが、それ以来母は痛みを感じなかったんです。ときおり母の体から石（複数）が出たんですが、痛みはなかったということです。すばらしい事だと思いますわ。

また、この家の女中の一人が腹に腫瘍ができたんです。そこでアダムスキーがそれを見舞いに行って、あと二カ月すれば治ると言ったんです。すると二カ月後に本当に腫瘍が消えて、完全な健康体になりました。

アダムスキーは、まじめに考えようとしない人々のいる所では、こんな奇跡をおこなおうとはしませんでした。彼は奇跡をおこなっても黙っていました。本当に素晴らしい人です。あなたは彼に会ったことはないんですか？」

「ありません」

「それはお気の毒なこと。だって彼は大変不思議な、素晴らしい人だったんですもの。彼のお腹にバースマークがあるということを聞いたことがあるでしょう。その他に、どんなことを聞きたいんですか」

「そうですね、ジョージ・アダムスキーは毎年ここへ来たということですが——」

「ええ」

彼女はイエースというのをメキシコ訛でジェースと発音する。すべてこんな調

●前列左端がマリア，その右は夫君のルェダ氏。後列右端が孫娘（筆者撮影）

子だから聞きづらいことおびただしい。

実はこの場所には、マリアが左側に、ご主人は右側に座っているのだが、それ以外に十歳位の彼女の孫娘と、それの友達だという女の子が三人ほどソファに座っており、最年長らしい十四、五歳の女の子が少し英語ができるとみえて、マリアのひどい英語で私に理解できない部分があると、正しい発音で言い直す役を務めてくれたのである。この女の子たちはきわめてお行儀がよく、上流階級の雰囲気にふさわしいマナーを身につけている。

「彼はクリスマスに来たそうですね」

「そう、クリスマスに来ましたわ」

「休養に来たんですか」

「そう。でもクリスマスの休日中は他の場所へ行かずに、いつもここへ来ていました。彼はすぐれたテレパシック・マンでしたから、私の心を読み取ったのですわ。私が真剣な人間だということを知っていて、それで毎年クリスマスに来たのです。彼は私に美しい絵をくれました」

これはアダムスキーが自分で描いたイエスの肖像画である。この家のどこかに飾ってあるらしい。

「その絵を見たいですか」

「ええ、もちろん！」

「じゃ見せてあげましょう。こちらへいらっしゃい」

私は飛び立つ思いでマリアのあとをついて行った。女の子たちもぞろぞろ一緒について来る。

イエスの姿を透視した！

ラセン階段を昇って二階のあるドアーを開くと、十帖位の部屋が見えて、その奥の壁に大きなイエスの肖像画がかけてある。等身大で描いてあるらしい（表紙写真参照）。近寄ってマチエールを調べてみると、油絵具の薄い盛り上がりが見える。顔の部分が殊も丁寧に仕上げてあり、両手のあたりは少々ラフな筆さばきだ。明らかに素人の作品だが、わざわざイエスの肖像を描き上げた理由はどういうことなのだろう。

「アダムスキーはこの肖像を単なる想像によって描いたのですか、それとも透視したのですか」

私はマリアに尋ねたが、clairvoyance（透視）という英単語の意味がわからぬらしい。何度も身振り手まねで説明すると、やっと彼女は理解した。

「アダムスキーにはイエスの姿が見えたのです。四角な窓の中に見えたので、そのとおりに描いたということです」

やはり透視したのだ。これがイエスの実際の顔だとすれば、唯一の貴重な資料だということになる。かなりヒゲを生やしているので老けて見えるが、澄んだ眼つきや顔を見つめると、三十歳前後の若い頃だと思われる。

私はここで許可を得て数枚の写真を撮った。一方の壁には、この肖像画のそばに立っているア氏の写真が額に入れて飾ってある。この部屋も応接間なのだが、普段は使用しないで、特殊な人しか入れ

●頭入りの写真

ないらしい。ア氏が来たときには主としてこの部屋へ案内したようだ。彼の波動をそのまま残しておこうというわけなのだろうか。

一同は階下へ降りて、再び元の応接間に腰をおろした。老人は眠たそうに眼をつむっている。

ブラザーが来た！

「ほかに何か聞きたい事がありますか」

とマリアが尋ねる。そこで質問した。

「あなたはスペース・ブラザーズかシスターズ（友好的な宇宙人のGAP的呼称）に会ったことがありますか」

「いいえ、ありません。でもある日、この家へ大勢の人が会合で来たとき、アダムスキーが『今夜はたぶんブラザーが一人来るだろう』と言うんです。

そこでみんなは互いに顔を見合わせてブラザーズがまじっていないかと探り始めました。そして濃いヒゲを生やした人がいたものですから、あれがきっとブラザーじゃないか、とささやき合っていたんです。

すると私の妹がかなり遅れて来て、母に向かい、『今まで見たことのないようなすごく美しい男の人がドアーの所に立っているけど、あの人はだれなの？』と尋ねるんです。そこで母は『知らないわよ』と答えていました。妹によると、青い眼がすごくきれいで、髪は黄金色だということでした。

私はそのとき記録を取っていたものですから、その男に注意を払いませんでした。すると突然、その男はドアーをあけて出て行きました。

翌日、母が私に話しかけたとき、私はアダムスキーに向かって、スペース・ブラザーというのはあのヒゲを生やした男の人ではありませんかと尋ねたら、彼は『ちがいます。スペース・ブラザーズはヒゲを生やしてはいません。ブラザーはドアーの所にいました。あの美しい人です。皮膚が透き通るように白く、背が高く大変きれいな人です』と言いました。私は見ませんでしたが主人は見ました。数名の人が『あの人をごらんなさい。ずいぶん変わった人ですよ』と、呼びかけたからです。

でも主人はあまり注意を払わなかったようです。私が見なかったのは本当に残念でした。だってアダムスキーによるとまるで〝芸術作品〟というほどに美しい人だというんですから――。スペース・ブラザーのなかでは最も美しい男性だということです」

ふーん、そういう事があったのか。そうすると今でもこのメキシコ市に平服姿のブラザーズやシスターズが何食わぬ顔をして歩いているかもしれない。ロサンジェルスでも東京でもそうだろう。一般人が気付かぬだけだ。

この頃になってから次第に様子がわかってきた。このマリアの家族はご主人も共にアダムスキーの熱烈な支持者だったのである。つまり一家族あげて毎年ア氏を歓迎していたのだ。珍しい例だが、これも過去世からのカルマによるものなのだろう。とにかく偶然ということはあり得ない。いっとき熱病にうなされたようにアダムスキー問題に心酔してやがて去る人も、いつまでもこの問題の探求を地道に続ける人も、すべて過去世からのカルミックな要素によるものなのだろう。

話題を変える。

「あなたはこちらでGAPグループを組織していますか」

「いいえ。多くの人がやって来ますが、アダムスキーの書物に一致しない教えや哲学を持っています。時間が無駄になるので、そんな人たちに会うわけにはゆきません。〝生命の科学〟を説明すると、『ああ、それは私の考えとは違う』とかなんとか言うんです。だからGAPグループはありません。〝生命の科学〟を解説すれば私にも勉強になるんですがね」

奇妙な接待

あれこれと話しているうちに、ある事実に気づいてきた。飲み物も食べ物も何も出ないのだ。当初は夕食でも出るのかと思っていたが、そうした気配は全然ない。土産物をかかえた遠来の珍客を迎えたというのに、これはどういうわけだろう。喉が乾いて仕様がないが、こちらから飲み物を要求するわけにもゆかない。

ジリジリしていると、私の想念をキャッチしたかのように右手の女の子が英語で尋ねた。

「何か飲み物を持って来ましょうか。水かコーラでも」

「水やコーラでは」とマリアが笑う。そんなものでは失礼だというのだろう。そこで、ビールがよいとスペイン語で答えると、女の子が奥へ入って、センを抜いたビールの小ビンとコップを持って来た。ついでくれるのを待っていたが、つごうとはせずにテーブル上に置いたままである。だれもつごうとはしない。おかしなことがあるものだと思いながら、仕方なしに自分でついで飲む。うまい。生き返ったような気持でいると、女の子たちがスペイン語であれこれと質問する。それを右手の女の子が英語で通訳する。ソニーのテープレコーダーやニコンカメラなどを見ても、さすがに上流階級のこの小さな淑女たちは珍しそうな顔をしないが、とてつもない高級品だと思っているらしい。ひとしきり個人的な話題が出て、雑談を続ける。マリアの孫娘が、あなたには奥さんがあるのか、年齢は何歳なのかと妙な質問をする。

私は思いきってマリアに尋ねてみた。

「あなたは何歳ですか」

「約七十歳です」

「ここはずいぶん大きな家ですね」

「ええ」

聞いてみると、ご主人のルェダ氏は不動産関係の大きな事業をやっているらしい。全く英語のできない氏は退屈したらしくソファーで眠り込んでいる。

「日本へいらっしゃいませんか」

「遠いですものね。むつかしいでしょうよ。でもいつかフランスとデンマークへ行くつもりです。デンマークではハンス・ペテルセンに会います。このまえアカプルコでUFO大会があって、ハンスや大勢の人々が来ました。その大会の模様を書いた機関誌を彼から受け取りましたか？」

「いいえ」

「私は息子と一緒にその大会へ行きました。ひどい大会でしたわ。組織化されていないからです。費用は大変なものでした。息子は出席者たちのためにかなりのお金を払いました。さもないとみんなは困ったことでしょう。みんなは大会センターに金を払わないんです。それで会場側は、三十分以内に金を払わねばみんなをここから追い出すと言っていました。講演者や新聞記者が世界中から来ましたが、ひどいものでした。お金を出そうとしないんです。でも息子が金を払って、いい大会になりました」

どうやら、よほどズサンな企画だったらしい。マリアの息子さんというのは、現在カリフォルニア州のサンディエゴで会社を経営しているという。デンマークのハンス・ペテルセンをマリアはしきりにほめる。ここへも来たことがあるという。

ここらで記念写真を撮ることにした。マリア夫妻に四人のお嬢さん方を入れて撮影する。そのうち女の子たちは一人ずつ私に握手をしながら丁寧に別れの言葉を告げて出て行った。

UFO記録映画を見る

そうこうするうちに一人の若い男が映写機とスクリーンをさげてホールに現れた。これから映画を見せるとマリアが言う。私はカメラを持ってホールへ移動した。8ミリの実写フィルムで、一本はアダムスキーが撮影して各国のコウワーカーへ送った円盤の記録映画、他の一本はアダムスキーがマリアの家へ来て家族の人々とくつろいでいる光景を撮ったもので、これは珍しい映画である。ありし日のアダムスキーの動作が克明に描写されており、温厚柔和な人柄が画面ににじみ出ている。他の一本はアダムスキーと側近の人々がメキシコ市内を散策する光景で、これにはアリス・ウェルズの若い姿が出現する。これらの映画の各場面を私はカメラに収めたつもりだが、帰国後現像したら全く何も写っていなかった。光量不足だったらしい。

映画が終わって再び元の応接室へ入ると、若い男も入って来た。紹介がないので、だれなのかわからない。しばらく話していると、どうやらマリアの孫息子らしいことに気づいてきた。二十歳位の背の高い美男子で、立派な鼻ヒゲをたくわえている。聞いてみると果たして孫息子で、ルイスという名の彼はいま大学で医療機械について学んでいるという。そして昨秋、観光で日本へ行き、東京、京都、奈良、大阪、熱海などを見物したと話す。日本をどう思うかと尋ねると、大変美しい国だと語る。単なるお世辞でもないらしい。木造建築物のないメキシコに住む人は、たしかに日本の木造家屋を奇妙な眼で見るだろう。それが彼らにとってエキゾチックであれば、一種の美観としてうつるのかもしれない。それは不潔さを超えた何か次元の違う異様な光景が奇妙に美しく見えたあのオアハカのインディオのメルカードと同じことだろう。

続いて古代マヤの事やら日本に関する事をひとしきり語り合う。ルイスはある程度英語が話せるし、発音にもスペイン語訛がないので、会話しやすい。私が出した名刺の日本文字をマリアが珍しがるので、ボールペンを取り出して氏名を書いてみせると、彼女はびっくりし、日本人はこんな複雑な文字を書くのかと感歎する。眠り込んでいたルェダ氏も起き上がってのぞき込んだが、名刺をさかさにしたり横にしたりして見ている。ルイスが興味をもったとみえて、紙を持ち出して、これに日本文字で自分の名前と何かを書けと言う。そこで、昨秋ジュネーブでルウ・チンシュタークにやってみせたように、「今日、私はマリア・クリスティーナ・デ・ルェダ夫人の家で、たいそう楽しいひとときを過ごしました」と書き、それを日本語で読み、英語に訳して年月日、氏名を記して、「ルイス・ルェダ君へ」としたためて渡したところ、三人が歓声をあげて珍しがる。日本文字は古代マヤの神聖文字よりも奇妙に見えるらしい。しかもきちんと書くよりも、なるべく崩して書くほうが効果的なようだ。異国人を喜ばせるにはこの手に限る

ので、読者も海外でこれを実演されることをすすめたい。

夜も更けてきた。もう十時半だ。そろそろ腰を上げねばならぬ。私はカメラバッグに道具類を詰め込んで別れを告げた。するとマリアは夫妻でホテルまで車で見送るというので恐縮して玄関口で待っていると、まもなく身仕度をととのえた夫妻が現れた。ルェダ氏が先頭に立って小道を歩いて行く。例によって制服を着たボーイがうやうやしく門を開くのが見える。

このときマリアが言った。

「今度はいつメキシコへ来ますか」

「そうですね、数年後に来るかもしれません」

「それは遅いわよ。もっと早くいらっしゃい」

「なぜですか？」

「日本は海中に沈むんですもの」

私はギョッとした。

「それはエドガー・ケイシーの予言ですか？」

彼女は微笑して答えない。ルェダ氏が門から出て車に乗り込む。私たちも続いて乗り込んだ。夜のメキシコ市内が展開し、人影もまばらになった大通りを疾走する。やがて車はホテルの石段前に着いた。車内でまずマリア、続いてルェダ氏と握手して別れを告げてから私は車を降りて、去り行く黒い影を見つめていた。

（完）

× × ×

付記

あわただしい二週間の旅であったが、今回のアメリカ・メキシコ旅行は大成功だった。参加者の大部分は日本GAP会員で、アダムスキー哲学や宇宙問題、古代の遺跡等に精通していたせいか、みなよく融和し、終始なごやかな雰囲気に満ちていた。私自身、団長という重責に耐え得る資格も力もないが、精一杯の努力をしたつもりである。私のカメラバッグには救急の際にそなえて一応医薬品や繃帯まで詰めてあったが、その必要はなかった。全くトラブルのない平穏かつ愉快な旅が続き、数多く乗った飛行機さえも殆ど揺れることもなかった。チチェンイッァの「生け贄」の池のフチに立っていた一老人が突然足をすべらせて倒れたとき、その上の土手で撮影していた私はハッとしたが、すぐそばにいた我々の一人の仲間が老人の体を押さえたので事なきを得た。この年齢になるまで他人が事故死したり大怪我をする光景をかつて目撃したことがないし、自分自身がそうした事故に遭遇しそうになると不思議にのがれるという特殊な運命を持つ私は、今回の旅行も支障皆無という自信はあったが、果たしてそのとおりだった。

来年もユニバース社主催の第二回宇宙考古学遺跡の旅を実施する予定なので、GAP会員諸兄姉の多数ご参加をお願いする次第である。コースは、エジプトの遺跡、ギリシャ・ローマの遺跡、エルサレムのイエス関係の遺跡、フランスのルールドとパリ見学という企画で、日時は大体に八月中旬から下旬にかけての二週間となるだろう。費用は今年と同様に五十万以内におさえるつもりで、もちろん二十四ヵ月払いの方法もある。

本誌六十号の「ルウ・チンシュターク女史会見記」の付記で述べたように、メキシコでも語学の問題を痛感しないわけにはゆかなかった。この国はスペイン語国で英語は殆ど通じない。「世界的にみて英語に次いではスペイン語が重要だ」とアドバイズしてくれたルウの言葉が身にしみたが、昨年のヨーロッパ旅行から帰国以来、身辺が超多忙となり、英・独・仏・西の四ヵ国語をマスターしようという壮大な計画は頓挫した。私にとって最大の財産は〝時間〟なのだが、目下これを入手することは金銭上の収益をあげることよりもむつかしい。おまけに記憶喪失症に近いほど忘れっぽいとくる。むかしスペイン人宣教師と親交があった頃、スペイン語を自習して簡単な日常会話はできたのに、メキシコの地を踏んでからはさっぱりそれが出てこない。だが忘却は無知と同意であるから、忘れたというのは弁解にはならない。そして情ないわが身をいつまでも愚痴の対象にしてもはじまらぬので、今度こそはやろうと決意を新たにした。数えきれぬほど何度目かの「今度こそは」だが、完全にあきらめて意欲や決意を失ってしまうよりはましだろう。

だがメキシコでスペイン語を全くしゃべらなかったわけではない。わずかながらも口から出したことは大きなプラスになった。こちらが少々間違えてもメキシコ人は笑わない。それどころか、誤りを訂正してくれる人もある。彼らは日本人に対してきわめて親切で友好的である。この素晴らしい環境は私を非常に勇気づけた。それだけでも今回の旅行は大きな意義を持つものであった。

しかし何よりもまず英語を母国語にする必要がある。これについては頭が痛くなるほど方法を考えてきたが、最近あるアイデアが浮かんできたので、いずれその内容をまとめてみたいと考えている。「外地で暮らさなければ外国語はモノにならないよ」と、ある人が私の諸外国語学習計画を言下に否定した。確かにそのとおりだろう。だが、外地に住んで外国語が達者になるのは当然のことで、達者にならない方がどうかしている。むしろ内地の日本語の大海の中で生活しながら外国語をマスターすることがはるかに価値をもち、偉業でさえある、と私は思う。それは方法によるのであって、頭の問題ではない。だいいち言語の習得は頭の良し悪しに関係はなく、全く習慣によるものである。メキシコ奥地の貧しいインディオの子供たちが立派なスペイン語をしゃべっているのだ。これは日常の習慣で形成されるものだが、日本に住む我々もこの習慣づけが不可能ではない。〝ある方法〟を応用すればよいのである。詳細はいずれ何かの機会に発表することにしよう。

だが最重要なのは、如何なる環境にあってもやはり宇宙哲学の思想を失わず、センスマインドが外界に振り回されぬように自己を抑制することにあることを、

●「太陽のピラミッド」とケツァルコアトル

旅行中に種々の体験から痛感した。騒がず、出しゃばらず、饒舌に走らず、静かにジッと観察する、という態度を異国で保持するのはむつかしい。といってあまりに控え目にしていると腹に一物ある奴だと誤解される。

人間同士の交際はむつかしい。しかし宇宙的見地からすれば、それは二次的な問題ではなかろうか。我々は他人から嫌われることを恐れているわけにはゆかないし、また嫌われないことのみを目標にして生きているのでもない。生命の目的は非宇宙的想念の持主の好き嫌いに迎合することではなく、まず自分自身の内部に潜在する偉大な力を引き出すための自己訓練にあるのだろう。

というわけで、旅行中は就寝前に瞑想をおこない、マインドを静めるように訓練したが、やはり落ち着かなかった。透視の練習もたびたびやったが、だめだった。奇妙な模様が見えるだけで、目標物が浮かんでこない。かなりな能力を開発できるまでは、こうした練習は慣れ親しんだ一定の場所でおこなうのがよいのかもしれない。

しかし海外旅行は求道の旅ではない。見聞を広め、知識を増大させることが主目標である。今後は毎年海外旅行を主催して、みなさんと共に大いに楽しみたいと思う。ブラザーズも大母船で宇宙空間を旅しているのだ。

宇宙的想念を根本として、次に身につけねばならぬのはマナーであろう。先般朝日新聞の投稿欄に、シャモニーからモンブランへの登山ゴンドラの中の壁に、日本人の落書がいっぱい眼について、はなはだ不愉快だったという意味の投書が出ていたが、筆者もその落書を見た。

ヨーロッパの各都市には日本人が大挙して押しかけているが、不作法さにおいては世界のトップクラスであるの感をいなめない。ルーブル美術館のミロのビーナスのそばには、われ勝ちに日本人がへばりついて記念撮影をやっている。白人たちの当惑と軽蔑のまなざしをいやというほど目撃するには、あそこほど格好な場所はない。

要するに、すべては教育の結果であろう。ドイツの家庭は躾が実にきびしいがそれに比べると日本は親も子もまるで幼児だとは、ドイツに留学された某氏の言である。マナーを抜きにして宇宙の法則もへチマもないので、この点でも大いに反省したい。

（五頁より）

ら追われます。そして分割のなかった所に分割を作り出したために、苦労してパンを得ることになります。二人は勝手に自分たちを分割させたのです。

（訳注＝このあとルシファーと呼ばれる天使がおごりたかぶって創造主を非難したために追放される例をあげて、人間の好き嫌いにより創造主の創造物を審くならば、結局自分が審かれることになると説き、心を広げて物事を分析し、特に自分自身を分析することによって更に良き理解を得るのだと結んでいる）（完）

久保田八郎訳

会員の声

前生の妻とのめぐり逢いとテレパシーの奇跡

大阪府泉南市　福本賢一

私が、信じられないような方にめぐり逢ったのは、地球人がアポロ8号に乗って初めて月を周回した一九六八年クリスマスイブの午後五時三十五分です。場所は大阪梅田の阪急百貨店横で、その方は施設の子供達のために募金活動をしておられたのです。

当時私は学生で、大阪府の南にある実家から吹田の下宿に行く途中で大阪駅で下車し、阪急電車の改札口に向かっていました。

百貨店にさしかかる交差点を通る時に、ちらっとネオンサインと月を見て、今頃世紀の出来事であるアポロが月を周回している頃だな、と思ったものでした。

交差点を渡り終わり、百貨店横の道路を少しうつむきかげんにほんの少し歩いた時のことです。突然だれかが前方五mぐらいの所から、いきおいよく人混みの中をかけて来るなと思うと同時に、目の前が花束で何も見えなくなってしまったのです。

「お花買っていただけませんか」

すきとおるようなきれいな声が耳に入りました。

「お花は、いらないのです」

そう言って、その女性の顔も見ず通りすぎようとしました。彼女は私の前に立ちはだかりました。

目にはいるものは明るいピンク色のオーバーにひきたった白と黄色のたくさんの菊の花束だけでした。あまりの美しさのためでしょうか、その時、一瞬、時間が止まったと感じたのです。

二十歳前の女性でしょうか。その方の顔も見ず、しばらく花束をあぜんとして見続けていた時です。

その人が信じられないほど好きだ！という感情で胸がいっぱいになりました。一人の女性をこんなにも一目惚れで言いあらわせないほど一好きになれるなんて考えてもみなかった……そう感じたのです。

その方も無言で私を見つめているようでした。そう感じながら、彼女のあまりにも高貴なフィーリングのため、私にはこの人を幸せにする自信がない、そんな考えから立ち去ろうとしました。しかし彼女は「施設の子供達のために……」と言って、私の前に立ちふさがりました。

その時です。内なる声といわれるものがハッキリ聞こえたのです。

「あなたの結婚の相手が目の前にいます！」「この人と生活すると、とても楽しいですよ！」

だれかからささやかれているようにハッキリ聞こえるのです。神の声ともいえるようなものでした。

数秒間、考えました。しかしなぜか自信がなかった。振り切るようにして彼女から立ち去ろうとした時、彼女の左目だけが私の目と合いました。

なんというやさしい目をした方だろう。数秒間、やはり無言で見つめ合いました。人混みも騒音も耳に全くはいりません。しかし私は彼女を振り切ってしまいました。

しばらくして「ああ……お金だけでもいいのに……」。切ない声が背後に響きました。

「止まれ！」。内なる声が叫ぶのです。止まりかけようとしましたが、その内なる声一神の声一をも無視したのです。

それが私の苦悩の青春の始まりでした。

その方にめぐり逢った時には、私が本格的に円盤の研究をして二年半ほどたっていましたので、下宿に帰り、その彼女が、前生の私の妻であることが、疑いをはさむ余地のない事実であることを悟ったのです。

前生なくして、初めて会った人が信じられないという言葉どおりに好きになれるものでしょうか。

それから彼女を探し始めたのです。言葉では言いあらわせません。探しました。教会、学校、ボランティアグループ等々、大阪はもちろんはては神戸、京都までそれらしき人を人づてを頼りに探しました。でも見つけることはできませんでした。

× × ×

二年と二カ月あまり探し続けて、時は流れました。

神のはからいでしょうか。テレパシーの奇跡としか言いようのない事が起きたのです。

その事実を記す前に、私の円盤研究の略歴を少し述べてみたいと思います。

私が初めて円盤を目撃したのは、小学校四年生の夏の夕方六時頃、自宅前にいた時です。

西から東に一直線に、満月の三～五倍以上もある夕日のように赤い光体が、私の家の真上を、時速約一千km、高度1km以下と思われる所を無音で飛んだのです。その頃は今のように円盤の事を書いた本がなかったものですから、子供心に「世の中には不思議な事もあるなあ」と思ったのを覚えています。そばには両親と近くの方数名もおりましたので、同時に目撃しています。

なお、目撃して数日後、学校で級友が「アメリカで円盤に乗せてもらった人があるそうだ」と話しているのを耳にしました。

二度目の目撃は、十九歳の夏の夕方、これも六時頃です。犬を散歩につれて行った帰りの、家まで五十mぐらいまで来た時のことです。

今度は一度目の目撃とは正反対のコースで、東から西に一直線に飛行しました。大きさは満月の約二～五倍で、色は今までに見たこともない。それは美しい螢光性の青緑色でした。もちろん無音です。その時は円盤の実在やフォースフィールドのため光体に見えることなどを知っていましたので、家に帰って早速母に「円盤を見たよ！」と話し、速度と高度を近くの山の高さから計算してみると時速約三千六百km（秒速約一km）、高度約二kmと出ました。

同時目撃者は、私以外にも多数あったらしく、母が店に買い物に行った時、不思議そうに目撃の様子をみんなで話し合っていたとのことで、母は「あれは例の円盤だということですよ」と、みんなに言ったそうです。

なお二度目の目撃の少し前に、近くの家の主人が、一週間にわたってほとんど毎日、同じコースを東から西に夕方六時頃、月より大きい光体が飛ぶのを見て、不思議がって父に話しているのをそばで聞きました。

その頃、母も自宅の屋根の上約二mぐらいの所を、二十五cmぐらいのオレンジ色に輝く極小型円盤が、東から西にこれも夕方六時頃、ゆっくり飛行するのを二日続けて目撃しています。となりの奥さんもそのうちの一回を目撃していて、母に不思議がって話したとのことです。父も別な時に自宅で満月大の円盤を目撃しています。

私は小さい頃、感受性が少し強かったせいか、テレパシーも少々体験していましたが、私のテレパシーが急速に高まったのは、円盤の研究が進み、先輩の教えを聞き、そしてなによりもアダムスキー氏著の「生命の科学」「テレパシー」等を研究した後のことです。体験はかぞえきれないほどありますが、少しお話ししましょう。

テレパシーは距離に関係のないことは私自身たくさん身をもって体験していますが、最初の頃は「小さな声」となって、ときどきわかる相手の想念がとても感動的でした。

そのうちに、場所・時間その他環境にかかわらず、自分に向けられた想念なら受けようと、意識しなくてもわかるようになりました。

たとえばフィーリングによるテレパシーですが、ある夜九時頃、家に帰るべく電車に乗り、都会育ちのような二十五歳ぐらいの女性のとなりに乗り合わせました。

三十秒もたった頃でしょうか、「あっ、この人は九州から出て来た方だな！」と直感的にわかったので

す。それで思いきって
「九州から来られたのではありませんか」と尋ねてみますと、その人はびっくりした様子で、
「どうしてそんなことがわかるのですか？」と聞いていました。
それもそのはず、九州から二日前に大阪へ出て来たとのことで、その時は、手に小さなハンドバッグ一つしか持っていなかったからです。
また、電車に乗っている時のことですが、自分の前にいる人の降りる駅がわかるのです。いくつか駅が過ぎ、思っていた駅に電車が着きました。その方は降りようとしないので私の間違いかなと思っていると、やはり急いで降りて行くのです。
その後、ある会社に就職しましたが、その頃はテレパシーは特技の一つみたいなもので、次から次へと人の考えていることがわかるのです。
そしてその会社に入社して一週間ほど後に、同僚が会社の真上を西から東に飛行する、玉子大の円盤を目撃したと私に話しました。しかし私自身、円盤やテレパシーのことは一年ほど全然口に出しませんでした。
入社して約二年のあいだに、大は大きな洗面器ぐらいの物まで、会社の方や近くの店の人が円盤を五度ほど目撃しています。
人社して一年ほどたった頃から少しずつテレパシーや円盤のことを口に出すようになり、しまいには会社の人々から〝テレパシー〟というあだ名をいただくほどになりました。相手が目の前にいる時はもちろんのこと、遠くにいる時でも、自分に向けられた想念なら、意識していなくともキャッチできるようになっていたからです。
たとえば高速道路を時速百㎞で走って運転に専念していても、そばに乗っている人が何を考えたか「小さな声」でスッとわかるのです。その頃、下宿生活をしていましたので実家から約五十㎞以上離れていましたが、ある夜十時頃でしょうか、母が私のことを思って、ある事を考えたようでした。すぐに家に電話しようかとも考えたのですが、二週間ほどして家に帰った時、こんな事を考えなかったかと母に尋ねてみますと、「そのとおりに考えた」という返事でした。
私のテレパシーは、相手がこんなふうに思っているのだろうな、という情感的なものではなく、相手の想念が話している時と同じようにハッキリ「小さな声」になって頭に聞こえてくるのです。
またこんな事実もあります。たぶん信じてもらえると思いますが、同じ会社の人の頭脳から、以前その会社に勤めていた人の名前を二人も言いあてたのです。名前がわかった時は、会社の方が目の前にいる時ではなく、少し離れた下宿で、その人の潜在意識から読み取ったのです。自信があったので、翌日会社の方に「こんな名前の方が以前に勤めていませんでしたか」と尋ねた結果、二回とも合っていたのです。
その当時、私のテレパシー能力は極度に強まっていたらしく、会社に初めて入ってきた人の名前を聞く前に、名前がわかってしまったということもありました。
もちろんテレパシーは二十㎞離れていようと五十㎞離れていようと、自分に向けられた想念なら、意識していなくとも「小さな声」としてわかるのです。
私にとって、テレパシーの発達は意識と心が一体だという観念を持つことが重要なポイントになったようです。
世の中には超能力者といわれる方々や、さまざまな体験を持つ方がおられますが、私のささいな体験も何かのお役に立てば幸いです。
さて問題の〝テレパシーの奇跡〟ですが、この話は私事になりますが「五十年に一度あるかないかの恋ですよ！」と、だれかからささやかれているような気持に時々なりますので、あえて書かせていただきます。
一九七一年二月十四日、午後六時半頃の出来事です。両親が用事に行くといって少し前に車で出かけたので、家には私一人でした。なお、この日がバレンタインデーであることは、テレパシー現象のあとで気がつきました。
テレビの前のホームコタツに入って、本を読んでいました。少し疲れたので、そのままあお向けに寝ころがっていました。思うともなく、クリスマスイブにめぐり逢った彼女のことを思い始めていました。しばらくするうちに、不思議だなと思ったのです。普通なら背中に体重の重みを感じるものですが、急に重みがだんだん少なくなってくるのです。
「不思議だ！　背に体重の重みを全然感じない」と思った瞬間です。
クリスマスイブの彼女だとハッキリわかる想念が、私の心と魂の底まで入り込んだのです！　心と心、魂と魂が完全に一体となったと言ってよいでしょう。
すごいいきおいで私の体が、右を下にして強力な磁石に吸いつけられるように横向きになったのです（二人の位置関係からそうなったのでしょう）。
そうすると私の喉から、「好きだ！」「好きだ！」という言葉が大声でひとりでにとめどもなく出るのです。めぐり逢った時にもまして、恐ろしいほど好きなのです。心と心が一つになっている状態ですから、彼女が何を考えているのか、すみずみまで手に取るようにわかります。なぜ私がクリスマスイブの日に立ち去ったかを彼女は知りたかったのです。
彼女にある考えが浮かびました。私は「そういう理由ではないのだ」と、強く心の中で何度も叫びましたが、まだ彼女の胸の中に少し疑惑があるのが手に取るようにわかってきます。
直感的に私は神以外に訴える相手がないと感じました。胸の上で手と手を力いっぱい引っ張って、
「神！」と大声で叫んでいました。あのような情熱で魂の底から叫んだことは生まれて以来ありませんでした。
彼女は理解してくれました！　歓喜の火花が飛び散ったのです。最初強力な磁石で引きつけられた以上の情熱が、彼女から私にふりそそいできました。
今にして思えば、魂（意識）が完全にテレポートしていたのでしょうか。単なるテレパシーどころではありません。姿こそ見えないけれども彼女の体重の重みが私の胸の中に感じられ、その情熱のため私の頭が激しく左右に揺れ動かされたのです。魂（意識）と魂（意識）、心と心の一体なるテレポテーションなのでしょう。
以上は他人が何と言おうと、私がこの身でたしかに体験した事実なのです。テレパシーを超えた奇跡としか、今の私には言いようがありません。
読者のみなさんにしてみれば、私が初めて円盤を見た時の気持、「世の中には不思議な事もあるものだなあ」という感じだと思います。
以上、いずれも私自身に起こった出来事を正直に書きました。
そのテレパシーがあった後、またあきらめきれず、逢った場所に大きな尋ね人の看板を立てました。
読売新聞社から電話があって、記事にしたいから話を聞かせてくれませんかと言ってきました。顔写真も撮られました。
その後しばらくして道路交通法とかで（通行の邪魔にはならないのですが）、看板は取りはずされてしまいました。
数年間も（今でもそうですが）、一日として彼女のことが頭に浮かばない日のない私でした。
そんなある夜、眠ろうと思って床についた直後の出来事です。みなさんも多数の方が読まれたと思いますが、アダムスキー氏の「宇宙哲学」の中に、次の個所があります。
「ファーコンは私に話しかけた。『私たちはあなたがキリストと呼んでいる〝人〟にあなたを会わせようと計画していたのですが――私たちはその方を〝賢者〟と呼んでいます

――その計画は実現不可能となりましたので、人々に伝えるようにと次のような寓話をその方からことづかってきました」

突然、「私はイエス・キリストである！」「私はイエス・キリストである！」という声で心の中がいっぱいになったのです。救世主たるイエス・キリストともあろう方なら、さぞかし高貴な想念を持つ方にちがいないであろうと、常日頃考えていましたが、今、現実に受けている想念は、考えも及ばなかった想念で、宇宙にはこんなにも悟りの想念を放つ方もあるのか！という考えで心が圧倒されました。

この事実も、しばらくのあいだの出来事ですが、私にとって忘れ得ぬ体験の一つです。「イエス様は活躍されている！」そんな気持です。

また私は「生命の科学」等を一心に勉強したおかげで、自分の前生での出来事を思い出すことにも成功しています。これらの事は自分個人の事で、他の方々には証明できないものですが、ハッキリと心に刻まれた前世の体験なのです。たとえば、前世で年老いた時、新しい肉体を欲しいと思ったことや、臨終の時、妻を見つめながら「とても楽しかったよ！」と言い残した事など、ハッキリと思い出しているのです。

クリスマスイブにめぐり逢った彼女のおかげで、〝人間は宇宙の法則にそって生きるなら、決して死なない〟という生きた証拠を得ることができました。めぐり逢わせていただいた、ということだけでも神に感謝しなければ、という心になれるよう努力したいと考えています。

想念に応答して
樹木が揺れる

山形県上山市　漆山晃治

梅雨の候、六月に入り、村々の畑では桜桃の収穫が始まりましたが、久保田先生には益々御清栄の事とお喜び申し上げます。

五月一日に行われました新潟支部総会の節は、大変有意義なお話をありがとうございました。またニューズレターも頂きまして厚く御礼を申し上げます。毎号手にする都度に新鮮な内容に新たな感動を覚えます。

さて私の事を少し書きたいと思います。先日ニューズレターを頂きましたので早速読んでみますと「宇宙冥想」のことが載っていましたので一読してみました。そして目の前にある自動車に向かって「いま見ている車は自分の姿である」と強く念じてフィーリングを起こしますと、パッと一瞬明るく開けたような、車と自分の肉体が重なるような感じになりまして、これが一体感というものかと思い、大変嬉しくなりました。でも、こういう現象はまれにしか起こりません。

少し古い話ですが、昭和四十八年六月二十二日の夜、自宅前にある柿の木に向かってフィーリングによる一体感の練習を行いましたところ、私の呼びかけに応じて風もないのに七メートルもあるその柿の木だけがブルブルと音を立てて全身を震わせたのでした。

驚いた私はただちに家の人に話しましたが、そんな事が起こるはずはないと相手にされなかったのを覚えています。

その後私は想念観察が最重要だと感じましたので、その練習をやめてしまいました。（当時の私には、いろんな事を行う能力はなかったような気がします）

さて、先月に行われた新潟支部総会へ出席した帰路、米沢市から来た清水君と車で一緒に帰宅しまして、その後、清水君、本山君と私の三名で月に一回の割で自宅で会合を持つ約束をした次第です。内容は先生の講演テープを聞く事やESPカードを使った訓練等です。

六月四日にはニューズレターに載った山口緑君と連絡をとりまして自宅で四名会合を持った次第です。先生の御親切に感謝致します。夜七時三十分より十二時までの間、楽しい雰囲気に包まれてお互いの交流を深めることができました。次回（七月二日）には本山君宅にて山口緑君所有のアダムスキー氏の最後の講演テープを聞くことを約束して解散しました。

山口君と初めてお会いしまして、山形大学でPRSなる研究グループを組織して活動している有意義な話に私達は感動致しました。

六月五日（日）午前九時に上山駅にて仙台市に住むGAP会員・赤間昭夫さんと再会しました。会場は本山君宅にてアダムスキー哲学、幼児教育、新潟へ出席した話などを行いました。赤間さんの明るい表情と親しみのある会話にお互い打ちとけ合って大いに話し合いました。

赤間さんは久保田先生から御教示頂いた幼児のしつけ方が大変参考になって、毎日笑顔ですくすくと成長しているとのことでした。私の所も来年の一月に赤ちゃんが誕生する予定なので、さあこれからが本番と気持を引き締めているところです。妻はUFOや超能力等、未知のものに興味を示しますが、哲学には縁遠いので、少しずつ話をしております。

また、私は昭和四十九年十一月より想念観察を始めまして現在に至っております。今の手帖が十六冊目です。始めた頃は想念傾向もわからなかったのですが、今日では少しずつわかりかけてきました。毎日、自分との闘いを続けております。内省することによって、混乱に満ちた自己の想念を理解できたときは、それは嬉しいものです。

毎日、先生の言葉、「答はただ一つ、マインドを宇宙の意識と一体化させること。これしかない」を強く自分に言い聞かせながら観察を続けております。

私は今後とも続けてゆくつもりです。宇宙の意識との一体化を目指して！

この方法を伝えてくれたアダムスキー氏、久保田先生に厚く御礼を申し上げます。

未来の大戦争を透視

北海道旭川市　石川公一

初夏のやさしい花の香りがただよう今日、ますますご清栄のことと存じ上げます。

一週間くらい前にニューズレターが届き、早速拝見させて頂きました。今回は宮内温夫氏の活躍ぶりと久保田先生の宇宙冥想という記事の内容にとても強く共鳴しました。私もたえず宇宙的意識をもって多くの人々と接してゆけるように頑張りたいと思います。

そこで質問があります。先生が書かれた記事の中で、P26の「自分に自分が悩まされる」という所の24～26行目にかけて「そして十五、六回の生まれ変わりの満期に達したら、本人のすべてが消滅するということになります」とありますが、これは第二の死（完全な消滅）を意味するのでしょうか？　できればもっと詳しく教えて頂きたいと存じます（とても疑問に思う個所なのです）。

私も日本GAPに入会させて頂いてから約一年近くになります。現代の社会においてはさまざまなイデオロギーが入り混じって大変複雑化しとても淋しい思いをすることがたびたびあります。そんな時、GAPの仲間を思い出します。「自分は決して独りではない。宇宙的意識を求める兄弟が世界中にいるのだ！」と。

今年の三月に日本GAPに入会した永倉良一君は中学・高校で同じ学校の同級生で、その後も札幌で同じアパートで暮らし、それぞれの学校に通学していました。彼と私は親友というよりは血のつながった本当の兄弟みたいなものです。私が今日こうしてUFO問題や宇宙哲学に熱中することができたのは、彼が私に予備知識を与えてくれたからです。

私は大学一年の時にカトリック教会の洗礼を受け、信者となり、日曜日の礼拝には必ず出席していました。一方、永倉君はAという新興宗教の信者としていろいろな勉強をしていました。

私は小学校の頃からキリスト教に関心があり、土曜学校などに同級生と一緒に顔を出していました。その

後、一時教会を離れていたのですが高校時代に再び教会へ行くようになり、そのうち、私も彼の宗教団体に入る結果になってしまいました。そしてそこで学んだことはカルマ的想念（そこの宗教団体では因縁とか悪霊とか呼んでいる）が引き起こすところの問題（病気とか事故）をはっきり認識することができました。そこの宗教団体ではテレパシーのことを霊感と呼んでいて、悩む人々を救済するため、指導者のほとんどが霊感者としてその任務を遂行しています。

私はその宗教団体に二年間、彼は四年間、世話になったのですが、今から四年前、先生が翻訳されたG・アダムスキーの著書と、遊星クラリオンと女性機長であるアウラ・レインズさんを紹介したT・ペサラムの著書に感動し、ついには北海道の十勝でクラリオン型のUFOと思われる物体を目撃して以来、大きく人生観が変わったのです。私はそのときが最初の目撃になるのですが、その五カ月前にテレパシーではるか宇宙の彼方から光る物体が飛んで来るのが見えました。そのときはとても不安な少し恐ろしいような気さえしたのですが、彼はそれをUFOだと言うのでした。本当は彼はアパートの窓からクラリオンのUFOを呼んでいたことがあったのです。その時、小さな星が動いているのが見えましたが、私はそれがUFOであることを信じませんでした（半分は信じていました）。

そして十勝での目撃以来、完全に私はUFOを確信し、そればかりか友好的な気持に急にかりたてられました。その気持が今日まで一度も疑うことなく愛をもってスペース・ブラザーズと交わりたいと切望しています。

昨年の十二月に自宅の上空を超スピードでUFOが飛んで行くのが見えました（永倉君に話したところ、たぶんGAPに関係するUFOではないか……と言っていました）。

今の私は迷信や恐ろしい思想や宗教的儀式というものから完全に遠ざかることができたばかりか、むしろ真のキリスト教や聖書の意図する重要な内容を正しく理解することができました。もし先生がG・アダムスキーの著書を翻訳して下さらなかったり、「UFOと宇宙」誌を出版して下さらなかったら、彼も私も真実を知る時間が数倍も数十倍もかかったろうと思う次第です。本当にありがとうございます。私の友人でGAPに入会していなくても先生を支持している人が数人います。永倉君が今年の三月までそうであったように……。（後略）

追伸　私はある日永倉君と未来の出来事とノストラダムスの予言についていろいろ話していました。そして一九九九年の七月に人類が滅亡すると予言されているが、その五年前の世界はどんな状態なのだろうかと思っていると、スクリーン（映像）となって〝戦争の場面〟がまざまざと見えてきたのです。私と彼は札幌の街のことを考えていたので、たぶんそれは札幌だと思います。人々が路上に倒れていて口から血を出し、そこを戦車が通り過ぎて行くのです。とても恐ろしい気がしました。しかしあくまでも映像ですから、正しいかどうかは全くわかりません。

お答え（編者）

十五、六回の生まれ変わり云々については、アダムスキーがある論文で述べたもので、本誌の古い号に載せました。次のとおりです。

従来、人間の霊魂は永遠に生きると考えられていましたが、ア氏によるとそうではなく、人間は創造されてから生まれ変わりを何度か体験しますが、宇宙の法則に気づいて宇宙的な生き方をしない限り、十五、六回の生まれ変わりを最後として、本人の真の実体は宇宙に還元してしまい、本人の個体性は完全に消滅するというものです。

逆に、本人が宇宙の創造主の意識（パワー、英知）に気づいてマインドをそれに同調させ、〝宇宙人（コスマック・マン）〟として生きるならば、十五、六回で満期になることはなく、更に生まれ変わりを続けて、次第に高次なレベルに昇華するというわけです。

この宇宙には「役に立たない無用の長物は淘汰される」という法則があって、これは人間にもあてはまることです。創造主はくだらぬ人間を永遠に生まれ変わらせることをしないでしょう。創造には無駄がないと思われます。宇宙の創造プロジェクトはすべて完璧である筈で、不完全さはあり得ないのですから、そのプロジェクトを無視して脱線するものは、自動的にコンベヤーから脱落し、消滅するのが当然と考えられます。

現在の地球には、十五、六回の満期に達した人が充満しているような気がします。そのような人はマインドは気づかなくても、内部の意識は知っていて、「今生で宇宙空間からおさらばするのですよ」とマインドにささやきかけます。それを感じたマインドは何となく絶望的になりますし、絶望的にならなくても人間の生涯は一回きりだとばかり思って、少々デタラメをやっても面白くオカシク人生をすごさなければ損だとばかりに常軌を逸した言動に走ることになります。

したがって、まず第一に輪廻転生（生まれかわり）の事実を知ることが最重要なのですが、なかなか人はこの面を探求しようとしませんし、信じようともしません。しかしもっと科学が進歩すれば万人に納得のゆくように実証が可能になるでしょうは息がつまりそうにも思えます。

しかしながら、この事を実行するのはとても困難な事と、GAPメンバー三年目にして痛感する次第です。

激励（編者）

たしかにこの世界の経済システムではカネがなければ生きられない仕組みになっていますから、生きるためには反宇宙的な権力や組織に従服しなければなりませんが、それも一つのレッスンです。横暴な権力者といえども反宇宙的なのは当人のマインドだけであって、肉体を生かすパワーは宇宙的源泉から来ていますから、そのパワーが当人の心臓を動かし、生かしていることを認めるならば、絶望的要素は消滅します。

テレビは悪魔の道具？

北海道旭川市　星野佳正

私の仕事はある大メーカーのテレビ等の修理者ですが、月に百軒位の家庭を訪問して修理をしていると、ほとんどの家庭が俗悪番組のテレビ中毒にかかっており、受像機が故障すると虚脱感を訴えているのを見ますと、私は悪魔の道具を修理しているような気がします。

一流メーカーにしても欠陥商品が多く、ユーザーをごまかして修理代を取って来いと強要したりするようです。欠陥商品の発生の最大原因は過当競争のため、企画から販売ラインに乗せるまでの期間が短いためです。

会社内にしても、反宇宙的な人間ほど権力を握っているようですし、この地球上で生きてゆくためには忍耐、寛容、プライドの死滅なくして

「生命の科学」録音テープを頒布

GAP東京月例会における久保田代表の「生命の科学」講義一時間分の録音テープを頒布します。希望者は頒価一〇〇〇円送料五〇円を添えて左記へお申し込み下さい。（本年十月分以降）

〒二七四　千葉県船橋市前原西8―5―18浜村逸郎

「生命の科学」筆記録を頒布

GAP東京月例会における久保田代表の「生命の科学」講義一時間分の録音テープを完全に筆記した筆記録（手書きコピー）を頒布します。希望者は頒価五〇〇円　送料一四〇円を添えて左記へお申し込み下さい。（本年七月・八月分あり）

〒九八九―一七宮城県柴田郡柴田町本船迫内沼田96の2　安藤進雄

UFOと宇宙 10月号

月刊　1977/通巻第27号　目次

¥430　〒50

口絵
ブラジルのUFO……1
米アリゾナ州メサの怪物体……2
日野市の怪光体……4
豪華賞品が当たるテレパシー・コンテスト……8

■宜野湾市におけるUFO目撃と砂糖キビ畑事件
沖縄にUFO着陸？　永井淳裕……10
■ワシントン市上空にUFO群襲来
ワシントンのUFOパニック！　パトリック・A・ハイグ……14
■地球軌道を回る未確認物体出現の謎
宇宙から来た人工衛星　ハリー・ヘルムス・ジュニア……20
■南米で発生する怪UFO事件と、謎のテレパシー・コンタクト　グレイ・バーカー
宇宙人からテレパシー・メッセージを受ける科学者たち(1)……26
■フットボールゲーム観戦者ら数千人が目撃
米アリゾナ州メサの怪物体　ウェンデル・スチーブンス……34
■地球外生物からのメッセージ
聖書と宇宙人(3)　クロード・ボリロン……36
■南米ペルーで念力殺人事件発生！
怪死した青年実業家　中岡俊哉……44
■はるか冥王星のかなたに未知の第10番惑星をもとめて
謎の第10番惑星　斎藤守弘……50
■南関東地方の黄金伝説の謎を探る
日本列島宝探し　桑田忠親……58
■〈クボタ・ミステリー・シリーズ1〉ベルナデットの遺体の奇跡とカレル博士の驚異の体験
奇跡！ ルールドの聖泉(完)　久保田八郎……64
■この眼で見た現代の怪奇(2)　矢追純一
巨大トンネル網を造った謎の生命……74
■連載科学記事
(続)宇宙・引力・空飛ぶ円盤(9)　レナード・クランプ……101

ミステリー豆知識……82
エニグマ情報……85
UFO目撃レポート……92
科学ニュース……96
声・OPINIONS……112
蚤の市……117

【表紙写真】1967年、米フロリダ州でジョン・メリル氏が撮影。

〒110 東京都台東区上野5-1-6 ヤマトビル
株式会社ユニバース出版社
電話(832)1341(代表)
振替・東京1－119478

UFOと宇宙 11月号

月刊　1977/通巻第28号　目次

¥430　〒50

口絵
イングランドのアダムスキー型UFO……1
愛媛県川之江市の宇宙人!?……2
塩田氏、UFOも連続撮影！……6
神蛇ケツァルコアトル（羽毛あるヘビ）の謎……10
古代の宇宙飛行士か――それとも?……11
豪華賞品が当たる「UFOと宇宙」クイズ……12

■〈本誌特別取材〉愛媛県の謎の"人間"と円盤出現は人類への警告か？
驚異の宇宙人撮影事件！……14

■活躍する世界初の科学的UFO監視システム アルゴス
UFOを観測する「百眼の巨人」 レイ・スタンフォード……26

■UFOに対する世界の眼はこの30年にどう変わったか？
UFOギャラップ世論調査 森脇十九男……32

■南米で発生する怪UFO事件と、謎のテレパシー・コンタクト グレイ・バーカー
宇宙人からテレパシー・メッセージを受ける科学者たち（完）……40

■地球外生物からのメッセージ
聖書と宇宙人（4） クロード・ボリロン……48

■マシュー・マニングはスパイか!?
スパイに使われる超能力者 中岡俊哉……56

■〈クボタ・ミステリー・シリーズ2〉古代マヤの遺跡とムー大陸との関係を現地行で探る
灼熱の密林より永遠に（1） 久保田八郎……62

■この眼で見た現代の怪奇（3）
海溝に消えた太古の首長竜 矢追純一……74

■連載科学記事
（続）宇宙・引力・空飛ぶ円盤（10） レナード・クランプ…103

ミステリー豆知識……82
エニグマ情報……85
UFO目撃レポート……94
科学ニュース……98
声・OPINIONS……115
蚤の市……120

【表紙写真】昭和50年3月5日、愛媛県川之江市の塩田義一さんが市内のピラミッド山頂上で撮影

〒110 東京都台東区上野5-1-6 ヤマトビル　株式会社ユニバース出版社　電話(832)1341(代表)　振替・東京1-119478

●書店にない場合はユニバース出版社営業部へ直接ご注文ください。（ご注文はすべて前金でお願いします）

予告

昭和52年度

日本GAP総会

企画発表！

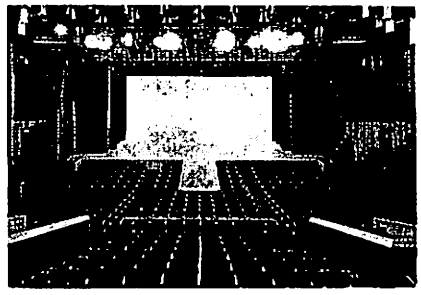
フレッド・ステックリング氏夫妻 来日！

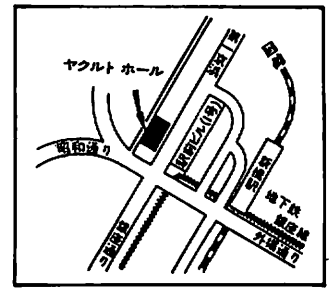
アダムスキー、ステックリング撮影ＵＦＯ映画を堂々1時間半一挙上映！

会員の皆様の熱烈な御支援により、募金も目標額を突破！　本年度の日本ＧＡＰ総会には、米国ＧＡＰ本部よりフレッド・ステックリング氏夫妻を招待し、講演とＵＦＯ実写映画公開による盛大な大会を実施することになりました。御協力に関係者一同厚く御礼を申し上げます。この貴重な機会をお見逃しなく万障お繰り合わせの上、ご出席下さい。

- ●主催　日本ＧＡＰ
- ●日時　昭和52年11月13日（日曜日）　午前9:00より午後4:30まで。
- ●会場　「ヤクルトホール」　港区東新橋1-1-19　ヤクルト本社ビル１Ｆ　Tel.574－7255／国電・地下鉄「新橋」駅下車徒歩３分。（銀座大通りを４丁目方面から歩いた場合は昭和通りとの交差点を直進してすぐ左側）
- ●当日会費　￥2,000

●570名収容の超豪華ホールを使用！





〈ご注意〉

- ●当日会費は会場入口でご納入ください。
- ●ホール内での喫煙、飲酒、食事はご遠慮ください（弁当持込みは不可）。
- ●昼食は休憩時に各自でホール外の場所ですませてください。再入場する場合は必ず胸にリボンをつけること。
- ●入場時に質問用紙を渡しますから、これに質問を記入して係員に返すこと。質問が多数ある場合は主催者側で選択して、「質疑応答」に提出します。
- ●テープレコーダー、カメラ持ち込み可。但し、ストロボ、フラッシュの使用は厳禁。録音内容や、映画の複写内容を他の刊行物に無断で掲載しないこと。
- ●控室へ不意に侵入したりホール外の場所でステックリング氏をつかまえて質問をあびせることはご遠慮ください。

プログラム

10:00―10:30　挨拶　[illegible]　久保田八郎

10:30―11:00　講演「アダムスキーとの八年間と実績」　フレッド・ステックリング

昼食休憩

2:00―2:30　ＵＦＯ実写映画公開（アダムスキー撮影のフィルムとステックリング撮影のフィルムを含む）

休憩

4:00―4:30　質疑応答　フレッド・ステックリング

4:30―4:35　挨拶　久保田八郎

[illegible]

フレッド・ステックリング氏

Mr. Fred Steckling

ステックリング氏はドイツのベルリン生まれ。18歳のときカナダへ移住して航空機とＵＦＯに限りない関心をもち、ジョージ・アダムスキーに師事して研鑽を積むうちにスペース・ブラザーズとコンタクトするという稀にみる体験を持ったＵＦＯ研究界の第一人者です。特にアダムスキーの高弟として最後まで仕え、死の数日前に師が「生命の科学」に関して語った重要な言葉その他の貴重な情報は本誌第58号に詳述してあります。彼は1966年秋にヨーロッパへ講演旅行に行った際、故国ドイツの急行列車の窓から上空に出現したスペース・ブラザーズの大母船団を８㎜映画に撮影し、米国で公開して大センセーションをまき起こしました。このフィルムも持参する筈です。

編者久保田八郎は1975年秋に米ＧＡＰ本部を訪問し、アリス・ウェルズ夫人、フレッド・ステックリング夫妻、その他の方々と会見して多数の情報を与えられ、その詳細は本誌第58号に掲載しましたが、今度は日本で皆様方が直接彼に接して、アダムスキーに関する貴重なお話や驚異的ＵＦＯ実写映画をご覧になれますので、ぜひともご来場の上、すばらしい一日をおすごし下さい。なおステックリング氏の体験記は「なぜ空飛ぶ円盤は来るのか」と題して、文久書林（東京都文京区白山1-29-12。TEL. 813－2495）から出ています。ご一読の上、予備知識をお持ちになることをおすすめします。

日本GAP 月例研究会

支部名	日　時	会　場	会　費	携行品・行　事
東京本部	毎月第2土曜日 午後2:00→6:00 ●ご注意＝11月は総会開催のため、月例会は中止します。	上野公園内「東京文化会館」4階会議室。電話(828)2111。国電「上野駅」の「公園口」下車、改札口の真向かいスグ。会館正面に向かって左側の入口から入り、奥のエレベーターから4階へ行く。	¥200	テキストとして「生命の科学(文久書林刊)」を持参。2:00→3:00「生命の科学」講義、3時→4:30主宰者挨拶・報告、テレパシー練習、休憩。4:30→6:00自己紹介、研究発表、質疑応答。 ＊53年度テキストは「テレパシー」
大阪支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会館」電話(388)7351。国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。	100	テキストとして「宇宙哲学（たま出版刊)」「生命の科学」を持参。
高知支部	毎月第1日曜日 午前10:00→	高知市桟橋通り2－1－55「青年センター」電話(31)4931	100	テキストとして「生命の科学」
新潟支部	毎月第4日曜日 午後1:00→5:00	新潟駅前「青年の家」 電話（44)6766	200	テキストとして「生命の科学」を持参。東京本部例会における久保田主宰者の「生命の科学」講義録音テープ公開。
熊本支部	毎月第3日曜日 午後2:00→5:00	熊本市桜町「熊本市民会館」会議室。電話(55)5235。国鉄「熊本駅」前から市電「健軍」行き乗車、「お城前」下車、同交差点左折、徒歩2分。	100	テキストとして「テレパシー(文久書林刊)」「生命の科学」を持参。2:00→3:00久保田主宰の東京例会における「生命の科学」講義録音テープ公開。3:00→5:00自己紹介、座談、質疑応答。
福知山支部	毎月第3日曜日 午後1:00→5:00	福知山市「福知山市民会館」2F会議室。駅前から右方向の道路を直進し、2つ目の信号機の所。	50	テキストとして「生命の科学」「テレパシー」「宇宙哲学」、久保田主宰者の講演録音テープ公開、テレパシー練習、自己紹介、研究発表、質疑応答。
岐阜支部	毎月第3日曜日 午前9:00→12:00	岐阜市神田町「商工会議所」電話(64)2131。国鉄または名鉄「岐阜駅」下車、徒歩10分、バスか市電で「柳ヶ瀬」下車、近鉄百貨店を北へすぐ近く。	200	テキストとして「生命の科学」「テレパシー」「宇宙哲学」を持参。支部長松尾氏による「生命の科学」解説。質疑応答、座談。
仙台支部	毎月第4日曜日 午後1:10→4:20	仙台市「市民会館」会議室（西公園内） 連絡先＝笠原弘可(29)4305 田中義則(46)1350	200	東京本部月例会における久保田主宰者の講義録音テープ公開、テレパシー練習、座談会。
山形支部	設立準備中。 詳細は下記へご照会下さい。（電話＝上山市内有線3635） 〒999-32 山形県上山市牧野1567、漆山晃治			
札幌支部	設立準備中。（会場は札幌市中央区大通西1丁目、札幌市民会館を予定)。詳細は〒060 札幌市中央区大通東5丁目13 伊藤重信氏へ連絡。			

アダムスキー哲学三大名著　絶賛発売中！

スペースブラザーズから伝えられた宇宙的思惟法と宇宙的な生き方とを三部に分けて詳述。GAP会員必携の書。注文は各出版元へ直接にどうぞ。

G・アダムスキー　久保田八郎訳

宇宙哲学

￥750　〒160

東京都新宿区納戸町33 たま出版　振替東京94804

宇宙問題探求者必読の書

宇宙人から伝えられた人間の生き方を詳述

テレパシー■生命の科学

ジョージ・アダムスキー/久保田八郎訳

￥450　〒160　　￥550　〒160

絶賛！アダムスキーの弟子でありコンタクティーでもあったフレッド・ステックリングのすばらしい体験記と哲学！　特に幼児教育について重要な示唆を与える。宇宙問題探求者必読の書！

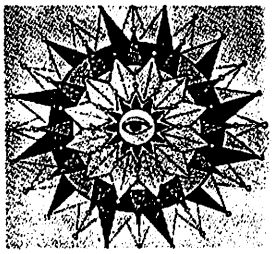
★★なぜ空飛ぶ円盤は来るのか★★

フレッド・ステックリング/久保田八郎訳

好評発売中！　￥650　〒160

文久書林　東京都文京区白山1－29－12　振替・東京2521 Tel.(813)2495

①



②

①オーソン肖像写真
②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第2部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウェルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた名画の写真。(キャビネ判)(カラー写真)

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は"すべてを見透す眼"で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。(サービス判)(カラー)

上記2点共、スペース・ブラザーズとの一体化を図る上で重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本GAP宛直接に振替でどうぞ。

①￥500〒100 ②￥200〒50 一括注文の場合〒100

編集後記

★会員の皆様にはお元気でおすごしのことと存じます。日頃は多大なご支援をたまわり、厚く御礼を申し上げます。日本GAPも創立以来十六年、多難な年月を経過しましたが、十月一日現在で会員実数は約二千名に達しました。これを機会に46頁掲載の予告どおり、今年十一月十三日にはヤクルトホールで盛大な総会を開催し、米国GAP本部よりフレッド・ステックリング夫妻を招待して講演とUFO映画の楽しい一日をすごすことにしました。ふるってご参加下さるようお願いいたします（ステックリング氏の毎日スケジュールはすでに決定済ですから、勝手に無断で個々に招待することはご遠慮下さい。）

★そのステックリング氏招待募金運動にも皆様の絶大なご協力により、目標額百万円を突破しました。よって十一月にはイングリッド夫人と愛娘のエリシアの二人も招待することにしました。総会当日にステージで紹介し、募金総額は本誌次号で発表します。ご支援に衷心よりお礼を申し上げます。

★本号は編者のメキシコ紀行を多数の写真とともに一挙掲載しましたので、八頁ほど増頁しました。旅行にご参加下さった方々に更めて深く感謝いたします。来年も八月中旬より二週間、ユ社主催の第二回宇宙考古学遺跡の旅を実施しますので、希望者は今からご計画下さい。費用は五十万弱の予定で、十二ヵ月払い、二十四ヵ月払いの方法もあります。コースはエジプト、ギリシャ、ローマ、エルサレムの各遺跡、フランスのルールドとパリ見学という順序を企画中で、詳細は「UFOと宇宙」1月号及び本誌次号に発表します。次回の旅行にも編者・久保田八郎が団長として同行します。久保田の乗る飛行機は絶対に事故を起こさず、旅行中は如何なるトラブルも発生しませんから、安心してご参加下さい。

★先般のアメリカ、メキシコ旅行のカラースライド約二百点を製作し、十月八日の東京月例会で公開して好評を博しました。パロマー・ガーデンズ、米GAP本部、メキシコ市のマリア・クリスティーナ・デ・ルエダ夫人の家庭訪問、各地の遺跡等のすばらしい光景が色彩あざやかに展開しますが、特にアダムスキーが"過去透視"によって描いたイエスのカラー肖像画の大写しは圧巻です。地方の月例会にも編者が出張してこのスライドを公開しますから、希望される支部の代表者は早目に編者宛直接にお申し込み下さい。ただし地方出張は来年一月以降とします。

★地方支部にお送りしてある会員名簿をGAPとは関係のない人の講演会その他の目的に流用することはご遠慮下さい。混乱発生を避けるために、今後地方支部を新規設立される場合は、本誌の「GAP月例会案内」に詳細を告知するにとどめて、代表者に該当地方の会員名簿を送付しないことにしますのでご了承下さい。地方支部へ編者が出張する場合の予告としては、本部より直接に該当地方の会員各位へ個々に通知状を発送しますから、支部代表者は事前に編者宛詳細をご連絡下さい。

★ユ社より発行されている月刊誌「UFOと宇宙」は日本GAPとは関係なく、これは大衆向けのUFOとミステリー問題の啓蒙誌ですから、記事内容等について本誌とは性格が異なります。この点を混同されぬようお願いいたします。前者は商業誌であるため、アダムスキーの思想のみに固執するわけにはまいりません。ご賢察の程を。

★編者は超多忙のため会員諸氏からのお手紙に返事を書く余裕が殆どありません。ご質問は恐縮ながら月例会でお出し下さい。ご送金は必ず郵便振替で！(現金書留はお断り)(K)

GAPニューズレター　62号

編集発行人　久保田八郎

発行所　日本GAP

〒133 東京都江戸川区本一色町365－818

振替東京4－35912(久保田八郎名義)

October 20 1977

頒価300円・送料200円